生裁戦士セクレマン

オリーブドラブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生裁戦士セクレマン

【Ｎコード】
Ｎ７０４１Ｓ

【作者名】
オリーブドラブ

【あらすじ】
多数のヒーローを輩出する名門校・宋響学園。その学び舎をアピールするため、生徒会のとあるエリートを抜粋して、コマーシャルヒーロー「セクレマン」を登場させるプロジェクトが発足する。ところが、結局セクレマンになった人物は、エリートとは対極であるばかりか、生徒会との関係もない少年である船越路郎だった。だが、彼にはある事情があり……？

事実上のまえがき

＞i324464｜3790＜

月刊少年エースにて連載中の、犬威赤彦(いぬいせきひこ)先生原作「RATMAN(ラットマン)」の二次創作。特に時間軸は決めていないので、原作本編で言う所のいつごろの時期が舞台なのかは、読者の方々のご想像にお任せします。

「RATMAN」をご存知の方も、そうでない方も読んで頂ければ幸いです。

本作は主人公の視点で物語を進めていく、いわゆる「一人称形式」であり、原作の世界設定に可能な限り忠実に従い（主役ヒーローの設定からして既に原作設定無視してるようなものですが）、忙しい方でもサクッと読みつくせるようにソフトに纏め上げてしまうつもりです。

常識外れなまでにトロい更新速度になるでしょうが、最後の最後までよろしくお願いします！

序章　セクレマン、現る

痛い。
体中が、痛い。
爪先も、指先も、腕も足も。今にも血管が千切れて、血が噴き出して来そうだ。
だが、敵からすればそんなことは知ったことではない。むしろ、好機と取るだろう。ふらつく俺が弱っているものと捉え、組み伏せようとしてくる。
俺はいつものように、軋む身体を力の限り暴れさせ、奴らを振り払う。襲い掛かってきた男達は、俺の振るう鋼鉄の腕に吹っ飛ばされ、椅子に、壁に、机に、その身を打ち付けていく。
それでも、奴らは諦めない。何人かがナイフを取り出し、威嚇の声を張り上げる。
普通なら、腰を抜かしてしまう所だろう。しかし、俺には通じない。

――と言うよりは、そんなものに構っていられる余裕もない、という方が正しいだろう。正直な所、こっちは立っているのが精一杯なんだから。
男達は罵詈雑言を浴びせながら、次々と向かって来る。顔面を狙って突き出された拳を屈んでかわし、鳩尾に肘を突き入れる。蹴りを脇で挟んで動きを封じると、空いた腕から繰り出す手刀で蹴り足を叩き折り、その顎を爪先で蹴り上げる。背後から羽交い締めにされれば、後ろにある頭を掴み上げて、力ずくでコンクリートの床へとたたき付ける。容赦などない。そんな余裕はない。
「ナメんじゃねぇぞぉ、コラァ！」
男の叫びに呼応するように、他の連中も俺に向かって殴り掛かって来る。こんな光景を見慣れてしまった自分にはため息をつかざる

を得ない。

「……しょうが、ねぇな」

ため息混じりに背から引き抜かれた一振りの剣。それが、俺の得物だ。生身の人間相手に使うのはやり過ぎだろうが、こっちも殺されたくはない。

鋼の鎧に、鋼の剣。完全装備で事に臨む俺を前に、さしものならず者達も身構えずにはいられないらしく、いつでも飛び掛かれる姿勢を見せ付けながらも、攻めへの一線を越えようとする気配はない。

そんな奴らの様子を一瞥し、俺はここでカタをつけることにした。長期戦は、俺の身にはきつい。

「うちの生徒に手を出したんだ、堪忍な」

真横に、軽く振る。

それだけで、暴漢共は軽やかに宙を舞い、グシャリと地面に落下した。

さすがに力の差を感じ取ったのか、意識や体力は残っても、立ち上がろうとするものはいない。

「てめぇ、なんなんだ……！」

足元から、今にも消え入りそうな声が聞こえて来る。戦意はないが、恨めしそうではある。

奥には、椅子に縛り付けられたウチの女子生徒が苦悶の表情で俯いている。意識こそあるようだが、状況が状況なだけに正面を直視できないらしい。

自分の学校のスーパーヒーローが助けに来たといっても、こんな怒号と悲鳴が渦巻く戦場のど真ん中に晒されては、不安にもなるだろう。

その時、その女子生徒の喉にキラリと短い刃が光った。

「へ……へへへ！　もうここまでだぜ、ヒーロー気取りが！」

さっきの一撃から運よく逃れた奴がいたらしい。思わぬ奇襲で取

り乱したら、何はさておき襲い掛かるものだが、こいつの場合は今の一振りを目の当たりにして却って冷静になったらしく、女子生徒を人質に取る手段に出た。
「オラァ、この女が惜しいんなら、そのバカでけぇ剣を寄越しな！」
月並みな台詞を吐き、奴は武装解除を要求してくる。「やれやれ」と首を左右に振り、俺は剣を握る力を緩めた。
言うことを聞く気になった……そう思ったんだろう。俺から剣を奪うことに夢中になったのか、女子生徒の首からナイフが離れた。
「これが欲しいんだろ、持ってけ」
気の抜けた声でそれだけ言うと、俺は剣を一気に握りしめ、振りかざす。慌てた男は再び人質にナイフを向けようとするが、それよりも速く、投げ飛ばした俺の得物が奴の刃物を弾き飛ばした。
「落っことすとは、うっかりさんだなぁオイ！」
男が落としたナイフを拾おうとした時には、俺はもう充分に距離を詰めていた。ちょこっと小突く程度の力加減の裏拳で、男は白目を向いてぶっ倒れた。

「さて……俺がなんなのかって話だったよな」
地に伏した生き残りに歩み寄るに連れて、その顔色は蒼白になっていく。
俺はその場に腰を下ろし、俯せのまま憎しみと畏怖の視線で俺を見上げる男に、軽く自己紹介した。
「生徒の手により裁くべきは、世に蔓延る無限の悪意……『生裁戦士セクレマン』。宋響学園を守る、正義のスーパーヒーロー……だったりする、かな」

第一章　船越路郎、戦う

俺は船越路郎（ふなこしじろう）、十八歳。

絵に描いたような、平凡な高校生そのものである……と自称したいところだが、ちょっと難しいかもしれない。

純粋な日本人として、ごくありふれた黒髪でありながら、その端々に赤みが掛かり、さながらメッシュのようになっている俺の頭は、平凡とは言い難いだろう。そんなことを口にしたら、本当にごく普通な全国の高校生の方々に多大なご迷惑が掛かってしまう。

言うまでもないが、念のために言っておく。これは地毛ではない。

あと、自分の容姿だけ説明したら札付きのヤンキーかと思われてしまうだろうから、これも言っておく。俺は心優しい純朴な若者です。お願いだから信じて。

そんな俺は、今まさに学校に遅刻しようとしている。別にケンカとかしてて遅れたわけじゃない。純粋に寝坊しただけだ。

ここから俺の通う私立宋響学園（しりつそうきょうがくえん）までまだ距離がある。学園へ行く通学路は、住宅街の周りに弧を描くように伸びている。それはつまり、住宅街を突っ切れば近道ができるということだ。

担任に大目玉を喰らうことなく、爽やかに午前を過ごすためにも、俺は住宅街へ繋がる曲がり角へ突撃し、

「おわッ！？」

「きゃあッ！」

漫画とかでありがちな、美少女との衝突という、甘酸っぱい青春ラブストーリーの幕開けを思わせる美味しいイベントに直面した――つもりだったんだが。

「いったたた……って、船越君じゃないッ！」

あぁ、出やがった。おいでなすりやがった。今だけは、この娘に

だけは会いたくなかったのに。
「や、ややや、やぁ舞帆さん、朗らか朝ですねぃ」
テンパる余り裏返る俺の声に、ぶつかってきた艶やかなポニーテールが特徴の清廉潔白委員長タイプ的美少女・桜田舞帆（さくらだまいほ）は全てを悟ったように眉をひそめた。
「……住宅街に住んでないはずのあなたがぶつかってきたってことは、近道しようとしてたってことね」
「べ、別にいいじゃんよ！　遅刻には代えられない！」
「前に学園の生徒が、住宅街で他校の生徒と乱闘を起こして子供に怪我させて以来、宋響学園の生徒は住宅街に住んでいる生徒を除いて立ち入ってはならない決まりになったのは知ってるでしょう？」
「俺は別にケンカするためにここに行こうとしたわけじゃねーよ……」
「そう言って自分の都合のために行動する人がいたせいで、宋響学園全体に迷惑が掛かるのよ。自重しなさい！」
凛々しい瞳で俺を射抜く。言い訳の一切を許さない、苛烈なまでの正義感が彼女の特徴と言えよう。
結局、俺は舞帆に引きずられる形で本来の通学路を走ることを余儀なくされ、二人揃って遅刻したにも関わらず、俺だけが怒られる結末となった。まぁ、舞帆には「海外留学から帰ってきたばかりで時差ボケが直っていなかった」という、一応は立派な事情があったからなんだが。
……だって俺、ただの寝坊なんだもの。

△

「ホント、舞帆はすげぇよな。ヒーローみてぇだ」
第二次高度成長期と呼ばれる、科学技術の飛躍的進歩を促す時代を迎えてから、それまで英雄や人気者を指していた「ヒーロー」と

いう言葉は、企業などのイメージアップのためのマスコットや、警察のような働きを勤める「コマーシャル・ヒーロー」の代名詞となっていった。

かつてはテレビの中の存在でしかなかったであろう「ヒーロー」は、この時代における「職業」として実現を果たし、世間に浸透しているのだ。そして、科学開発の果てには多くのヒーロー能力が生み出され、世はまさに「ヒーローブーム」の只中、というわけだ。

今では、あらゆる企業が自社のマスコットとなる専属ヒーローを擁している。中には、自ら企業を立ち上げ、経営者とシンボルを兼ねるヒーローもいたりする。

日本にある、そうしたヒーローを統括している「ヒーロー協会」。そこでライセンスを取得すれば、たちどころにヒーローになれる。そして、試験や実績で成果を上げれば、ヒーローとしてのランクが上がる。今はそういう時代なんだ。

俺の通うこの宋響学園は、過去に多くのヒーローを輩出してきた名門校であり、進学校でもある。生徒の成長を促すことを第一とし、「飛び級」が認められていることが主な特徴の学園だ。現在エンターテインメントで活躍しているヒーローに憧れて、この学園に来た生徒も多い。

校舎などの施設の多くは常に最新のものが用意され、敷地も普通の高校の倍近くはある。ダイヤを模った校章も、なかなかリッチな印象を醸し出している。

舞帆の弟は、ここを飛び級で卒業してヒーローライセンスを取得したらしい。おまけに彼女の父はこの学園の校長と来た。彼女ら一家は、学園近くの住宅街の中でも最も豪勢な屋敷に住んでるんだそうだ。

そして、この宋響学園にもコマーシャル・ヒーローが存在している。企業ではなく、学校の専属であるという、珍しいヒーローだ。

その名は――

「ねぇ、聞いた？　セクレマンがまた一暴れしたらしいよ」
「知ってる！　隣のクラスの子が悪い商売してる人達に捕まっちゃったときに、一人で乗り込んでやっつけちゃったんだよね！」
「なぁ、セクレマンってどのくらい強いのかな」
「噂じゃあ、アンカイザーに負けないくらい強いって噂だよ」
「バッカ！　いくらなんでもそりゃねーだろ」

……そう、この学園の平和を守る、正体不明のコマーシャル・ヒーロー。それがセクレマン。
純白と薄い黄色を基調にした無骨な装甲服とマスク、書記（セクレタリ）を思わせるネーミングから、生徒会書記を務める超エリート様の舞帆が変身しているのかと思われていたが、目撃者の証言によると、セクレマンは性別が男性の可能性があるらしく、他に目星がつくような人間もいないため、「セクレマンは何者なのか」という件は、実質迷宮入り状態らしい。
「なぁ船越、お前はどう思うよ？　セクレマンのこと」
「知らねぇよ……んな事より、俺はテストの方が心配だよ、横山」
「そうだ！　今日って数学の……」
「答案の三割埋めれば奇跡だよな」
ちなみに、この学校は成績ごとにクラスが分けられている。舞帆がいる最高峰のAクラスから、俺や横山がいるような最低辺のJクラスまで、さもヒーローランクのように階級を分けられている。
「格差社会はいつになっても変わらんもんだよな」
「だな……んなことより、お前！　学園祭の準備、大丈夫だろうな！？　本番は十月なんだぞ！」
「わぁかってるよ、心配すんなって」
そんな時、校内アナウンスが俺の名を呼ぶ。
『三年Jクラス、船越路郎君。生徒会執行部までお越しください』

「だぁ、また俺かいッ！」
「お前もつくづく大変だよな船越。まぁ、頑張りな」
生徒会の誰が俺をどういう用事で呼び出すのかは既に見当がついている。こんなことはもはや日常茶飯事なんだから。
おかげで、生徒会のファンからはすっかり目を付けられてしまう始末。踏んだり蹴ったりでござる！
俺は階段をダッシュで駆け上がり、「生徒会執行部」とプレートで表示されている一室の扉を開く。
「……んで、今度は何だよ」
「違うでしょ！　入ってきたら『失礼します、三年Ｊクラスの船越です』でしょ！」
書類やらファイルやらでグチャグチャに散らかっている生徒会の部屋。その最奥に、頬を膨らませる舞帆の姿が見えた。
生れついての茶髪を一束に纏めたポニーテールが、彼女が怒りを表現しようとする都度に可愛く揺れ動く。芸術作品の壁画から飛び出してきたかのような、絶妙なプロポーションに、端麗な目鼻立ち。生徒会執行部などというお堅い身分でなければ、今頃は学校中の男子生徒から熱烈なアプローチを受けているだろう。まあ、敬遠してるのは俺たちみたいな落ちこぼれの連中くらいなもので、Ａクラスあたりになると、羨望の的なんだそうだ。
「生徒会長から、今日の午後までに生徒会室を片付けておくように頼まれてるのよ。……だからあなたも手伝って」
「あのさ、俺は部外者なんだが」
そんなもんは自分で解決してもらいたい。なんとも他人任せな書記様ではないか。逃げようと背を向ける俺だったが、
「――待ちなさいッ！」
部屋の一番奥にいたにも関わらず、ほんの数秒で追い付かれ、後ろから取り押さえられてしまった。
「あなたの更正は、まだ終わってないんだからねッ！」
俺が言うことを聞かないことに腹が立つのか、その顔はほんのり

と赤くなっている。これが怒りのボルテージか。
元不良というハンデを抱える俺にとって、「更正」という言葉は天敵である。理不尽な仕事であっても、「更正のため」と大義名分を立てられるだけで、その場で服従姿勢になってしまう。
「ほら、あなたの将来のためなんだからね！　シャキッと働きなさい！」
「イエッサ～」
山積みになった書類を、本棚に押し込んでいく。チョロいようで、これがなかなか難しい。
「あっ、ダメでしょ！　これはここ、それはそこ！」
書類ごとのジャンルの区分けはかなり複雑で、しかも似たような題ばかり。生徒会の人間じゃなきゃわからんだろ、コレは。
「ああもう、その書類はこっちだってば！」
俺の肩を掴んだり背中を押したりと、彼女は直接俺を動かそうとする。効率が悪い上に、これじゃ俺が彼女の運転するクレーン車みたいじゃないか。
それに、何か手以外の感触も伝わって来る。これは――
「顔を埋めたら前が見えないんじゃないか」
「……バ、バカ！」
慌ててのけ反る彼女の顔は真っ赤に染まり、目が泳いでいる。そのまま後退したところで、今度は踵を床に落ちていたファイルに引っ掛け、尻餅をついてしまった。
「きゃあ！」
「お、おい！」
尻をさすりながら眉間にシワを寄せる舞帆。起こしてやろうかと手を差し延べるが――
「あ、ありが……ッ！」
俺が差し出した手を握る瞬間、何かに気付いたように手を引っ込めると、尻餅の拍子に開いていた脚を閉じ、更にその麗顔は紅潮した。

「何だよ？」
「み、み、見た……？」
「まぁ、チラリと」
「――！」
その瞬間、ガバッと立ち上がった彼女は制服のスカートを抑えながら、恥じらいと怒りをないまぜにした眼光で俺を睨みつける。女の子が男を睨んだって気迫に欠けるのが普通だが、俺は舞帆と同じくらいの身長しかないので、結構迫力があったりする。
「で、で、出てって！」
「ん？　まだ書類の山はあるだろ」
「もういいから！　後は私がやるから！　お願いだから出てってよぉ！」
さっきの怒気はどこへやら。すっかり涙声になっている。俺は「わかったよ」と手を振ると、迅速に退散した。
「まぁ、無理すんなよ」
「あなたは自分の成績だけ心配してればいいのッ！」

△

午後の授業が終われば、生徒達は各々の課外活動に精を出すようになる。舞帆も生徒会の仕事に没頭している頃だ。
一方で、俺は部活をやってるわけでも、バイトをしているわけでもない。だが、暇というわけでもない。一応、することはある。
学園の体育館裏。そこに用があるんだ。
別に誰かに呼び出されたとか、そういうのじゃない。体育館裏に用と言っても、そこは「入り口」でしかない。
体育館は部活動の賑わいでやかましいほどに活気づいている。「気合い出せー！」「もう一丁ー！」と、熱血溢れる練習振りのようだ。
「さて、俺も頑張っちゃいますか」

体育館裏にある、小さな茂み。そこを掻き分けると、ダンゴムシくらいの大きさしかない小さなスイッチが出てくる。
俺ともう一人の人間しか知らないそのスイッチを押し込むと、後ろからガチャリと金属音が鳴り、さらにそこから砂がサラサラと流れ落ちる音が聞こえて来る。
振り返れば、そこには地面より下――地下室へと続く階段。

「学園の平和を守るヒーローの秘密基地がこんなヘンピな地下室とは、わびしいねぇ」
ため息混じりに階段を降りていく。俺の小言や足音が、進んでいくに連れてこだまのように強く響き渡っていくのがわかる。
今となっては見慣れてしまった、最下層。精密なコンピュータが光を点滅させながら、薄暗い通路に道を照らし出す。足元から真っすぐに伸びるライトのおかげで、俺は目的地まで迷わずに進んで行ける。
「達城、おい達城！」
電灯で作られた道を渡りながら、俺はこの地下室の主を呼ぶ。しかし、なかなか返事が来ない。
「俺だ、路郎だ！」
名乗りを上げた所で、突き当たりの扉が開かれ、暗かった部屋全体がライトアップされた。その眩しさに、思わず目を覆う。

「あらん、路郎じゃない。今日は早かったのね」
パソコンに向かったまま、黙々と作業をしていたグラマラスな女性がこちらへ振り返る。
「今日は珍しく補習抜きだったからな」
「うふ、ダメよ路郎。勉強なんかのためにレディを待たせちゃ」
「それが学園を守るヒーローの管理者が言う台詞かよ」
俺は妖艶な笑みを浮かべて上目遣いで見上げる女――達城朝香（たつきあさか）の傍を通り過ぎ、奥にあるサイドカー付きのバイクに跨がる。

「セイサイラーの調整は終わってんだろうな？」
「運転には問題ないけど……どこか行くつもり？」
「バカ、パトロールに行けっつったのはあんただろうが」
俺は達城のパソコンの近くにあるレバーを指差して合図を送る。
応じた彼女は、それを下に向けて勢いよく振り下ろした。
すると、俺が乗るサイドカー――もとい「セイサイラー」の前方に見えるハッチが開かれ、通路が出現した。ここから地上へと繋がる登り坂である。
「じゃ、行ってくらぁ」
「バカやって傷物にするんじゃないわよ」
一気にアクセルを押し込み、轟音と共にセイサイラーは俺を乗せて、発進した。

「みんな知ったらビックリするでしょうねぇ。宋響学園の平和を守るセクレマンを、おバカの路郎がやってるなんて、ね。まあ、本当のアレはこんなもんじゃないんだけど……」
僅かに聞こえた達城の声を、背に受けて。

△

このセイサイラーは、セクレマンとして活動する上で不可欠とされる特注品だ。それだけに、並のスピードじゃあない。黄色と白で彩られた滑らかなフォルムが、風を切り裂き、進んでいく。
……こういう物を扱う道に進んだ以上、どんなトラブルだって避けられないもの。この時の俺は、それを忘れていた。
「い～い気持ちだ。こういうのを役得って言うんだろうなぁ……ん？」
ふと、向こうに見える横断歩道に異変を感じた。目を凝らしていくと、その正体が見えて来る。

そして、悪寒が全身にほとばしる。
「……あれは」
横断歩道の信号が青なのに、突っ切ろうとするスポーツカーがいる。その先には、道の真ん中で立ち尽くす子供の姿。
――いかん！
第六感が警鐘を必死にならしている。俺は加速し、スポーツカーに追い付こうとする。
更に、横断歩道側にも変化が起きた。茫然としていた子供を庇うように、女子高生くらいの少女が立ち入って来たのだ。
当たり前だが、そんな事では車は止まらない。このままじゃあ、二人揃って撥ねられる！

「くそっ――たれがぁぁぁあッ！」

俺は全速力で疾走し、スポーツカーを追い越した。その瞬間、一気にブレーキを踏み込んで、横断歩道の前で前輪を軸に時計回りに回転した。急な加速と方向転換で、脳みそが揺れる。ていうか、遠心力で吹っ飛ばされちまいそうだ。

こうして、スポーツカーに対するバリケードとなった俺は、そのまま追突の衝撃をモロに受けた。
スポーツカーは衝撃の余り後方が跳ね上がり、女子高生と子供のいる横断歩道を通り越して宙を舞い、ひっくり返ってしまった。ガラの悪そうな男女が恐怖に震えながら、車内から這い出てくる。
俺はセイサイラーから投げ出され、近くの建物の壁に思い切り全身を打ち付けてしまい、そのまま落下。
しかも、飲食店の看板にぶつかって肋骨に痛みが走るというおまけ付きだ。折れていないだけマシと言えよう。
少し前の時代なら異常そのものな光景だろうが、ヒーロー全盛の

今時なら、わりとそうでもなかったりする。

生きて地面にはいつくばった俺に、さっきの女子高生が駆け寄ってきた。

「船越さんじゃないですか！　だ、大丈夫ですか！？」

見上げてみれば、セミロングの元気そうな美少女ではありませんか。胸も……なかなかのもんだし。――いやいや、今はそこじゃねぇ。

俺はさっきぶつけた看板を杖代わりにしてなんとか立ち上がる。

「いやぁ、なんのこれしき」

「車に撥ねられてなんともないはずがないです！　病院に行きましょう！」

「いいから。それより、そっちに怪我はないか？」

「私もあの子も大丈夫ですけど……今はあなたが！」

おお、俺の事をここまで心配してくれるとは。身に染みる優しさだ……でも、ちょっと待て。

「君は……何で俺の名前を？」

よく考えたら、初対面なのに俺の名前を知ってるのはおかしい。俺が覚えてないだけなのか？

「え？　あ、あの、その、私は、平中花子（ひらなかはなこ）、って言うんですけど」

平中花子……やっぱり聞き覚えのない名前だ。

「船越さんとは、その、中学の時に……」

頬を染め、さっきまでの快活な印象とは裏腹に大人しくなってしまった。だが、中学の時、と言われると、記憶の映像がうっすらと彼女の顔を映し出してきた。

中学時代、体育の時間で、俺より早く走ろうと必死に追い縋って来ていた、名前も知らない隣のクラスの女の子。名乗ることもせず、ただお互いの頑張りを讃え合った、体育の時間。

いつ失われても不思議じゃない、ほんの僅かな中学時代の小さな

思い出。その景色の中に、名も知らぬ彼女が、確かにいた。
「あ、あの時の娘か！」
俺は目を見開き、平中の顔をまじまじと眺めた。向こうも思い出してくれたことが嬉しかったのか、ぱあっと明るい顔になった。
「うん、うん、そうですよ！　覚えててくれてたんですね！　……って、その髪、どうされたんですか？」
「あ、い、いやこれは……」
「お姉ちゃん、このお兄ちゃん、誰？」
すると、今度はさっき横断歩道で立ち尽くしていた子供が顔を出してきた。
「こら、達弘！　私達を助けてくれたんだから、お礼言わないと！」
「別にいいって。達弘君っていうのか？　怪我はない？」
俺は膝くらいの身長の男の子を前に、腰を降ろして目線を合わせる。笑いかけてみれば、男の子も笑顔で応えてくれた。
「助けてくれてありがとー！」
「はは……どういたしまして！」
達弘君と同じ調子で喋ってみると、隣の平中は微笑ましそうにしていた。

△

「……で、早速やらかしてきたと」
帰ってきた俺を、達城は手荒く出迎えてくれた。罰ゲームで腕立て五百はキツイ。死ぬわ。
「全く、直す身にもなってよね。徹夜は肌に良くないんだから」
「わかってる、悪かったって」
「んふ、それともぉ、お姉さんと熱い夜でも……」
「それは願い下げだ」
俺はセイサイラーを達城に任せると、階段を上がって地上に出る。途中、「そんな調子じゃ、いつまで経っても軽くしてあげられない

じゃない」と、変な小言を叩かれつつ外界を見渡してみれば、そこはもう地下室と大差ないくらいに暗くなっており、一日の終わりも刻一刻と近付いていた。
「やれやれ、まさか追突事故で昔の知り合いに会うとはな」
さっさと帰って寝ちまおう……そう思って校舎を出た矢先のことだった。

「追突事故って、何よ」
「――あ」
校門から出たところにいたのは、まさかの舞帆さん。反応からして、今の独り言を聞かれたのは間違いない。
「あ、あのですね、舞帆さん？　今のは――」
「見せて」
普段からは想像もつかないほどの、ドスの効いた低い声。有無を言わさぬその気迫に、さすがに押し黙ってしまう。
舞帆は無言のまま、俺の腕を取る。そこには応急処置と称してデタラメに巻かれた包帯があった。
俺は何も言えず、息を呑んで相手の出方を見守る。まさか命まで取るようなことはしないだろうが、ものすごく怒ってるのは想像に難くない。成績は悪い、遅刻はする、バイクで事故を起こす……そんな見事な三拍子を揃え、典型的ヤンキーな背景を持つ俺にとうとう愛想尽かして、退学処分にしちまうかも知れない。
「いや、あの、これはだな……」
視線を泳がせ、口をパクパクさせるばかりで、上手くはぐらかす手段が見付からない。いや、今となってははぐらかすこと自体が無謀なのかもしれない。
次第に、舞帆はその身を震わせていく。まずい、火山が噴火する前兆だ。しかし、腕を掴まれてるから逃げることもできん。俺は、血の気が失せた顔のまま、恐る恐る彼女の表情を伺う。

そして、俺は二つの滴を見た。
腕に巻かれた包帯に、ポツリ、ポツリと落ちていく。
その滴の源泉は、悲しげな色を湛え、俺を見上げていた。
痛々しいほどに、か弱いその眼差しは、俺の心を深くえぐる。

「バカ、バカ！　なに危ないことしてるのよ、なにやってんのよ！」
「……悪い、悪かった」
「バカ！　ほんっとに――どうしようもなくバカだわ！　あなたになにかあったら！」
溢れる涙に視界を奪われ、目を合わせることもできなくなったのか、舞帆は俯いてボロボロと滴を垂れ流す。
「更正も、できないじゃない！」

生徒会に所属し、生徒会長を補佐する重役を務める、正義感に溢れた優等生。
そんな彼女が泣きじゃくる姿は普段とのギャップの激しさもあって、見ていられないほどに痛々しいものがあった。

……俺はただ目を逸らし、「悪い」としか、言えなかった。

△

翌朝、俺は何となく早起きをした。
夕べのことを引きずっちまったせいかもしれない。ベッドから身を起こして日に当たっても、洗面台で顔を洗っても、舞帆の涙が頭から離れなかった。
「路郎、今日は早いのねぇ」
「ん、いつもと変わんねえよ」
「そう。……いつもその調子なら、将来も大丈夫かも知れないのに」
長年の苦労を思わせる、皺の寄った顔の母さんは、特に昨日の怪

我も詮索することなく、食卓にパンや目玉焼きを並べていく。いつもの朝食が昨日のことがある分、余計に温かく感じられた。いつものように椅子に座り、何気なくアルバムのように写真を貼り付けた壁に目を向ける。

そこには、ヒーローになる前の俺がいた。

まだ髪が真っ黒で、マジメな頃の俺。初恋の女の子と一緒に笑う俺。やさぐれて、髪を真っ赤に染め上げた俺。二年の終わり、ヒーローライセンスを取る直前の俺。

……そしてその隣には、もう会って話すことはないであろう、アイツの写真もあった。事故で死別した親父の写真も、そこに。

家をいつもより十分近く早く出ると、俺はいつしか駆け足になっていた。のんびり歩いても昨日のように遅刻はしない。ただ、走っている方が気が楽というだけだ。

息せき切って走り続ければ、余計なことを考えなくて済む。過ぎたことで悩むこともなくなる。そんな、単純な考えだった。

短絡思考に身を任せているうちに、舞帆が住んでる住宅街が見えてきた。ちょっとした高級感が滲み出る、綺麗に整備された一軒家が建ち並び、通学路をひた走る俺を、平民を見下す貴族さながらに一瞥しているようだった。

「昨日はあそこで舞帆とぶつかったんだっけな」

先日、近道を企んで舞帆と衝突した曲がり角。その時の映像が鮮明に脳裏に蘇る。

「今日は時間はたっぷりだからな。同じ轍は踏ま……」

そのまま通り過ぎようとしたところへ、人影が立ち塞がった。曲がり角から飛び出してきたその人物は、俺をジッと見詰める。

「……おはよう」

「お、おはよう」

全身に冷や汗が噴き出して来る。まさかの待ち伏せとは。

舞帆は俺の前に立ちはだかると、品定めをするように俺の全身を凝視した。空港でボディチェックでも受けてるような感覚だ。
「結局あのまま病院にも行かずにまっすぐ家に帰ったみたいね」
なんで分かるんだよ。
「あなたの悪いところって、これみよがしに滲み出て来るのよ。自分の体くらい大切にしなさい！」
その表情はいつものように毅然としたものだったが、昨夜の泣き顔を思い出すと、あんまり強く反抗できなかったりする。やりづらいんだよ、ああいうの見たら。
本人もあの時のことを思い出したらしく、頬を染めてバツが悪そうに目を逸らした。
「と、とにかく、もう危ないことして怪我を増やさないこと。わかった？」
心配するだけしといて、深く詮索しない辺りは彼女なりの優しさなのかもしれない。
「わかってる」
……とは言ったものの、正直怪我は今後もガンガン増えて行きそうだ。悪いな、舞帆。

「おはよう、桜田君」
と、第三者の声が聞こえて来る。
舞帆が振り返ると、スラッと背の高い美男子が爽やかに現れた。
「あ……生徒会長、おはようございます！」
ちょっと神妙な面構えだった舞帆は、必死に取り繕ってなんとか笑顔で挨拶に応える。
俺達の前に現れたのは、笠野昭作（かさのしょうさく）。宋響学園の生徒会長だ。成績優秀・容姿端麗・運動神経抜群と、女の理想像が人間の姿を借りて現実世界に飛び出してきたかのような男だ。おまけに航空会社の社長の息子でもあるらしい。
舞帆に話し掛けたかと思うと、そのまま二人で俺にはわからない

ような難しい立ち話に突入してしまった。生徒会の仕事の話らしいが。
「ところで、そこの君は？」
ふと、俺に話を振ってきた。
「え、ええと、彼は私達と同級生の船越路郎君です！　よく登校で一緒になるので……」
「へぇ……」
笠野は感心したように声を上げると、こちらに歩み寄ってきた。敵意はなさそうに見えるが、生徒会長と落ちこぼれという身分差があるせいか、微妙に気後れしてしまう。
そして、俺に顔を近付けると、
「妬けるな」
とだけ言い残し、「じゃあこれで」と立ち去ってしまった。
「な、何て言われたの？」
舞帆が心配そうにこちらを見詰めて来る。いや、なんつーか、誤解されてんな、俺達。

△

学校では、野球部やテニス部が朝練の真っ只中。少なくとも、普段の登校ではお目にかかれない景色だ。
そして、応援に使われるのであろうデカイ旗には、セクレマンのイラストが描かれている。コマーシャル・ヒーローの面目躍如と言ったところか。
「セクレマンが登場してから、どこの部活もみんな練習張り切ってるのよ。『俺達にはヒーローがいるんだ！』って、ね」
「へぇ……」
「船越君も、ちょっとは見習って次のテストで挽回しないと！」
「へいへい」
火付け役になった当のヒーローたる俺が自堕落とは、誰にも知ら

れたくはないことだな。「正体を隠して、人知れず尽力する」ってのはヒーローの醍醐味だが、こんなしょうもない理由でコソコソしなくちゃならんヒーローは後にも先にも俺ぐらいのもんだろう。
学園のヒーロー像とその正体とのギャップ、すなわち自分自身の出来の悪さにに辟易していた、正にその時だった。

「ん？」
突き当たりに見える、柔道部の使う道場。そこから、悲鳴が聞こえてきたような気がした。
練習の時の気合いが外まで漏れて来る柔道部だから、悲鳴自体は珍しくはないのだが、いつも聞いているそれとは、なにか根本的な違いを感じた。なんというか、練習がキツイとか、そういうレベルで上がる叫びじゃない。
「どうしたの？」
不思議そうに顔を覗き込んでくる舞帆。しかし、俺の眼中に彼女の姿はなかった。
柔道部の道場から聞こえて来る、怒号と悲鳴。あれは、練習のものじゃない――！

「ガアアァアッ！」

刹那、コンクリート壁にひび割れが現れ、そこから銀色の突起が飛び出してきた。
何が起きたか判断できず、顔面蒼白になる舞帆を守るように前に立ち、俺はその異常な光景を捉えつづける。
そして、束縛され抵抗する闘牛のようにうごめいていた突起が、遂に正体を現した。道場の壁を突き破り、その轟音に負けないほどの雄叫びを上げる。
二メートルはあろうかという巨体に、白銀に輝く鋼の鎧、弱った獲物を前にしたハイエナのように、我欲を剥き出した凶悪な顔。そ

して、天に向かって伸びる図太い銀色に光る二本の角。
見るからに普通じゃない。そして、ヒーローとも呼びがたい。人間の姿を借りた魔獣と言われれば、そう信じてしまいそうな出で立ちだ。
「な、なによあれ！　人間……じゃないよね、あれもヒーローなの！？」
いくら「正義感に溢れる」と言っても、舞帆もやはり人間の女の子。人かどうかもわからない異常な生物を前にして、恐れもしないわけがない。
しかも、あの巨漢越しにはズタボロに打ちのめされた柔道部員達の姿が見える。命こそ取られてはいないようだが、立ち上がることもできないくらいに痛め付けられてるらしい。
「セクレ……マン！」
巨漢は俺を見付けると、コンクリート壁の破片を掴み、いきなり投げ付けてきた。
「くっ！」
「きゃあ！」
俺はとっさに舞帆の肩を掴んで無理矢理しゃがませた。そのせいで俺の方が避けるのが遅れてしまい、額をコンクリートの中にある鉄筋が掠めて行った。
肉が切れ、赤い筋が額から顎まで伸びていく。
「船越君ッ！」
舞帆が泣きそうな顔で俺を見上げる。心配させまいと笑いかけようと思ったが、残念ながらそんな余裕もない。
「舞帆、あそこで倒れてる柔道部員達を頼む！」
「えぇ！？　ふ、船越君はどうするのよッ！？」
「助けを呼びに行くだけだ！　心配すんな！」
さっき投げられたコンクリートの破片は、後ろの壁にぶつかって更に細かく砕けていた。俺はその一つをわしづかみにして、あのデカブツに投げ付けてやる。

当然効くわけがないのだが、注意は間違いなく俺に向かった。俺に向かって「セクレマン」と呼ぶ辺り、元々の狙いも俺なんだろうが。

とにかく、今はこいつを舞帆から引き離すのが先決だ。俺は巨漢を挑発するようなことを叫び散らしながら、校舎の裏手へ向かう。当の巨漢も、舞帆には目もくれず俺を追った。

「達城！　聞こえてんのか、達城！」

一番人通りの少ない校舎裏へ誘い込むと、俺は達城に連絡を入れる。隠れた角から覗き込んでみると、奴はまだ俺を捜しているらしい。辺りを見渡しながらウロチョロしてやがる。

『聞こえてるわよ。状況はこっちのコンピュータで把握してる』

「説明が省けて助かるぜ！　あいつがあんたの言ってた、宋響学園を狙う刺客って奴か！？」

『そう。名は所沢克巳（ところざわかつみ）……バッファルダと呼ばれる男よ。もう一人はいないみたいだけど……』

俺がセクレマンになる前から聞かされていた、宋響学園を狙う刺客の存在。こいつと戦うために、俺はヒーローになったんだ。

「今こそって奴だな。達城、セイサイラーを出せ！　変身する！」

すると、バッファルダとかいうデカブツは、俺が違う場所に逃げたと踏んだのか、運動場に向かって進み出した。

「マ、マズイ！」

『運動場に行くつもりね。あんなとこに入られたら大混乱になるわよ！』

「当たり前だろうが！　さっさと出せっつーの！」

『急かすんじゃないわよ、待ってなさい！』

ケータイ越しにレバーを降ろす音が聞こえてくる。体育館裏から飛び出してくるセイサイラーを取りに、俺はその場を全速力で立ち去った。

地下室から地上へ上がる際、セイサイラーは体育館裏の倉庫から、床にカムフラージュされた射出口を使って出てくる。体育用具を詰め込んだ倉庫の扉を開ければ、既に修復済みのサイドカーが俺を出迎えてくれた。

『もうとっくに運動場に入られてる頃でしょうね。急ぎなさい！』

「分かってる！」

颯爽と跨がり、フルスピードで倉庫を飛び出す。パトロールの際には、突き当たりの跳び箱に偽装したジャンプ台を使って校舎外に出るのだが、今だけはそれが邪魔に見えて仕方がない。ジャンプ台を避けるように曲がり、まっすぐ運動場へ向かう。

既に目の前のグラウンドでは、突如現れた人型の猛牛の出現に大パニックが起きていた。これ以上、好きにはさせられない。

「さて、始めるか！」

俺は深く息を吸い込むと、意を決してハンドルの真ん中にある赤いボタンを押し込んだ。

「……セクレイド・チェンジャーッ！」

続けざまに、セイサイラーを走らせたまま、両足でタンデムシートに乗る。そこから、今度は真上に向かって跳び上がった。

宙を舞う俺を置き去りに、無人のまま走って行ったかに見えたセイサイラーは、そこで変化を起こす。

突如飛び跳ねたかと思うと、タイヤがバイクの車内に収納され、その形状は折り畳みと展開を繰り返し、やがて鎧の形状になっていく。そして、サイドカーの部分は身の丈を超える巨大な大剣へと変形していった。

その二つは、瞬く間に地に降り立とうとしていた俺に吸い寄せら

れていく。全身にきつく締め付けられるような痛みを感じた時には、俺は鎧と剣を持つ、重厚な騎士の姿になっていた。バックルにあるダイヤの校章が、太陽の光に照らされ、蒼白く輝く。

これこそが、生裁戦士セクレマン。俺の、もう一つの顔だ。

サッカーゴールをへし折ったり、朝礼台を叩き壊したりとやりたい放題のバッファルダ。俺がそこへ立ちはだかると、さっきまでわけもわからず逃げ惑っていた生徒達が、水を得た魚のように歓声を上げる。

「セクレマンだ！」

「すっげえ！　やっちまえー！」

ヒーローを讃える学園の声に背中を押されるように、俺は手にした大剣「生裁剣（せいさいけん）」をゆっくりと構える。

「生徒の手により裁くべきは、世に蔓延る無限の悪意！　生裁戦士セクレマン！」

俺は生裁剣を構えたまま、自分のヒーローとしての名で名乗りを上げる。達城から教わったフレーズだが、決めポーズまでは出来なかった。彼女は「身軽になればポーズも出来る」とか呟いてたが、何の話だったんだろうか？

バッファルダは暴れていた手を止めると、憎々しい顔で歯ぎしりをする。何の恨みがあるのかは知らないし、俺とは何の接点もない男だ。所沢なんて名前も知らない。

確かなのは、宋響学園に仇なす敵、つまりは学園のヒーローたるセクレマンの敵ってことだけだ。

けたたましい咆哮と共に、バッファルダは午前の太陽に照らされ怪しくきらめく双角を俺に向け、突進を仕掛けた。

「なんだって朝っぱらから闘牛ごっこしなくちゃなんねえんだ！」

生裁剣の柄で、真正面から受け止める。さすがにそれだけで止め

られるものではないが、隙さえ作れば後は簡単だ。
「らあッ！」
左側に避けながら柄を滑らせて受け流し、すれ違い様に顎を蹴り上げる。顎を通した衝撃で脳を揺らされた脳筋野郎は目を回し、その場で転倒した。
「ち、クソ野郎が！」
血眼で俺を睨みつけ、バッファルダは俺の前で初めてまともに言葉を発した。今度はドラム缶のように太い腕を広げて、殴り掛かってくる。左腕からのフックを屈んでかわし、右腕からのストレートを生裁剣の刀身でガードする。
「おっと……へぇ、まともに喋れるくらいには知性があんだな」
「黙れやクソガキがァ！」
上手くいなされたことが腹立たしいのか、力任せに次々と拳を投げ込んでくる。巨体から幾度となく繰り出されるパンチの威力は驚異的だが、俺に言わせれば大振りで隙だらけ。要は当たらなけりゃ大丈夫って話なわけで。
「じゃあ、今度はこっちだな！」
水平に薙ぎ払うように振りかぶった腕を飛び越え、両手で大剣を一気に振り上げ、叩き下ろす。
ガードする豪腕を剣の重さで捩じ伏せて、勢いに任せるまま、俺は角の一本に刃を切り付けた。
角は痛みを訴えるようにピキピキと音を鳴らし、やがて破片となって地に落ちた。
「があッ、こ、こんのガキ……！」
みるみる赤くなるバッファルダ。こいつは、より本格的な闘牛になりそうだな。

と、俺が思っていた矢先、目の前のデカブツが顔色を変えた。耳に手を当て、何かブツブツと喋り出した。目を凝らして見ると、耳から口までマイクのようなものが伸びているのが分かった。

……誰かと通信してる？
俺が様子を見ているうちに話が纏まったのか、耳から手を離してこちらを一瞥する。会話を通して毒気を抜かれたのか、その眼差しは幾分落ち着いたものになっていた。
やがて奴は鼻を鳴らして明後日の方向へと突進し、立ち去っていく。
「今のうちに、青春を謳歌しておけ」とだけ、言い残して。

△

学園の受けた損害は小さくはなく、その日の授業は中止となった。この戦いは学園中の話題となり、ヒーロー志望の少年達はそれに夢中となっていた。
最初に襲撃を受けて負傷した柔道部の面々は舞帆の尽力が功を奏して、大事には至らずに済んだ。笠野も迅速に救急車に連絡したりと、手を尽くしていたらしい。
「お疲れ様ね。まぁ、戦果としては上出来だったわよ」
「角一本へし折ったぐらいで上出来とは、甘い基準だな、おい」
「あら、バッファルダの強さはCランク並よ？　Fランクのセクレマンにしてはかなりの大戦果じゃないかしら」
……そう、頭の悪さが災いしてか、俺のヒーローランクは最低辺のFランク。まあ、それだけが理由ってわけでもないんだがな。
俺は事後処理を達城に任せると、地下室からこっそりと地上に上がる。学園から出ると、笠野と話し込んでいた舞帆が大慌てで駆け込んできた。
「船越君！　大丈夫だった？」
「でなきゃ生きてここにいねぇだろ。そっちこそ、もう平気なのか？」
「う、うん、まあね。セクレマンが来てくれたおかげよ」
「セクレマンのおかげ……ね」

ため息混じりに、俺は自分の学園を振り返る。

頭は悪い、優等生には心配かける、そのくせヒーロー気取りで大暴れ……全く、最低のヒーローだよ。

第二章　船越路郎、決める

両手に花。
それは、男にとっては悠久なるパラダイスであり、男の人生においていかなる場合でも誇りとなる、千載一遇にして最大の幸福への懸け橋である。
少なくとも、俺はそう信じて疑わなかった。少なくとも、今日までは。

バッファルダと一戦交えてからまるまる十日が過ぎ、ヒーロー協会や警察の力添えもあってようやく授業が再開したころ、平中から映画館の誘いが来たわけだ。
一匹のオスである俺にとって、これは正しく天命と言えよう。別にまだそんなに大それた関係でもないが、これは忘れ難い一日となる。そう確信したんだ。
そして当日の待ち合わせ場所にたどり着き、平中と遂に顔を合わせたと思ったら、
「あら？　船越君、そんなところで何を……」
ショッピング帰りなのか、両手に袋を持った舞帆とバッタリ。待ち伏せ型のストーカーなのか、あんたは。
「いやぁ、実は俺にも春が来ちゃってさあ」
「ふぇ！？」
情けない声を上げたかと思うと、持っていた袋を落とすほどに驚愕した顔をする。こいつめ、俺が女の子にモテるのがそんなに意外か。まぁ確かに俺にとっても滅多に経験できないコトなんだけど。
「そ、そう。それは良かっ……」
「船越さん、早く行きましょッ！　バイトのお給料貰ったばかりですから、弾んじゃいますよッ！」
舞帆を遮るように可愛らしく跳ね跳びながら、平中は俺の腕に自

分のそれを絡ませる。前は恥じらいの様子さえ見せていたのに、今回はむしろ積極的とすら思えてくる。何かの心変わりか？
「ダ、ダメよ！　やっぱりダメ！」
「はい！？」
なんと、今度はさっきまで一応は祝福してくれていた舞帆が、いきなり反旗を翻してきた。
「女の子なんかと付き合って余計に腑抜けたら卒業だって怪しくなるわよ！　ただでさえ成績が酷いんだから！」
「それくらい平気ですよぉ、勉強なら私が見てあげますから」
絡ませた腕を擦り寄せて、柔らかい感触で俺の感覚を刺激していく。
そんな平中を怪しむように見据える舞帆は、何度か咳ばらいすると、腕を組んで俺達の前に宣言した。
「なら、私が全責任を持ってあなた達を監督します！」

△

こうして、俺達は三人で映画館に向かうことになった。しかも、なぜか舞帆が持っていた袋まで持たされて。
普通なら「両手に花」と歓喜するとこなんだろうが、この二人から蒸気のように吹き出してくる殺伐としたオーラが、そんな華やかなイメージを細切れに引き裂いてしまう。舞帆も平中も満面の笑顔で劇場へ向かうが、その目は一欠けらも笑っていない。
そう、これは言葉で例えるなら「修羅場」。少なくとも、上っ面通りのムードではない。何が彼女達をそうさせているのは知らないが。
おかげ様で、ゆっくり映画を鑑賞することもできなかった。台詞回しはちゃんと聞いていたつもりだが、刺だらけの両手の花が恐ろしい余り、ストーリーはまるで頭に入らなかった。
映画館からまるで世界最高峰の恐怖アトラクションから生還して

きたばかりのように、やつれた顔で出てきた俺を、平中はさらに食事へとエスコート。もちろん、この険悪な空気の元凶たる舞帆付きで。

「ああ～ッ！　楽しかった！　ほら船越さん、ここのパスタはすんごくイケるんですよ！　私のお墨付きです！」

顔を傾けると、セミロングの艶やかな髪がフワッと揺れる。そんな平中の何気ない仕草が、色っぽく、かつ可愛らしく見えた。

そんな女の子との至福の一時も束の間、隣に座る舞帆の踵落としが足の甲に直撃し、俺の意識を痛烈な現実に引きずり込む。

「――お、おふッ！」

「え？　どうかしたんですか？」

「な、なにも……！」

恐る恐る横に目を向けると、獲物を捉えた狙撃手のような眼力で睨みつける舞帆が、「何言ったそばから鼻の下伸ばしてんのよ」と釘を刺してくる。伸ばしたっていいじゃんよ！　だって男だもの。

「船越さん、はい、あ～ん」

そんな折、平中の大胆な行動に拍車が掛かったらしい。フォークに絡めたパスタを、俺の口へと運ぼうとする。

正直、これは危険だ。

ただ仕草の愛らしさにデレデレしたくらいで足を踏むような鬼軍曹が隣にいる状況で、「あ～ん」に応えて甘酸っぱい味わいを堪能するなど、ギロチン台にヘッドスライディングを敢行するようなものだ。

……いや、しかし、こんなチャンスは今後一生来ないかもしれない。今この瞬間に、俺の人生のモテ期が終焉を迎えることになるかもしれない！

「命」と「モテ期」を秤に掛けるなら、懸けるとするなら、答えはもう出ている！

「あ、あ～ん！」
俺は命を投げ出す覚悟で、目を閉じつつ差し出されたフォークに食らい付く。
口の中に、ソースの味が広がっていく。味そのものはごくありふれた、普通のもの。だが、その時感じた味は、徐々に一生忘れられない特別なものに変化していくのだった。

……悪い意味で。

「か、からぁーッ！」
両手で口を塞ぎ、七転八倒する俺。何が起きたのか、この時はまだわからなかった。
汚れたゴミを見下すような目で見る舞帆の顔を見上げるまでは。
「平中さんのパスタ、美味しかったのねぇ～。あんまり嬉しそうだったから、もぉ～っと幸せな味にしてあげたわよ」
その手には、七味唐辛子。瓶の中身は半分以上が失われていた。
俺が目を閉じてパスタを頂く瞬間に、あの量の唐辛子を仕込んだというわけか。使いすぎだろ！
「ひ、酷いですよ！　船越さんが何をしたんですか！？」
「ふん、あなたに尻尾振ってハァハァ鼻息荒くしてるから、天罰が下ったのよ」
心配そうに水を差し出してくれる平中とは対照的に、舞帆はそっぽを向いて顔を合わせようともしない。
「だいたい、さっきから船越さんに嫌がらせばっかり！　そんなにこの人が嫌いなら関わらなけりゃいいじゃないですか！」
「ち、違うわ！　嫌ってなんかない！」
「じゃあアレですか？　他の女の子と一緒にいるのが気に食わないかまってちゃんなんですか！？　そうだとしても、こんな酷いことしていい言い訳にはならないと思います！」
「そ、それも違う！　私はただ――」

会ってまだ数時間しか経ってない二人は、早速いがみ合い。舞帆が何かを叫ぼうとして、言い淀んでいた時だった。

△

俺の携帯が着信音を鳴らし、二人の会話を阻害した。一触即発の空気の中で発せられただけあって、視線が著しく俺に集中してくる。

「あー……ゴホン、えーと、もしもし」

白々しさを滲ませつつ、俺は電話に出ることにした。この空気をごまかす好機になればいいが……。

『路郎！　コンピュータに反応が出たわ！　バッファルダよ！』

――どうやら、ごまかすどころかデートにすらならなくなったようだ。

「ち、マジかそりゃあ！」

『残念ながら大マジよ。今、そっちに向かってる！』

「こっちに？　……狙いは俺か」

『いえ、恐らく違うわ。奴は――』

肝心なところで聞きそびれてしまうのは、お約束らしい。まあ、察しは付くがな。

ガラスが砕ける音に続き、得体の知れない巨漢に対する悲鳴が耳をつんざく。

「きゃあああッ！」

「なんだあいつ！」

闘牛が人間に中途半端に化けたようなその姿の異様さは、飲食店にいる客の視線を強く引き付けた。

そして、バッファルダの丸太のような腕が血管を噴き上げ、テーブルの一つを殴り飛ばした。それは手裏剣のように俺達に向かって

飛び出してくる。
一瞬の内に目の前から迫る木製の刃に、全身が総毛立つ。
「くそッ！」
「わあ！」
「ひゃあッ！」
舞帆と平中を抱えるようにして伏せる。
俺達をすり抜けて壁に激突したテーブルは派手に砕け散り、パラパラと木片が背中に降り掛かってくる。
『大丈夫？　路郎』
「大丈夫に聞こえんのかよ！　とにかく、変――」
そこで、俺は左右に目を向ける。
舞帆も、平中も、正体不明の脅威に身を震わせ、体全体で助けを求めている。
彼女達を置いてここから離れても、セクレマンに変身して駆け付ければ、助けることはできる。
だが、俺がここにいない間に二人に何も起こらないとは限らない。
達城が言ったように、狙いが俺じゃないとしたら、誰かが必ず傷付いてる。
『路郎、あなたは知ってるはずよ。セクレマンは宋響学園の専属ヒーロー。その外部でのトラブルは管轄外なのよ』
「そんなことはライセンスを取る前に耳にタコができるまで聞かされた」
俺は、宋響学園専属のヒーローであって、この店は管轄ではない。つまり本来は、ここで何があっても知ったことじゃない。だけど、だからこそ俺は――
「この際、正体がバレたっていい。セイサイラーをここに呼べ、達城」
『……』
悪霊にでも取り付かれたかのようにどす黒い俺の声に、達城は無

言で応える。レバーをガタンと下ろす音が電話越しに聞こえてくる。
次の瞬間、悍ましい悲鳴を上げたバッファルダが宙を舞い、もんどりうって倒れた。
地中から床を突き破って店内に入ったセイサイラーの車体が、先端部分でアッパーカットをお見舞いしたのだ。
「なに！？　今度はなんなの！」
平中はすっかり涙声になってしまっている。無理もない。何せ、彼女はあいつを初めて見たのだから。
既に面識のある舞帆はまだ冷静だが、やはり震えが止まる様子はない。どうやら、一番知られたくない人物に知られることになるようだ。
「……舞帆」
「な、なに？」

どうせバレるんなら、ヒーローらしくカッコつけちまおう。俺は怯えるように身をすぼめる彼女の肩をそっと抱き寄せて、その耳元に優しく、強く囁く。
「お前にも、平中にも、俺が力になるから。だから、お前はそのままでいてくれ」
その言葉に、可愛らしく頬を染める舞帆。いつまでも見ていたい姿だか、今は余韻に浸る暇すらない。
俺は身を起こしてセイサイラーに飛び乗り、彼女が見ている前であの赤いボタンを強く押し込んだ。
「セクレイド・チェンジャーッ！」

鋼鉄の鎧が全身を締め付けて、体中の神経が悲鳴を上げる。意識さえ僅かに薄れるほどの痛みの中で、何度これを味わえばいいのかと、俺は心の奥でひっそりと嘆いた。
「……うそ」

自身の身長を凌ぐ大剣を振り上げ、異形の猛牛と相対する俺の姿に、舞帆は我が目を疑っている。
俺が評するには勿体ないくらいに美しく整った顔も、恐怖と驚愕で痛々しく引き攣っている。それは、やっと状況を飲み込めてきた平中も同じだった。
「――俺が、セクレマンだと」
機械仕掛けの仮面越しに開いた俺の口から発する言葉に、舞帆はビクリと肩をすぼめた。
「知ったら、お前は軽蔑するか？　幻滅するか？」
問い掛けに、彼女は答えない。いや、俺には答えを聞くつもりはなかった。ただ、正体を明かした以上、伝えたいことがあるってだけの話だ。
「それでもいい。それでもいいから、今は……ヒーローなんて抜きにして、ただの同級生を見守っていてくれ」
ここは学園じゃない。このヒーローが、セクレマンが関与すべき戦いじゃない。
だから、ここに立ってるのは、彼女達を守ろうってバカは、ヒーローなんかじゃない。船越路郎っつー、ただのガキだ。だから、敢えてヒーローとしての名乗りは上げない。

△

「イチャついてんじゃねぇぞガキがァ！」
バッファルダは怒号と共に、足元に転がっていた椅子を蹴り砕く。粉々になった破片がつぶてとなって、俺の全身に降り懸かる。
思わず両腕で顔を覆い、こっちに向かって降り注ぐ木片の雨を凌ぐ。
――次の瞬間には、奴の鉄拳が俺の顔面を打ち抜いていた。
鉄仮面が無ければ、頭蓋骨も粉砕され、床の上にスパゲッティでもこぼしたかのように脳みそをぶちまけていただろう。

ここは室内で、一般人も多い。前の時のように、生裁剣で暴れられないのは正直言って致命的に痛い。まともな力勝負じゃ歯が立たないのが明白だからだ。
地を転がる俺を汚物を見るような蔑んだ目で見下ろし、バキボキと拳の骨を鳴らして威嚇してくる。
「ほらァ、立てよ」
俺の鉄兜を掴み上げて、無理矢理立たせようとする。俺は膝立ちになるまで引き上げられた瞬間、その手を払って鳩尾に拳を叩き込む。
一瞬咳き込んだところへ畳み掛けるように生裁剣を振り下ろす。しかし、今度は奴のフックに剣の腹を殴られ、得物を振るう軌道を捩曲げられてしまった。
すると、バッファルダは頭を俺の下腹部に向けて、そこで一気に天井へと突き上げた。
「なっ――が！」

何が起きたのかを脳が判断した時には、既に俺は天井の照明に全身に打ち付けていた。
「おォおォ、屋根があってラッキーだったな。無かったらお前、そのままお星様になってたぜ」
破損した電灯に引っ掛かったままぶら下がる俺を見上げて、闘牛まがいのヒーローもどきはせせら笑う。

「ラーベマンはどうしたよ？　呼べば助けに来てくれんじゃねェの？」
「ラーベマンだと？」
バッファルダが挙げた名前には聞き覚えがある。
ラーベマンといえば、「ラーベ航空会社」の専属ヒーロー。Bランクの保持者である、いわゆるエリートヒーローだ。
「そんな奴と俺に何の関係が……」

「いやァ、お前には関係ねェんだが……まァいい」
そう口にした一瞬の間に、奴は俺の眼前まで跳び上がり、俺を壊れた照明ごと引きずり落とした。
「うが――あッ！」
「ははッ、いい声で鳴くなァおい！　あのBランク殺しにも聞かせてやりてェぜ！」
ゴキブリをスリッパで叩くように、片手で持ち上げたテーブルで何度も背中を殴られる。
背中から突き刺さる感覚に肺の奥から悲鳴が上がり、気管を通して俺の口から血ヘドが噴き出す。目に映る鏡の破片に、マスクの部分から赤い筋を幾つも流しているセクレマンの顔が見えてきた。
醜く地を這う俺の姿は、やがて冷たくなって動かない舞帆や平中の体に歪んでいく。これは、錯覚だ。それは分かってる。だが、分かってるからこそ、それが現実になるかも知れないと思うと震えが止まらなかった。
これはただの錯覚。そう、ただの錯覚で終わらせるんだ。そのためにも、俺は絶対――

「まー、とりあえず死ねや」

頭上から冷たく言い放たれた一言と共に、俺の背中が冷たくなる。
背中から全身に伝わる異物感。それが、天井の破片が突き刺さったものだと気付くのには、そう時間は掛からなかった。
「……おあああああッ！」
自分の体が刺された部分を中心に、冷たくなっていく。常軌を逸した痛みに叫びながらも、俺はどうすることもできずにいた。
「さァ、次は脚でも折るか」
標本にされた蝶のように身動きが取れない俺の右足を両手で掴むと、妙な方向に捩りはじめた。本来の人間の関節ではありえない向きに、じわじわと。

「あ、う、ああ！」
徐々に脚が捩曲げられ、それに抵抗できない現状に、俺は跳ね退け難い恐怖を覚えた。
「ほれほれ、もっと鳴けよ。こうすりゃア、もっと――」
全身で悲鳴を上げて痛みを訴える俺とは対照的に、バッファルダはまるでゲームに熱中しているかのように、俺への嗜虐にのめり込んでいる。
そろそろへし折ってしまおうと思ったのか、俺の脚を握る力が強くなったのを感じた。そして、
バキッ。
そんな音が聞こえた。
「ぐはあッ！」
短く叫び、バッファルダは頭を床に打ち付けながら激しく転倒した。
「なッ――！？」
脚を折られると思っていた俺は、一瞬の出来事に目をしばたかせる。
眼前に映るのは、赤いボディスーツで身を固め、翼のように端がギザギザに割れたマントを纏う一人の男。俺より身長が高く、それでいて華奢なそいつの姿に、俺は見覚えがあった。
「ラーベマン――！？」
「ひ、寛矢！？」
すると、それまで涙でくしゃくしゃになった顔で戦況を見守っていた舞帆が、急に声を上げた。
なんで舞帆がこいつを知って――いや、待てよ。
随分前のことだか確かに聞いた。舞帆の弟がヒーローライセンスを取っていると。
「お前が舞帆の弟……！？」

「ええ、あなたが船越さんですね。母から聞いています」
「母……ね」
「後は僕に任せて」
寛矢と呼ばれていたその男、ラーベマンはマントを鮮やかに翻し、バッファルダと対峙する。

「調子くれやがって……何が『僕に任せて』だ！　てめェのパンチじゃ軽すぎて蚊が刺した程度ですらねーぞ！」
「さて、この脳筋はどう黙らせたものか」
「スカしてんじゃねェ！」
怒声が店内に激しく響き渡り、周囲の一般客を畏縮させる。そんな中、一人涼しい顔をして悠然と構えているラーベマン目掛けて、一直線に突進を仕掛けた。
「来たぞ！」
「ちょっと我慢してください！」
「なに――ごはッ！？」
あろうことか、舞帆の弟は俺の背に刺さっていた破片を抜き取ると、槍のように投げ付けた。
「てぇッ！」
矢のごとく空を切って飛ぶ破片だったが、バッファルダの角はそれをさえものとしない。乾いた金属音が響くと、弾かれた破片は宙を舞った。
「ハン！　ざまァねェな、さっさとくたばー――」
言い終えないうちに、勝利を盲信していた巨漢は徐々にスピードを落とし、やがて両目を覆って動きを停止した。
そこから流れていたもの――赤い筋。血だった。
「船越さんに、協力してもらったんですよ」
澄み切った声で、俺が一体何を仕掛けたのかを問う前にラーベマンが口を開いた。
「あなたの血。目潰しにね」

彼が投げた破片には、俺に刺さっていただけあってかなりの血が滴っていた。角に弾かれた瞬間、空中に飛び散ったそれはバッファルダの目にも降り懸かっていたわけだ。
「ぐっ、おおお！　こ、このハト野郎が！」
顔を覆い、膝をつく闘牛。勢いを失い、まさしく牙を抜かれた状況だ。
「戦いにおいて、目が見えないことほど不便なものはない。既に決定的ではあるけど――ヒーローはやっぱり必殺技で締めないとね」
視力を封じられ、身動きが取れず錯乱しだしたバッファルダとは対極の落ち着きで、ラーベマンはマントを広げた。今まさに巣立とうとしている鳥のように。
「――ハアッ！」
ここが屋内だからか、大きいモーションから動き出した割には随分な低空飛行だ。床との距離はほんの十数センチ。それだけに、ラーベマンが飛んでいる辺りにはかなりの量で埃が舞い上がっている。
大きく弧を描くような動きで、僅かな高さで空を飛ぶと、人型の鷹は瞬く間に視界を奪われた猛牛の背後を取った。
その場で羽交い締めにしたかと思うと、今度は天井への激突を顧みない勢いで、急上昇を始めた。
「寛矢、危ない！」
舞帆の制止が言葉となって発せられるより速く、ラーベマンは天井を突き破り、快晴の青空へ旅立って行った。

「ほぅら、空中旅行をご堪能あれ！」
遥か空高く、そこらのビルより高い世界へ、バッファルダの巨体が解き放たれた。
「う、お、あああああああああああ！」
凄まじい断末魔が、下にいる俺達にまで響いて来る。その叫びが耳をつんざく余り、声の主がこの飲食店の外に墜落した轟音も、ほとんど聞こえてこなかった。

……なんつー、えげつない必殺技だ。助けてもらっといてこう言うのも忍びないが。

△

ラーベマン……本名は桜田寛矢（さくらだひろや）。舞帆の弟であり、宋響学園を飛び級で卒業した、筋金入りのエリートヒーロー。彼の活躍は、翌日の新聞の一面をド派手に飾った。

「飲食店を襲った暴漢、ラーベ航空会社の使者が成敗！」なんとも骨太な見出しではないか。

ボロクソに痛め付けられた俺については一切触れられていない。ヒーロー協会の体裁の都合なんだろうが、バッシングされるよりかは俺としてもマシだ。なんだか寂しい気もするが。

それから、バッファルダについても詳細は報道されなかった。何らかのヒーロー能力を持っていたとは思うんだが、俺には何一つ知らされなかった。協会としてもヒーロー能力の持ち主が大暴れしたとは知られたくないんだろう。

「大丈夫ですか、船越さん？　さっきから難しい顔してますけど」

「ん？　ああ、気にすんなよ桜田」

俺は怪我の大事を取って、病院送りとなった。消毒液のヤな臭いで充満しているこんな病室まで見舞いに来るとは、この寛矢とか言う舞帆の弟は底無しの善人のようだ。俺の血で目潰しするときの無茶振りだけはいただけないが。

俺よりも背は高いし、イケメンだし……姉といいこいつといい、桜田家は完璧超人の量産工場かなんかなのか。

感心していると、寛矢は真剣な表情で俺を見詰めた。

「今日ここへ来たのは、船越さんにご自身の話を聞かせていただくためなんです」

「俺の？　そんなもん聞いてどうすんだよ」

せせら笑う俺だったが、ここの扉を猛烈な勢いで開けた二人の客人が、その微笑を断ち切った。
「私に隠し事なんて、いい度胸じゃないの、船越君！」
「そうですよ、私ビックリしました！　船越さんがセクレマンだったなんて！」
舞帆と平中……なんでここを知ってんだよ。
俺は気まずそうに目を逸らすが、彼女らはそれさえ許さないと言わんばかりに、俺が寝ているベッドの上にまで乗り上げてきた。
「なんであなたがセクレマンなのよ！　どうして、何も言わなかったのよ！」
「同感です！　水臭いって言葉が今この瞬間のためだけにあるみたいですよ！」
こないだの模試の成績を母さんに見られた時に近い心境だ。早く夜にならねえかな、早くこいつら帰らねえかな。切実にそう願う俺がいる。
「あなたのことを聞いてから、是非話を伺いたいと思っていたんです。どうしてあなたが、姉さんに代わってセクレマンになると決めたのか」
割って入ってきた寛矢の発言に、舞帆の顔が凍り付く。
「何よ、何よそれ。船越君が……私の代わり！？」
「そうか、やっぱり姉さんは何も――」
「もう、何なのよ！　答えて、答えてよぉ！」
綺麗な髪を振り乱しながら、舞帆は弟を遮って俺の両肩に掴み掛かる。平中が慌てて止めに入るが、その力が緩む気配はない。
その様子に何かしらの無力感を感じたのか、平中は力無く椅子にへたり込むように座った。
「あんなに傍にいたのに、何も知らなくて何もできなくて……これじゃ、ひかりに合わせる顔が無いよ」
「――あ？」

今度は、俺の顔が凍った。
時が止まったように、意識はあるのに、体が動かない。
思い出したくない、それでいて忘れたくもない記憶。それが今、たった一言で呼び起こされようとしていた。俺にとって、良くも悪くも忘れられない、彼女が。
「――！」
無意識のうちに力ずくで舞帆の腕を払いのけると、平中に真顔で迫る。
「ちょっと待て。『ひかり』だと？」
「え？　は、はい。私の友達で、その……あなたのことを教えてくれた……」
「文倉、ひかりか」
俺が出したフルネームに、平中が目をしばたかせる。それは、やり取りを見ていた桜田姉妹も同じだった。
「え、何？　誰よ、文倉って！？」
「船越さん、僕達にも説明して下さい」
……患者を労る気持ちってのが無いのか、こいつらは。
――いや、問題はそこじゃない。

俺が、セクレマンになったこと。それが舞帆の身代わりを意味していたこと。そして、「文倉（ふみくら）ひかり」のこと。
もしかしたら、全てを吐き出すいい機会なのかも知れない。話すことで、何かが楽になるとしたら。

「……」
俺は自分に注目する周囲を一瞥し、一息つくと、窓から見える遠くの景色に目を向けた。
ここから見たらミジンコのように小さく見えるヒーロー協会のビルくらい、遠い記憶。

忘れられない、忘れたくない、そんな気持ちをないまぜにして封じていた、俺の幸せと不幸せが同居する過去。
そのパンドラの箱を、俺は今、こじ開ける。

「……俺の、コト、かぁ」

第三章　船越路郎、振り返る

三年前、中学三年になったころ。
俺はその時、初めて恋というものを知った。

何気ないまま進級し、受験シーズンを迎えたものの未だ志望校を決められない。
というより、決める気がない。
どうせ地元の普通の高校に入るのだろうが、担任からは「お前の成績ならもっと上に行ける」、などと無責任な期待の言葉を掛けられていた。
確かに成績は学年内ではマシな方だったが、別にいい高校に入りたくて勉強してたわけじゃない。他にすることがなかったってだけの話だ。
それでも周りの連中は俺を優等生のように見ていた。特に何かいいことをしてきた覚えはないが、成績が良かったり、人畜無害だったり、人の相談には一応乗ってやったりで、（俺にとっては）当たり前のことを重ねてきた結果らしい。
体育の時間には、他所のクラスの名も知らぬ女の子に話し掛けられ、名乗ることも忘れて仲良くしていた。

そうした平凡で、荒波のない中学生活を送っていた俺が、担任に早く志望校を決めるようにと言われだした日。
昼休みで飯を食い終えた後、トイレに行こうと階段を降ろうとした瞬間だった。
「――お？」
足元に見える自分の足とは違う影。
見上げれば、頭上には教科書やらノートやらが軽やかに空中を漂

っていた。
そして地球の引力に引かれて迫る、それら諸々。
手で顔をガードする暇もなく、雨あられとばかりに顔面にラッシュ。
「ほびゃぁ！」
「あああっ！　大丈夫ですか！？」
顔を覆ってうずくまる俺に、上の階段から同学年と思しき女子が駆け降りて来る。目に当たらなかったのが不幸中の幸いと言ったところだが、それを差し引いてもこれは結構痛いぞ。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！　階段の所で人とぶつかった時に落としちゃって、下にいたあなたに……ごめんなさい！」
振り子のように頭を振って謝る彼女に、俺は目を合わせた。

滑らかなラインを描いて腰まで伸びたロングヘアに、ぱっちりとしたつぶらな瞳。美の神が手掛けたであろう流れるようなボディに、整え尽くされた目鼻立ち。
正直に申し上げます。一目惚れだチクショウめ。
「あ、あの……大丈夫ですか？」
「ほぇ！？　――おお、大丈夫大丈夫！　大丈夫過ぎて死にそうだ！」
「えぇ！？　どっちなんですか！？」
悟られまいと必死に取り繕う俺の言葉に、少女はますますテンパる。
それが俺の初恋相手、文倉ひかりとの出会いだった。

△

それから、俺は迅速に志望校を決め、隼のような速さを以て本格的な受験勉強に取り組んだ。

目指すは名門私立――宋響学園。
担任は「やっとその気になってくれたか」とホクホク顔。その通り、俺はその気になった。
何たって、文倉がそこを狙うって言うんだからな！

普段以上に机に向かい、普段以上のペースで過去問を解く。今まで必要としていなかった参考書にまで手を伸ばし、「十分でわかる英会話」などと胡散臭いタイトルを次々と買い込んでいった。
それでも塾には通わなかった。文倉と話す時間が減るからだ。俺は文倉が通う塾の近くで待ち伏せては、勉強を終えた彼女を癒そうと喫茶店に誘ってコーヒーをおごった。
典型的な文学少女であった彼女は俺にいろいろなこと（特に国語と古文）を親身になって教えてくれた。交通事故で両親が亡くなってから、加室孤児院（かむろこじいん）という養護施設で暮らしているという身の上を聞いてからは、なんとか力になってやりたい、とも思うようになった。
歩くときは歩調を合わせ、街を渡るなら自分が車道側に立つ。デートの鉄則も忘れない。向こうはそんな認識はないんだろうけど。

そんな折、年末と共に舞い込んできた模擬試験の結果が帰ってくる。
俺も文倉も、かなりの高評価。二人揃って手を合わせて歓喜した。
これで上手く合格すれば、もっと文倉と話せる、もっと文倉と仲良くなれる。そんな淡い期待を抱く俺に、彼女は願ってもみない提案を投げ掛けた。
「ね、ねぇ……船越君」
「どうした？　お腹空いたのか？」
「い、いやその、そうじゃなくて……」
胸の前で指を絡ませて、頬を染める彼女の姿に思わずクラッと来てしまいそうになるが、グッと堪えて文倉から目を離さないように

する。
そして、彼女の発した次の言葉に、俺は凍り付いた。嵐の前の静けさの如く。
「もし……もし受かったら、私達、な、名前で呼び合って、みない？」
硬直。
体の奥にある全てが凍り付き、それに比例して全身が動かなくなる。
そして、今度は凍った体の最奥にくすぶっていた熱がところせましと暴れだし、やがてそれは全身の氷を溶かしていく。
その勢いは体中が氷解してからも留まることなく、彼女の前でその熱は暴発し、狂喜という形になって噴火した。
「――ぶはあああッ！」
「きゃあっ！？」
体内から火山が爆発したかのように全身で衝撃を表現する俺の姿に、文倉は慌てて腰を抜かす。
「い、い、いいのか！？　いいんだよな！？　嘘ついたらハリセンボン！」
「ふ、船越君、鼻血すごいよ……」
混乱と喜びでわけがわからなくなっていた俺に、彼女はややビビってる様子。
それでも、俺を拒絶することはなかった。
付き合いはほんの半年足らず。
たったそれだけの間でも、俺は彼女に十分過ぎるほどに惹かれていた。
彼女の方はどうかはわからない。そもそも、異性としては見られていないかもしれない。だが、俺はそれでも構わなかった。
一緒にいられて、おしゃべりできればそれで良かったんだ。

「や、約束だぞ！　約束だからな！？」
「うん、うん！　……約束……」

△

その日の晩、合格すれば文倉をひかりと呼べるんだと、ウキウキした感情に身を任せて帰宅した俺を、アイツが出迎えた。
「よぉ、路郎ォ！　見たぜ見たぜ、いい女連れて色ボケてんじゃん！　そんなんで宋響に受かんのォ？」
「弌郎――帰ってたのかよ」
……年の離れた実兄、弌郎（いちろう）だ。
血の繋がった実の兄弟ではあるが、正直言って、関係は最悪だ。
というのも、こいつは女遊びにしか興味を示さず、ろくに働きもせず、引っ掛けた女に貢がせて生計を立てているような輩で、母さんにもほったらかしにされている始末だ。
最近はヒーロー協会で働く女性職員にまでちょっかいを賭けているらしい。ますます嫌になる。
「で？　で？　胸はどれくらいあんのよ？　締まりはいいか？　感度良好？」
染め上げられた金髪をなびかせ、もたれるように俺の肩に腕を絡ませてくる。
どうやら、俺と文倉が一緒にいることもご存知らしい。苛立ちに拍車が猛烈に掛かっていく。
「うるさい！　弌郎には、関係ないだろ！　俺に関わんな！」
家全体に響き渡るように怒鳴り散らし、俺は自室に駆け込んだ。
「はぁ……」
ベッドに体を投げ出して天井を見上げると、自然とため息が漏れてくる。
弌郎の起こす女絡みのトラブルのせいで恥をかかされるのは、も

うたくさんだ。
小学生の時は、当時風邪を引いていた母さんに代わって授業参観に来たと思えば、担任の先生の胸を揉んで体育教師につまみ出されていた。
中学に入ったころには、教師のみならず生徒にまで手を出すようになり、警察沙汰寸前までいってしまったケースもある。
死んだ親父も生前はかなりのドスケベだったのだそうだ。もしかしたら血なのかも知れない。
そう思うと結果として自己嫌悪に帰結してしまうのだが、それでもくじけている暇はない。
「文倉……そう、文倉なら、きっと仲良くやっていけるはずだ！」
頭を切り替え、勉強机に向かう。
いい家族なら見習えばいい。悪い家族なら反面教師にすればいいんだ。
要は、俺が俺の嫌うような奴にならなければいいんだから、女の子を泣かせるような奴にならなければいい！
その一心で、俺は宋響学園を目指した。

△

やがて迎えた卒業式。
俺も文倉も無事に合格を果たし、互いに名前で呼び合う、という感無量な報酬も手に入れ、まさに幸福は絶頂期を迎えていた。
そして、俺は決めていた一つの挑戦に臨もうとしている。
もし受かったら――名前で呼び合えたら――俺、告白するんだ。彼女に。
それが危険な賭けだとはわかっていた。ここまで行っておいて、もしフラれたら全てが水の泡。
だが、今なら行けそうな気がしていたんだ。そうでなくても、こ

の気持ちを抑える余力は、もう残されてはいなかった。
「大丈夫、きっと、大丈夫だ」
文倉――いや、ひかりをメールで呼び出し、体育館裏を待ち合わせ場所とした。
『君に伝えておきたいことがある。体育館裏へ来てほしい』。我ながら陳腐な文章だ。
でもきっと、俺と同じように卒業生のバッジを付けたひかりが、来てくれる。そう信じていた。
約束の時間。約束の場所。全て間違いはないはずだった。
しかし、彼女は来なかった。
――なんだ？　やっぱり性急過ぎたのかな。
やはり焦り過ぎたのか……そう後悔の念が込み上げてきた時、俺の携帯がメールの着信を知らせようとズボンのポケットの中で暴れ出す。
取り出したところで、俺はそこに表示された発信者の名前に目を見開いた。
「ひかりからだ……」
どんな内容だろう。俺の用を察して、恥ずかしがってメールで返事しようってとこなのか？　そんな考えが過ぎった時、再び俺の体に緊張が走った。
震える指で、恐る恐る操作していく。着信された、ひかりからのメール。
それを意を決して開くと、
『今までありがとう。さようなら』

とだけ、淡泊に書かれていた。

「さようならって――なんだよ！？　俺、まだ、何も言ってない。好きだって、言えてないッ！」

納得が行かず、俺は『どうしたの？』と返信する。しかし、いつまで経っても返事はない。

――ひかりだって、宋響には受かったはずなんだから、さようならだなんて、ありえないだろ！　やっぱりアレか、俺なんかとは付き合えないってことか！？　それとも、突然の引っ越しとか！？

その時、またしても携帯が着信を知らせる振動を俺に伝えてきた。一瞬ひかりからの返信かと期待していたが、この着信音は電話のものだ。

握りしめた携帯を開き、発信者の名前を見る。

そこで、目を疑った。

「な、なんで弍郎から……！」

このタイミングで弍郎から電話が掛かってくる。その意味は考えなかった。考えたくはなかった。

目に浮かんだ真相の姿を必死に掻き消し、俺は敢えて通話に応じる。ひかりとは関係ないのだと、自分に確信を与えるために。

『よぉ、路郎。青春ハッスルしてるかい？』

いつもと変わらない、軽薄な声で俺の耳をつんざく。本当ならいますぐ切りたいところだが、それではわざわざ電話に出た意味がない。

「御託なんていらない。何の用だよ！」

『まーまーマーマレード、そういきり立つなよ。お前の絶倫じゃあ

彼女だってブッ壊れちまうだろ』
「彼女……？　ひかりのこと、言ってんのか！？」
すると、俺の怒号に反応するかのように、誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。かすかだが、確かにこの声――間違いない。
「なんでひかりがそこにいるんだ！　答えろ！」
最も恐れていた事態が、考えたくもなかった結末が、徐々に真実味を帯びていく。
『んー、いやまぁ、なんつーかさぁ』
そこで一旦言葉を切ったかと思うと、電話から聞こえよがしにひかりの泣き声が響いてきた。

『ごめんなさい、ごめんなさい、路郎君、ごめんなさい！』

泣き叫ぶひかりの悲痛な声が、俺の耳から全身へと訴えかけてくる。その瞬間、俺の体中に電流がほとばしった。
涙声な余り、正確にはそれくらいしか聞き取れなかったが、状況ははっきりした。

――弍郎が、ひかりを泣かせやがった！

「弍郎ォッ！　てめぇ、どこにいる！　ひかりに何をした、彼女がなんで泣いてんだァッ！」
逆鱗に触れられたように、俺はここが学校であることも忘れて叫び散らす。
思えば、クラスが違うとはいえ、今日は一度もひかりに会っていない。何か変だと、気付くべきだったのに！

『だぁーから、んなキレんなっつーんだよ。孕ませちまっただけだって』

その言葉で、俺の心は冷水を被せられたマグマのように、一瞬にして固まってしまった。

「は……は、ら、ま……」

『おぉ、そうなんだよ。んでな？　これからできちまったガキを堕ろしに行くとこなんだ。心配ねぇぜ？　その金くらい俺が奮発してやっからよ。ひかりちゃんの方は、ガキができたことがバレて入学取り消しになっちまったみてぇだけどな』

まるで土産話のように楽しげに話す実兄の声が、俺の心に幾度となく突き刺さる。槍で何度もめった刺しにされるような感覚だ。

『実は前々から声は掛けてたのよォ～。顔はかわいいし、胸はあるし。嫌がってるみてぇだが、断りきれねぇって感じだなぁ。何でかわかるか？』

「……そ、そんなこと……」

『お前の兄貴だからに決まってんだろォ！？』

「――！？」

俺の心は、更にその一言という巨大な斧で切り裂かれた。

『俺がお前の兄貴だって知ったらよぉ、嫌がってたのに段々と従順になったんだよ。無下にしたら路郎君に嫌われちゃう～ん、ってなァ！』

「……そ、そんな、そんなのって！」

強姦は、女性にとっては殺されるに等しい屈辱だと聞かされたことがある。

そんな他人事としか思えないような非日常な事態に、初恋の人が――ひかりが巻き込まれて……まして、その原因の一端が自分にあると知ってしまったら、俺はもう、何も言えなかった。何を言うべきか、誰を恨むべきか、それすら見失うほどに錯乱していた。

『まぁ、そーゆーわけだから、ひかりちゃんのことは俺に任して、

お前は宋響で新しい女でも引っ掛けとけや。女子高生の方がほどよく熟れてて美味いんだぜ？　じゃーな』

プツン、と携帯が切られた。

それに比例するように、俺の心も、原形を留めないほどに崩れ落ちた。

後になって、ひかりと同じクラスだった同級生から、彼女が俺を好いている友人のためにその人の背中を押していたという話も聞かされたが、そんなことはどうだってよかった。

確かなのは弍郎が、俺が、彼女を苦しめたということ。泣かせた、傷付けた。それも、殺人に等しい重さで。

――なら、どうする？　答えは簡単だ。もう、誰も好きにならなければいい。誰とも、仲良しにならなければいい。

卒業式の後、俺は真っすぐ宋響学園に向かった。ひかりの入学取り消しを撤回して欲しい。責任は俺にあるんだからと。

しかし、話を受け入れてくれる人間は、誰ひとりとして存在しなかった。

問題を起こしたのは、ひかりと弍郎であり、俺は関連性がない、というのが彼らの言い分だった。食い下がる俺を生活指導の教員がつまみ出すまで、彼らは俺の話に関心を向けることはなかった。

俺には、彼女を救える力なんてなかった。誰も救えない。誰も救えないなら、誰かを守れるような人間でいる必要はない。

そして、それまで積み重ねたものに自ら泥を塗るように、俺は髪を真っ赤に染めた。

俺はアイツと……弍郎と同じような、人を傷付けることしかでき

ない。そういう風にしか生きられない、そういう星の下に生まれてきた愚者なんだと、自分自身にそう証明するように。

それを裏付けるかのように、宋響学園に入ってから、俺は毎日喧嘩に明け暮れていた。

殴られて、蹴られて、刺されて、血を流して。

終わることのない贖罪に身を投じ続けて、俺は自身の心身を破壊しようと躍起になっていた。

△

そうして身も心も変わり果てようとしていた折、当てもなく街に繰り出していた俺にある光景が留まった。

「何をしてるのよ、あなた達！」

凛とした声を張り上げ、カツアゲにご執心な不良の連中に詰め寄る、風紀委員臭がスゴイ美少女。宋響学園の制服を着ている辺り、ウチの生徒と見て間違いないな。傍にあるワゴンカーは不良共の私物のようだ。

被害に遭っているのは初老の男性。俗にいうおやじ狩りか。

「おいおい、スゲーかっちょいい女が出てきてんじゃん！」

「ヒュー、かっけぇ！」

「黙りなさい！　今すぐその人から離れ……きゃあっ！？」

威勢はいいが、あっさりと不良の仲間に羽交い締めにされてしまう。撃沈はえぇな。

「こーして見るとカラダもすげーんだな。そそる眺めだぜ」

その場の男性陣の多くが、美少女の豊満に飛び出した胸に視線を集中させる。

「なぁ、ホテルいこーぜホテル。ここよりよっぽど愉しーしよ」

「いやっ！　なによ、離しなさい！」

艶やかなポニーテールを揺らして抵抗する彼女だったが、大の男に捕まってはろくに反撃できないらしい。そのままどこかへ連れ去られようとしていた。

「――ちっ」

俺は舌打ちをした後、悠然と彼らの前に立つ。

途端に連中の顔が険しくなった。どうやら、男は歓迎してはいないらしい。されたらされたで気色悪いが。

「んだァ、ガキ！　邪魔だ！」

「おーおー、おっかねぇ。お楽しみに混ぜてもらおう、って腹だったんだがなァ」

嘲る調子で肩を竦めて笑い、思ってもいないことを口にする俺に、不良共は怒りを隠さず殴り掛かる。

「お呼びじゃねーんだよ、ガキが！」

だが、もはや見飽きた動きからくるパンチでは、かすることもままならない。

俺は首を捻って一発をかわすと、にみぞおちに体重を乗せた膝蹴りをプレゼントしてやった。

予想以上の反応で痛がり、腹を抱えてうずくまる。

「ごふっ……て、てめぇ！」

憎々しい目で睨み上げてくるそいつの顔を、思い切り踏み潰す。血が飛び散り、周りの連中に降り懸かった。

だが、それでは終わらない。更に、俺はそいつを蹴り続ける。どれほど血が出ようとも。気を失おうとも。

端から見れば凄惨そのものと言える光景に気後れを感じたのか、他の連中は一切向かって来ない。賢い選択だ。どこの馬の骨とも知れないイカれたガキに付き合ってまで、喧嘩する意味はない。

「もうやめて！　やり過ぎよ！」

不良の連中に捕まったまま、少女が声を張り上げた。
それでやっと足を止めた俺は、彼女の方へと顔を向ける。
こっちを狙われると思ったのか、連中は少女から離れると、蜘蛛の子を散らすようにバラバラに逃げ出していった。

そんな中で、彼女だけは逃げることもせず、真っすぐな瞳で俺を射抜いていた。やや怯えながらも、決して弱みを見せまいと気丈に振る舞う、正義感の強そうな美少女。

それが、俺にとっての桜田舞帆の第一印象だった。

「な、なによ、やる気？　ただじゃ負けないわよ、私はまだ本気じゃ――」
ギュルルル。
脚を僅かに震わせ、不格好なファイティングポーズをとる彼女。
しかし、突然鳴り響いた彼女の腹の虫が、そのモチベーションを大きく揺さぶる。
緊張がほぐれた反動かなにかだろうか。とにかく、彼女は顔を真っ赤にして、へたりこんでしまった。
「はっ！　う、うぅぅぅ……」
恥ずかしい余り、うつむいたままで俺とは目を合わせようとしない。
「……ち、金絡みで面倒掛けさすなっつーの」
俺は彼女に手を差し延べる自分自身の姿に、少しだけかつての自分に戻ったような錯覚を感じていた。

△

コマーシャルヒーローが経営する「バイソンバーガー」に足を運

んだ俺は、なけなしの金で少女に適当にワンセット買い与え、彼女を一人にしたまま店を出た。
「あなたは買わないの？」
「俺は外でご馳走だ。お前と違って胃袋だけはドデカイからな」
全く同じ身長だが、体の違いはハッキリしてる。
少なくとも、彼女に比べれば俺の方が格段に強く、腹も減る。
俺は店の裏手に回ると、周囲の目もはばからず、残飯が詰まったゴミ袋の前に屈み込む。
「さて、頂くか」
袋を開けば、異臭と一緒にボロボロと客の残した食べかけのバーガーやポテトが流れ落ちてくる。この中からなんとか食えそうなものを取捨選択して食い漁るのが、俺の「ご馳走」だ。
「これは……げ、ひでぇ臭いだ。こっちは……まあまあか」
一つのゴミ袋に入れられた残飯が明確に食い物じゃなくなるタイミングは、一定とは限らない。時間が経ってすっかり腐りきったものがあれば、今しがた捨てられたばかりで、まだソースの臭いがはっきり残されているものもある。
そうしたものを選び出し、さっきの女に与えたワンセット分の量を拾い上げた俺は、早速そのうちの一つを口に運び……
「な、な、なにしてんのッ！？」
怒鳴られた。
うんざりした顔で振り返ってみれば、信じられないようなものを見るような表情で、女は俺のしようとしていることに目を見張っていた。
「二人分買わないなんてやっぱり変だと思ったら……！」
「食事中の奴に後ろからでかい声で話し掛けてくるとは、ナリの割りにマナーのなってない奴だな」
「食事！？　それが食事なの！？　信ッじられない！　カラスのす

ることよ、それは！」
周りの通行人は俺達のやり取りを奇異なものを見る目で見ている。彼女も視線に感づいたのか、頬を赤らめながら俺の手を引っ張り、その場を後にした。

「――で、どうしてあんなことしたの」
生徒のいたずらを見つけた先生のような物腰で、女は俺に詰問する。俺が「いつものことだ」と目を逸らすと、彼女はますます声を荒げた。
「いつも……！？　いつもあんなところで、残飯漁ってるの！？」
「お前からすりゃあ異常だろうが、俺の胃袋にはあれくらいが丁度いいんだよ。お前が気にかけるようなことじゃ――」
すると、女は何かに気付いたように目を大きく開き、さらにズイッと顔を近付ける。
「あなた、もしかしてお金がなかったの？」
「あぁ？」
「二人分買うお金がなかったから、私に気を遣って……でも、どうしてそこまで？　それに、家に帰ればご飯だって……」
――この女のお節介にはヘドが出るし頭が下がる。
俺は軽く舌打ちすると、目を合わせないように首を後ろに向けて口を開いた。
「たかがメシ食うためだけに、俺のことでハラハラしてるお袋に会えってのか」
そんな物言いに、彼女はムッとした表情になる。なんたる親不孝な、と言わんばかりだ。
髪を染めてから、俺はなるべく母さんとは顔を合わせないようにしてきた。
朝は母さんより早く起きて、自分で朝メシを済ませて、さっさと学校に行く。仕事でいないタイミングを見計らって学校から帰った後、帰ってくる前に出掛けて、すっかり寝静まったころに帰る。休

日は一日中外で過ごし、帰りは朝方。そんな生活だった。
きっと心配するだろう、とは思っていた。だけど、俺はもう引き返せる気はしていなかった。だから、なるべく顔を合わせないように、言葉を交わさないようにしてきた。
こうしていれば、きっと母さんは匙を投げる。俺を忘れてくれる。そう願っていたから。
「ダメよ、そんなの！」
俺のそうした苦肉の策は、女の清々しい正論に一蹴されようとしていた。
「お母さんを心配させるようなことしちゃ、ダメでしょ！　あんな悪いこと続けてて、申し訳ないとは思わないの！？」
何も知らないから言える、綺麗ごと。俺はこうした彼女の訴えを、そう取らざるをえなかった。
それでも、間違いだとは思わなかった。それが最もだと、俺も感じていたから。だが、脳裏に過ぎった一人の男の姿が、俺に現実に戻ることを拒ませる。
「……そんなの、弌郎に言ってくれよ」
「え？」
不思議そうに首を傾げる彼女の姿に、俺は頭を抱えた。そして、後悔の念を抱える。

――こいつにそんなこと言っても、どうにもならないだろうが。

自分自身の言い分に耐え難い理不尽を覚え、俺は正義を信じて疑わない、純真な彼女の瞳に目を向けた。
その澄んだ光は、俺には余りにも眩し過ぎた。汚され、砕かれ、朽ち果てた俺には。
俺がどうしようもなく、あの残飯に匹敵するほどに薄汚れた存在とも知らず、哀れな慈愛の天使は（無意味な）救いの手を探す。
「うーん、やっぱり……うん、よし！　私の家に行きましょう！

助けてくれたお礼もあるし、お昼くらいご馳走できるわ」
「どういう思考回路でそんな結論が出てくんだよ」
呆れるようにこれみよがしにため息をつくが、当の女は気にしていない様子だった。俺の話を全く聞こうともせず、「ちょっと連絡してくるから待ってて！」と一人でどこかへ走っていってしまった。
「なんだっつーんだよ……」
うっとうしいような、嬉しいような、厚かましいような、ありがたいような……微妙な心境に、俺の心は揺さぶりを掛けられていた。
「いいことしたからお礼が貰えるって、いい気にでもなってんのかよ、俺は……」

それからしばらく待っていたが、彼女はなかなか帰ってこない。電話くらいで三十分も掛かるわけはないし、途中で自分の過ちに気付いてさっさと帰っちまったんだろうか。
納得したようながっかりしたような……またしてもそうした、まとまりのない気持ちになっていると、女とは違う足音が近付いてきた。
彼女のそれよりも重く、力強い。その音の主には、見覚えがあった。

「よお、さっきはやってくれ――」
言うより早く、俺はノコノコと顔を出してきたさっきのヤンキーの髪を掴み、顔面に膝蹴りを叩き込んだ。
挑発的な目付きとあの時のやり取りからして、俺の得になるような話じゃないのは明白だからだ。
「ひぎぁッ！　て、てめ……！」
「んで？　俺に何か用かよ。女に絡んだ時みてぇの仲間はどうした」
整理のつかない自分の気持ちに苛立ってる中での、ヤンキーの再来は俺に八つ当たりの機会を与えたようだ。
しかし、こいつはレベルの違いを見せ付けられてなお、ニタリと

薄気味悪く笑っている。
「へへへ、どうしたも何も、いつも通りさ！」
「いつも通り？　――クソッタレが！」
俺は鼻血を垂れ流しているそいつを投げ捨てて、女の向かった先へ走った。

△

「いつも通りってことは、またあの女に集団で絡んでるってことかよ！　ざけやがって！」
通りの角を曲がり、再び若者の集団を見つける。その近くには一台のワゴンカー。あいつらで間違いな――！？

「おぉおぉ、今日も上玉だぁ」

息が止まる。
比喩ではなく、本当にその時の俺は、息が止まっていた。奴の姿を見た瞬間に。
そして蘇る、ひかりの叫び。奴の笑い声。
その瞬間から心の奥底に眠っていたどす黒い感情が、うねりを上げて、咆哮する。

「お兄さァん！　中卒以来だなァおい！」

嘲笑と激昂が入り混じる声に、奴が――弍郎が振り返る。
兄は一瞬だけ俺の姿に驚いた顔をすると、すぐに下品な笑い顔に切り替えた。
「よぉよぉ、路郎ちゃんじゃないのォ！　花の青春謳歌してる、ようには見えねぇなァ！」
向こうも挑発的な態度で兄弟の再会を喜んでいる。殺してやりた

いほどに、清々しくクソ下品な笑顔だ。
「なんだなんだ、そんな髪じゃあみんな怖がって寄りつかねえぞ！　だから今の彼女ちゃん、こっちに逃げて来ちまったんじゃねえの？」
弐郎は口角を上げ、両腕を縛られ、さるぐつわを付けられた女の首根っこを掴み上げた。
「んぐぅッ！」
「しっかしお前はベッピンにモテるね！　兄貴として誇らしい！　ひかりちゃんもなかなかだったが、今回はピッチピチの女子高生だからな！　どんな声で鳴くのか楽しみ――」

「それ以上喋んなクソ野郎がァッ！」
自分がどんな声で叫んだのか自覚するよりも早く、俺は弐郎に襲い掛かっていた。
元凶によって掘り返された醜い過去が、俺の心を黒く染め上げていくのがわかる。真っ白なタオルの上に、泥を垂れ流すように。
だが、奴は不敵に笑うばかりで、一切の動揺を見せない。
当たり前だが、弐郎は喧嘩は強くはない。女遊びに夢中になるばかりで、喧嘩なんてしない生き方をしてきているのは、俺も知っている。
仮に俺と離れてから鍛えだしたのだとしても、それはついこないだの話だ。大したものにはならない。
それなのに、奴はただ笑うだけだった。そして――

「ご――ばッ！？」
俺の内臓が、包丁で刺されたかのような冷たい激痛に襲われた。
宙を舞い、七転八倒する俺を見下し、弐郎はせせら笑う。
「ハハハ、便利な世の中になったもんだよなァ、おい！」
血ヘドを吐き散らしながらも、俺は奴を睨み上げる。
「て、てめぇ一体――がばッ！」

弌郎のヒョロい身体から繰り出したものとは思えないほどの重い蹴りが、さらに俺を吹っ飛ばす。
地を転がる俺は、再び弌郎を見上げた。そこで、不審な点に気付く。
――奴の着ている服の胸に、小さなスイッチのようなものと、「ヒーロー協会」の文字が――！

「お前、まさか……！」
「さっすが名門・宋響学園。頭が切れるね～。ご名答だ、クソガキ」
瞬く間に顎を蹴り上げられ、顔面に痛烈なストレートを食らう。
既に俺の顔は、痣と血でグチャグチャに成り果てていた。
「協会で働いてるねーちゃんをイイコトして虜にしてやったらよぉ、いろいろ貰ったんだわ。ヒーロー能力とかな」
俯せに倒れ伏した俺の後頭部を、幾度となく踏み付けて来る。辺りには俺がやった時以上に血が飛び散り、視界は既に、目に映る赤色が俺の髪なのか血なのか、判別できないほどに混濁していた。
「まー、難しい考察諸々は任せてるけどよ、これだけははっきりしてるぜ。お前は一生、俺には勝てねーッてわけだ！」
最後に決められた、強靭な拳から放たれるアッパーに顎を打ち抜かれ、俺はさらに多くの血を吐いた。
これ以上出るのか？　と思うくらい、俺の身体からは血が流出していた。
俺の意識はほんの僅かな間だけ、そこで寸断されてしまった。

△

女を乗せて走り去る、弌郎の車。
その行き先は、ある程度は予想がついていた。
「多分……ここから近くにある……病院、だな」
血達磨になった身体を、壁にもたれさせながら進ませていく。ど

うやら、骨が数本イッてると見ていい。

ヒーローライセンスの持ち主は、協会管轄の病院を利用できる。ライセンス所有者はもちろん、その親族でも使えるようになってるわけだ。

弍郎はヒーローライセンスこそ持っていないものの、関係者を篭絡してヒーロー能力を得ている。ライセンスの問題なんて、なんとでもなりかねない。

奴らが邪魔をされないような場所であの女を愉しむつもりなら、関係者を丸め込んでから、病院で行為に及ぶことが予想できる。

別に確信を持てるほどのものじゃないのはわかってる。それでも、他に行く当てがない以上、俺は進む他なかった。

「これ……以上、好きに、させるかよ！」

病院前までたどり着いてみれば、案の定、奴らのワゴンカーが停めてあった。頭隠して尻隠さず、とは正にこのことだ。

ふと、俺は向こうからここに勤めている看護婦らしき連中が来ていることに気付き、慌てて身を隠した。

彼女らが血みどろになっている俺を見付ければ、なにはさておき医者を呼ぶだろう。

最悪、ここはヒーロー協会管轄下だからと他の病院まで搬送されかねない。そうしたら、女の救出どころじゃなくなってしまう。

なるべく血痕を残さないようにしながら、俺は外の窓から弍郎達を捜す。

ヒーロー協会の関係者や親族しか使えない病院である割りには、患者のタイプはいろいろらしい。細い初老の女性がいれば、筋肉モリモリでありながら、どんな事故をやらかしたのか包帯でがんじがらめにされている野郎もいた。

そして、患者の名前がない空き部屋であるにも関わらず、数人の

若者が集まっている部屋があった。
男達が、一人の女子高生を組み伏せている。姿はよく見えないが、それがあの女なのかを確かめる必要はなかった。
女を貪ろうとしている男達の後ろで、楽しげに腕を組む弍郎が見えていたから！

「弍郎ォォォォォオ！」

あの日の出来事を彷彿させる情景が、俺の理性を奪い去っていく。
気が付くと、俺は絶叫と共に窓を叩き割って病室に侵入し、自分の身体がどれほど傷んでいるかも忘れて、男達を完膚なきまで叩きのめしていた。
「なんとまァ、おっかなくなっちまったなァ、お前！」
相変わらずヘラヘラと笑う弍郎だったが、その目の色はお楽しみを邪魔された怒りを克明に映し出している。
俺は服がはだけていた女に自分の上着を被せて、弍郎の方へ向き直る。
「あ、あなた、どうして――ダメよ、逃げよう！」
後ろから制止の声も聞こえたが、構う気は起きなかった。
ただ、その時聞こえた涙声が、ひかりの嘆きを思い起こさせた。
そして、膨れ上がっていく黒い感情。怒り――そう、怒りなんだ。
弍郎と、自分自身への。
「いい加減くたばれ、クソ兄貴がァ！」

一気に殴り掛かった俺の腹を、強化された弍郎の蹴りが難なく打ち抜いた。
床に一瞬はいつくばり、すぐに立ち上がる。痛みも、苦しみも、そのままで。
「ほらほら、どうした！　あの女子高生助けに来たんだろ！？　勇気出してもっと頑張れよ！」

ヒーロー能力というアドバンテージを以て、奴は俺の顔をさらに赤く染めていく。
口からは滝のように血ヘドが噴き出し、顔の骨にもひびが入ったようだ。それでも、俺は立つ。
あの女を助ければ、ひかりを救えなかった罪悪感から、少しは逃げられるかも知れない――そんな叶うはずのない願いがあったから。
「……う、あ、がああああああッ！」
血が目に入り、視界も閉ざされ、今となっては自分が拳を握っているのかさえわからなくなってきた。ただ弐郎の笑い声から奴の位置を探り、腕を振るう。
俺には、それしかできなかった。

そして、俺が顔面にストレートを貰った瞬間、何かが手に触れた。

カチリ。
何かのスイッチに触れ、小さな音が鳴る。
「――ク、クソが！」
さっきまでの余裕を感じさせる立ち振る舞いから一転して、声に焦りの色を感じさせた。
それだけで、後は何をすべきかは明白になった。

「ぶッッッ潰す！」

俺は自分の触れた手で弐郎のヒーロー能力のスイッチを切ったと認識した途端、一気に地を蹴って奴を押し倒した。
「クソッ！　放せクソガキ！　俺は男とヤる趣味はねぇぞ！」
「俺にはあるねぇ！　殺る趣味ならなァ！」
俺は両足で奴の両腕をガッチリと挟み、胸のスイッチを押せないようにした。そしてひたすら、拳を声がする正面に何度も叩き付ける。

顔や身体に、返り血が掛かる感触が伝わる。
「クソッ！　がふっ！　あの、ひかりってクソビッチも逃げやがるし、どいつもこいつも、俺の邪魔を――げふっ！」
目もろくに見えず、耳でしか弐郎を追えない俺は、殴ることに必死になる余り、ひかりを罵倒する台詞しか聞こえてこなかった。それほどまでに、俺は狂っていた。そして、ひかりを馬鹿にした言葉が、ますます火に油を注いでいく。
「無駄口いらねーからさっさとくたばれェェェエ！」
俺が窓ガラスを割った時に散らかった破片を掴み、弐郎に向けて振り下ろした。
――振り下ろしたつもりだった。
破片を握っていた手を、何かに噛み付かれていると気付くまでは。
……いや、何かではない。女以外にこんなことをする奴はいないのは明白だった。
俺の腕を噛む歯の感触が離れると、彼女の荒い息遣いが聞こえてくる。
腕に噛み付いて止めるとは、おやじ狩りに絡んだ時といい、無茶苦茶なことをする女だな。
「――もういいよ、やめてよ」
これまでに聞いたことがないくらい、悲痛な声だった。
戦場に巻き込まれ、兵士に命乞いをする民間人のように、その縋るような涙声は、切実なものに聞こえた。
「お願い。お願いだから……！」
何の事情も知らないから、そんなことが言える。
しかし、何の事情も知らないからこそ、今の俺達がとてつもなく異常なのだと、彼女は警告していたんだ。
「それ以上は――もう、ダメ。お願い、だから」

懇願する女の声に、毒気を抜かれたのか――俺は破片を握る手の力を失い、だらりと腕をぶら下げた。

やがて騒音を聞き付けた病院の関係者らがやってきて、事態は収拾がついた。

弐郎や、奴とつるんでいた男達は全員検挙され、俺は女が連れ込まれた病院とは違う所へ入院した。

△

疲労困憊から来る睡魔によって封じられていた意識が蘇った時、俺は知らない病室のベッドにいた。

「気が付いた！？」

「いって……力強過ぎんだろ！」

「あ、ごめん！」

目を覚ませば、俺の手を握り潰さんという力で取っていた彼女が傍にいた。どうやら俺をほっぽってはいなかったらしい。

「よかった、気が付いて！　ホントに、よかった……！」

ホッと胸を撫で下ろし、感極まった様子で、女は俺が寝ていたベッドの隣にある椅子に腰掛ける。

すぐ近くに掛けられていたカレンダーに目を向けると、俺が約二ヶ月は寝込んでいたことがわかる。道理であれだけのことがあったのに、被害者のこいつがここまで落ち着いていられるわけだ。

「全身傷だらけで出血も酷かったし……ホントにどうなることかと思ったわよ。でも、無事でよかった！」

「お前の方こそな」

女はそこで一旦言葉を切ると、申し訳なさそうに俯きながら、俺を上目遣いで見詰めた。

「えっと……あなたも、私と同じ学校だったんだね」

「財布の中身でも見たのか」

「うん……その、あなたの学生証が落ちてて、それで」
スッと目の前に出された、俺の顔写真がある学生証。そこに写された俺の髪は、今の俺自身への皮肉のように、純粋な黒一色だった。
受験用にと撮った証明写真が、こんなに皮肉に見えるのは、せいぜい俺ぐらいのものだろう。
「この写真、髪が黒いよね。それに、目が凛としてて、なんだか……」
「死んだ魚みたいな目付きで髪が赤い今とは大違いだな」
嘲るようにわざと声のトーンを上げると、「ご、ごめん！　そんなつもりじゃ……」と困った顔をする。
さすがにそれ以上虐める気にはならず、「まぁ、どうでもいいけどな」と話題を切った。

会話を重ねるに連れて調子が良くなってきたのか、女は身を乗り出して、さっきとは違う態度を見せた。
「ねぇ、私、あなたの昔の写真見てから、いろいろ考えたの。あなたはやっぱり、元に戻った方がいい！　きっと今より、楽しく過ごせると思うの。一つのクラスの風紀委員を務める者として、あなたのことは見過ごせないから」
やっぱり風紀委員だったか。まさしく見た目通りだな。ていうか見たことない顔なんだし、俺とは違うクラスだろうが。
露骨にめんどくさそうな顔をする俺に、いたずらっ子を叱る母親のような顔で、女が迫ってくる。
「そのために私にできることなら、なんでもする！　私、宋響学園をより立派にしたいから！」
「ご大層な志をお持ちのようで……それなら……」

俺はここまで、この女に感じてきたものを思い返した。
性格も顔も、まるで違う。それでも、自身に何があっても俺を案じてくれたあの姿は、ひかりの優しさを思い起こすには充分過ぎた。

決して、ひかりの代わりなんかじゃない。彼女を忘れないために、今目の前にいる彼女も忘れないために、俺は提案する。
かつて円満に果たせなかった、彼女との約束を。

「……名前で呼び合え。そしたら言うこと聞いてやるよ」
「え？」
「いや、だから名前だよ」
俺の発言が余程意外だったのか、女は俺の案に応えようともせず、鳩が弾道ミサイルを食らったような顔をしている。
「名前で、呼び合うの？　私と？」
「ああ。お前、名前は？」
「そういえば、自己紹介もまだだったわよね。私は桜田舞帆。あなたは――船越路郎君よね？」
「そうだ。俺はお前を舞帆って呼ぶ。だから、お前も路郎って呼んでいい」
女――舞帆は、少し困った顔をすると、頬を赤らめた。
「ごめん……私、男の人を名前で呼ぶのは、家族か、家族になる人じゃないとダメだって言われてて」
つまり、他所の男を名前で呼んでいいのは旦那だけってことか。コテコテに厳格な家庭なんだな。
「じゃあ、俺が勝手に舞帆って呼ぶ。お前は好きなように呼べよ」
「うん……船越君」
あの約束を再現しきれなかったのは歯痒いところもあったが、不思議とそれほどもやもやとはしなかった。
舞帆にひかりの面影を重ね、彼女を守りたいと願ったから、何が得るものがあったのかもしれない。
もしかしたら……もしかしたらだが、舞帆を守れたことで何かの恩赦を得られるとしたなら……俺はもう一度、誰かを好きになっても、いいのかもしれない。

それから、更正の第一歩として髪の染め直しに臨んだわけだが。
「くそったれ……」
「やっちゃったわね……なんだか中途半端」
マジメになった証として自分で染め直そうとしたところ、しくじって半端な髪になってしまったようだ。まるで赤い髪に墨汁をぶちまけたような頭になってしまっている。
端々に赤みがかかり、さながらメッシュのような有様だ。
俺は退院して家に帰って以来、その頭で学校に通わなければならなくなった。
それでも、グレた俺や女に溺れた弐郎のせいで老け込んだ母さんに、これ以上迷惑は掛けられないため、授業にも（今までよりは）マジメに取り組み、髪を染める前までは成績が回復した。
さらに舞帆主導の（更正のためと称した）雑用オンパレードが功を奏したのか、俺を不良だと恐れて近付かなかった他の同級生達とも、次第に打ち解けていくことができた（その過程で成績が逆戻りしたが）。
そうして一年の夏から二年の秋に掛けて、丸一年近くに渡る更正プロジェクトをこなした頃。
俺は、達城朝香と出会った。

△

ある晩、人徳稼ぎのために野球部が練習した後のグラウンド整備を手伝っていた時だった。
体育館の陰から見えた、学校関係者とは思えないほどの、グラマラスな肢体を強調した格好の女性の姿が目に留まった。
そして彼女は唯一自分の姿を見付けている俺を手招きする。
野球部の友人に後片付けを一旦任せると、俺は妖艶な女を訝しんだ上で、敢えて彼女のいる体育館裏へ足を運んだ。

「……で、誰だよあんた。そんな健全なる男子高校生にはいささか刺激が強すぎるような超悩殺セクシーダイナマイトバディを恥ずかしげもなくオープンかましちゃってくれてる辺り、教職員には見えないけどな」
「第一声からなかなか骨太に口説いてくれるじゃない。ちょっとクラッと来たわよ」
溢れんばかりの爆乳を寄せ上げ、挑発的に笑う。
「さて、あなたを呼び出した理由だけど――そんなに身構える必要はないわ。別にあなたに何か頑張ってもらおうって話じゃないんだから」
「頑張る……？　何の話だよ」
「そうね、ここで説明するだけじゃ物足りないでしょうし、ついていらっしゃい」
謎の女は地面の茂みに手を伸ばすと、そこでカチッと小さな音を立てた。明らかに、自然物の出す音ではない。

その時、俺は初めて見た。
セクレマンの力を格納する地下基地への入口を。

無骨な機会仕掛けの部屋に、ボロボロの証明。少なくとも、いい大人が一人で暮らすには余りにもヘンピな場所だ。
達城朝香と名乗るその女は、俺をある一室に案内し、そこのライトを付ける。
「これは……」
眼前に映るのは、部屋中に散らかった謎の部品の数々。白と黄色を彩った、何かの機会のようなパーツがそこら一帯に転がっていた。
「私が開発に着手した、宋響学園の専属コマーシャルヒーロー『セクレマン』の設計パーツよ」
俺は達城の発した言葉に、疑問を感じた。

普通、コマーシャルヒーローってのは企業のイメージアップに使われる場合がほとんどだ。学校に専属ヒーローが付くなんて、聞いたことがない。
「宋響学園は私立校よ。教育を商売にしている企業の一つと捉えれば、問題ないでしょう？」
そんな感想が既に顔に出ていたのか、達城は俺の胸中をあっさり看破した。
「そうそう……さっき達城朝香と名乗りはしたけど、つい去年までは桜田っていう性だったのよ」
「桜田？　――って、まさか舞帆の！？」
「ふふ、いつも娘がお世話になってるわね」
この女に呼び出されてから、驚きの連鎖だ。舞帆のプロポーションは母譲りだというわけだ。
「さて、今宵あなたを呼び出したのは、ひとえに事情を知っていて欲しいからなの」
「事情？」
首を傾げる俺に背を向けて、達城は新聞紙くらいの大きさの紙を広げた。何かの設計図らしいが、残念ながら俺のオツムではカンプンチンプンです。
「私がいた桜田家は、過去多くのヒーローを輩出してきた宋響学園と密接な関わりがあってね。その筋でも名門だったの」
セクレマンやら舞帆のお母さんやら、ついていけない要素だらけの今夜だったが、舞帆の家庭に関しては本人からある程度聞き及んでいたため、ちょっとは理解できた。
確か、お父さんがここの校長を何年も続けてて、弟はここを飛び級卒業してヒーローデビューしたんだったな。
「そんな中で、私の夫――だった桜田家の現当主である桜田寛毅（さくらだひろき）は、この宋響学園自体に、我が家出身のコマーシャルヒーローを誕生させて、桜田家の威信を確固たるものにしようとしたの」
「……それが、セクレマンか」

よく考えてみれば、舞帆の奴は生徒会書記だったよな。書記（セクレタリ）だから、セクレマンってか。
「ええ。変身者に選ばれたのは、当然ながら桜田の血を引き、唯一家族の中でヒーロー関係に携わっていなかった舞帆。生徒会に所属している優等生でもあるんだから、必然よね。まだ企画段階だから、本人はまだ何も知らされてはいないけど」
確かに舞帆の家柄の良さはお父さんや弟の活躍振りからそこそこ察しているつもりだったが、ここまでとは正直予想外だ。
ふと、俺はそこで達城の口調に異変を感じた。
誇らしい話なのに、カッコイイ話なのに――どこか、現状に向けた怒気を感じる。
「でも、問題が一つあるの」
「問題？」
「桜田家の成功を嫉んでいるのか……僅か二人程度でありながら、宋響学園を狙う者達がいるのよ」
その警鐘を鳴らす一言に、俺の表情も険しくなる。
「初めて襲われた時は、たまたまヒーローになって力を磨いていた息子がなんとかしてくれたけど、今後もそれで上手くいくとは限らない。息子以上の力を蓄えて、いつまた襲って来るか……」
「それと舞帆がヒーローになるのとどう関係あるんだ？」
俺の問いに、達城は背中越しに答える。
「舞帆はまだヒーローになるには早すぎるの。教養はあっても、力が余りにも足りない。それを十分なものにするために、今から鍛えたのでは余りにも遅いのよ。それまでにまた、彼らがやってくる可能性が高いから。無防備なヒーローを、学園を……舞帆を狙って」
「校長先生は――あんたの旦那さんは、そこんとこわかってんのか？」
「そこだけはわかってるはずよ。その上で、企画を決行するつもりでいる。『桜田家と宋響に仇なす者は、桜田家で倒す』ってね。それがどれほど危険で不可能に近いか、あの人はわかってないのよ、

その一番大事なところを……！」
先程から薄々伝わって来ていた達城の怒りが、いよいよ明確に形を現わしてきた。
娘が背負うリスクを承知の上で、家のメンツのために危険な立場へ置こうとしている、夫だった男への怒り。
「……だから、私はあの人と別れたの。セクレマンの部品と設計図を持って、ね」
怒りを少しでも吐き出すことで、少しは気が鎮まったのか、達城は一息つくと椅子に座ってこちらに向き直る。その表情は、先程まで元夫への怒りを現わしていたそれとはうって変わり、どこか諦めたような、脱力感を思わせる印象になっていた。
「だけど、それももう限界。ここをあの人が突き止めてしまうのは時間の問題だわ。そうしたら、結局あの人の思惑通り、舞帆は危険な時期の中でヒーローになる道を迫られてしまう」
「そんなことって……！」
「だから、もし舞帆が危険な戦いに巻き込まれても、支えてくれる誰かがいてあげれば、きっとあの娘も少しは救われる。だから、あなたを呼んだの」
ヒーロー業界の名門が見せた、不快な暗部。
それを見せ付けられた俺の心は、ぶつけようのない怒り一色で、濁流のようにうごめいていた。
「もしあなたさえ良ければ、あの娘の戦いを、事情を汲んで、支えてあげて欲しいの。私じゃあもう、あの娘を守れないから」
達城は机に散乱していた資料の山から、数札の一万円札を差し出した。手付金のつもりか。
「これは話を聞いてくれたお礼。事情を知ってくれる人が一人いるだけでも、きっとあの娘は幸せ――」
「ざッけんなァッ！」
その瞬間、俺は地上まで響き渡るほどの勢いで、ダムに溜まった

全ての水を解放するように叫んだ。
気が付くと、達城の手にあった万札も叩き落としている。
思わぬ罵声に目を見開く彼女に、俺はお礼代わりに思うままの感情を言葉にぶつけた。
「幸せ？　あいつが幸せに？　なれるわけないだろ！　俺なんかが一人ついたくらいで、あいつが幸せになんてなれるか！」
俺が感情のカケラを言葉にするだけで、部屋がビリビリと振動する。しかし、そんなことに構っているゆとりもない。
「あんたの願う娘の幸せってのは！　娘の戦いがたった独りにならないことなのか！？　違うだろ、もっと見苦しいくらい欲張ってみたらどうなんだ！　そんな俺の髪の色くらい中途半端なもんじゃないだろ、あんたの願いは！」
感情に肉体の操縦を任せた俺は、達城の両肩をガシリと掴み、手に力を込める。理性の名残か、その力は彼女に痛みを与えるほどには至らなかった。
「戦って欲しくないんだろ！？　自分が腹痛めて産んだ娘に、危険な戦いをして欲しくない、だからあんたは舞帆をセクレマンにしたくなかったんだろうが！」
「私だって！」
すると、それまで防戦一方だった達城が突如反撃に出た。その目尻に、痛々しく涙を浮かべて。
「私だって、舞帆には戦ってほしくなんかない！　だけど、あの娘の代わりにセクレマンになれる人間は……いないのよ」
だが、徐々に声に覇気が失われていき、やがて絶望を思わせる声色になっていく。
「なれる人間がいないって……なんだよそれ」
その姿に怒気を削がれた俺は、俯く達城の顔を覗き込み、表情を伺う。
「……セクレマンの部品も設計図も、初めから舞帆の身体に合わせて造られたの。だから、彼女以外は絶対に使いこなせない。どの道、

あの娘が纏うしかないのよ」
「絶対に使いこなせない、か」
そこで俺は一つの考えを、今ここで纏める。
「なあ、もし舞帆以外の奴がセクレマンに変身しようとしたら……どうなるんだ？」
「どうなるって――全身を鎧に締め付けられて、大の大人でも失神する激痛が走るわよ」
「きっついな、それ」
ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべる俺に、達城は険しい顔になる。
「あなた、まさか舞帆のセクレマンになる役を肩代わりするつもり！？」
「リスクは今あんたが言った通りなんだろうな。だが、やらないわけにはいかない」
まるで信じられないようなものを見る目で、達城は猛烈に反対する。
「なんであなたがそんなこと……無理よ、不可能だわ！　敵は息子より強くなってくるかも知れないのに、激痛のリスクまで背負って戦うことなんて！」
「あんたが願う娘の幸せってのは、こういう展開のことを言うんだろ。もし事情を知って支えてくれる人になって欲しいってのが、あんたの本当の願いだとしたら――今世紀最大の人選ミスだな。俺がそんな事情聞いといて、黙ってるわけないんだから」
ひかりのことでやさぐれて、弐郎とも争って、どうしていいかわからなくなっていた俺を、尻を叩いてでも助けてくれた舞帆。
あいつが危険な綱を渡ろうってんなら、俺が安全な道に作り替えてやる。それが、助けてくれた筋ってもんだろうが。
品性のカケラもないイレギュラーの登場に、達城はただ言葉を失うのみだった。

△

それから、俺はヒーローライセンスを取得するための猛勉強に取り組み、二年の終わりにFランクのライセンスを取得した。

セクレマンの変身システム――すなわちセイサイラーは、舞帆がBランク相当のライセンスを取得する予定があって建造されていた。

つまり、Fランクのヒーローが、Bランクが使う（ことを想定した）変身システムを運用するという、奇妙な状況が出来上がったのである。

桜田家に秘密基地を知られないようこっそりと、達城もセイサイラーを正月までに完成させた。

こうして二年の三月に入って、ようやくこの俺、船越路郎が変身するセクレマンが日の目を見たのだった。

当然、リスクは相当なものであり、当初は変身する度に入退院を繰り返す始末であったが、回数を重ねるに連れて俺の肉体がセクレマンの鎧に馴染むようになっていった。

もともと不良時代に身体を鍛えすぎたせいで、筋肉量の重さで背が伸び悩んだために、俺は舞帆と同じくらいの身長しかなかった。そのため、激痛を伴うには間違いないものの、五月に入る頃には随分とマシになっていた。

加えて、今までの喧嘩とは違う真っ当な戦い方を学ぶため、「アンカ株式会社」の専属ヒーローであるAランクヒーローの「アンカイザー」が通うジムで格闘技を学び、宋響学園を狙う敵を迎え撃つ日に備えて俺は鍛え続けた。

さらに、俺達の現状を桜田家に悟らせないために、ヒーローに関する話題を取り上げる雑誌「ヒーローズマガジン」の取材を受けないようにするべく、ヒーローランクを上げないように派手な活躍は控えていった。桜田家のメンツをなにより重んじる校長の性格を考

えれば、セクレマンが舞帆じゃない誰かが変身していると知っても、それが誰なのかを特定できるまでは事を荒立てられないからしい。
そのため、宋響学園の受験案内のパンフレットや、入学案内に同封された学園紹介のＤＶＤくらいにしか「セクレマン」は姿を見せず、正体が露見する可能性を極限まで回避した。全ては、舞帆を守るためだ。

……そう、俺は舞帆に代わって、その痛みを背負ってセクレマンになると決めたんだ。
弍郎によってひかりと共に泥沼へ引きずり込まれた俺を、そこから救い出してくれた彼女に、報いるために。

第四章　船越路郎、立ち上がる

間もなく夜の帳が降りようとしていた。
俺は一通りの自己紹介を終えると、神妙な表情でこちらを見る三人へ向き直る。
舞帆も、平中も、桜田も――いい顔はしていない。悲痛、とでも形容するべきだろうか。少なくとも、納得はしてくれたと思いたいんだが。
「……そんな」
俺が喋り終えてから次に口を開いたのは、平中だった。この中では一番縁の薄い彼女だが、そうであるからこそ、今の現実を客観的に見れるんだろう。だからこそ、俺が異常に見える。舞帆がそうであったように。
「ひかり――そんなことがあったなんて」
ぽつりと彼女の口から出るその名前が、今なお俺の胸に食い込んで来る。辛いことがあるなら、忘れた方がいいのかもしれない。そうであっても、彼女だけは忘れてはならない。
――忘れることは、許されない。
「なるほど……だから船越さんはセクレマンに。これで全ての合点がいきました」
深刻な表情はそのままだが、舞帆の弟は幾分冷静に俺の話を処理してくれていたようだ。俺なんぞのことに構って意気消沈されるより、その方が俺も救われる。
「桜田。達城――お前らのお母さんは敵は二人くらい、って言ってた。一人はバッファルダなんだろうが、もう一人はどういう奴なんだ？　お前は会ったことがあるんだろ？」
俯いたまま沈黙を貫いている舞帆が気に掛かったが、今は敵について少しでも知っておきたい。
過去の話をしていく内に、桜田が既に連中と面識があるのを思い

出したのはラッキーだった。

「もう一人……Bランク殺しのラーカッサ、ですね」

「ラー……カッサ？」

「ええ、自分の敵わないAランクからは全力で対戦を避け、自分より弱いBランク以下のヒーローを徹底的に狩る。ラーカッサこと狩谷鋭美（かりたにえいみ）の常套手段ですよ」

サラっと本名まで出して来やがった。そこまで分かっていながら警察の手を借りないってのも、桜田家のプライドってやつなんだろうな。

「最後の強敵……にしては随分とセコい奴なんだな。そのラーカッサっての」

「それは、彼女に勝てる力のある人が言うべき言葉でしょうね。僕らがそう言ったところで、負け犬の遠吠えですよ」

「違いない、な」

学園で初めてバッファルダと会ったときに、奴を最後に止めたのも多分そいつだ。一応は「女」らしいが、それでもあの猛牛野郎を抑えられる力があるってことだろう。生裁剣が使えなかったとはいえ、あいつにさえ勝てなかった俺がでかい口を利くのは十年早いってわけか。

「バッファルダが倒れた今、ラーカッサも黙ってはいないでしょう。あなたは体を休めて、今一度僕と二人掛かりで戦えば彼女にも勝てるかと」

「人の背中に刺さってる破片を無理矢理引っこ抜くドSと組むのは気が引けるが、勝つためにはあれこれと言ってられないよな。その程度の無茶ぶりくらい、なんてこと――」

「――その必要はないわ！」

ガタッと一つの椅子が倒れると、、凛とした声が病室一帯の空気を切り裂いた。

面食らった一同が声の主、舞帆に注目する。彼女の眼には、物悲しさと怒りと、決意の三つが同居しているように見えた。
「姉さん、急に何を……」
「そうですよ、船越さんだって頑張って――」
「冗談じゃない、冗談じゃないわよ！」
いきなり叫んだことに俺共々驚く弟を完全放置し、こちらに向かって真っ直ぐ詰め寄ってきた。
「ふざけないでよ！　何を当たり前のようにあなたが戦おうとしてるのよ！　寛矢も寛矢よ！　あなたは船越君が戦おうとしてることに何の疑問もないの！　こんなのおかしいって、誰も思わないの！」
いつもの学校での凛々しさが嘘のような取り乱しようだ。そのくらい、自分が蚊帳の外扱いだったのが悔しかったんだろうか……？
「船越さんは、舞帆さんのために戦って来たんでしょう！？　なのに何で舞帆さんが怒るんですか！？」
「姉さん、船越さんは自分から戦うことを望んでセクレマンになったんだ。否応なしに戦わなくてはならないはずだった姉さんとは事情が――」
「知らないもん！　わ、私何も聞いてないもん！　お母さんも急に出てっちゃったと思ったら、船越君にそんなこと言うなんて！　こんな、こんなこと、知ってたら絶対に――！」
見てる方が痛々しくなるほどに、彼女の声には動揺が如実に現れていた。達城との出会いを話した辺りから見え隠れはしていたが、今ではそれがはっきりと表出している。
彼女の言い分は最もだ。何の事情も知らないまま、自分の代わりに他の誰かが自分がするはずだった戦いをしていた。こんな居心地の悪くなる話はそうそうない。真面目な舞帆ならなおさらだ。
知らない方が幸せなことってのは、こういうのを言うんだろうな。……やっぱり、非常事態とは言えあっさりと正体をバラすのは浅はか過ぎたみたいだ。俺は自分の早計な行動が招いた結果を目の前にして、後悔の味を噛み締める。

「私がやるわ！　どうせ後一人だけなんでしょ！？　私と寛矢で戦うから、あなたはもうこんなことに関わらないで！」
「舞帆、お前じゃ頭は良くても力が足りない。だから達城は俺にやらせたんだ。さっき話したばかりじゃないか」

「違う！　違うよ！　違うもん！　そんなことない、私だってやれる！　私のために造られたセクレマンなら、絶対にやれる、やってみせるから！」
　まるでおもちゃをねだる子供のように、目頭を熱くしながら激しく食い下がる。ここまで頼まれたら普通は譲ってしまうものなのかもしれないが、こればかりは俺も譲れない。このためだけに、俺は痛みに耐えてまでセクレマンを選んだんだから。

「舞帆。桜田も、お前の母さんも、お前が大事だから戦うんだ。俺もお前に、無事でいて欲しいんだよ」
「でもっ……」
「お前は何の心配もしなくていいんだ。俺が絶対に、戦わなくていいお前の、当たり前の日常を守るから」
「……」
　何も言わず、黙り込む舞帆。俺は彼女の恩に報いる機会を、ただ願った。
「頼むよ。頼む。もう一度だけでいいから、俺にお前を守るチャンスを――」

「その必要はない」
　この中の誰のものでもない、男の声が聞こえた。しかし、突如として舞い戻った静寂の重さは、俺が話を終えた時の比ではなかった。
　ふと声が聞こえた方に目を向けてみれば、病室のドアがノックもなしに開かれていることに気づく。そしてそこには、鋭い眼光で俺を射抜く、一人の初老の男性の姿があった。スーツをピッチリと着

込んだ、やり手の経営者って感じがする。
にしても、今のフレーズ、何か聞き覚えが――

「お父さん！？」
今までにないくらいの派手な驚き方で、舞帆が声を上げた。
舞帆のお父さんってことは……校長先生の桜田寛毅か！　忘れがちなんだよな、校長の顔や名前って。しかも、よく考えたら話を切るときのフレーズが舞帆と一緒じゃないか。さすが親子だ。
――で、舞帆をセクレマンに仕立て上げようとしたってのも、このオッサンなわけだな。
別に威嚇してやろうとか思ってたわけじゃないが、達城から背景を聞いた以上、良くは思えない。向こうも俺みたいな外野に首を突っ込まれたのがシャクなのか、キツイ視線を送っている。
「父さん――どうしてここへ」
「寛毅に舞帆か――そして、船越路郎」
息子の問い掛けにも反応を示さず、真っ直ぐ俺を見据えて来る。頼むから平中には挨拶くらいしてやってくれ。
そんな俺の些細な願望を打ち砕くように、厳つい校長先生は俺の傍まで足を運ぶ。
遠目に見ていてもデカイとは思っていたが、近くに来るとその体躯がいかに凄まじいかがはっきりとわかる。桜田よりでかいんじゃないか？
校長はさらに俺を鋭い目つきで見下ろし、厳かに、容赦なく言い放つ。

「貴様か。娘の栄光を横取りした害虫は」
害虫て……予想以上の言われようだ。
すると、いきなり校長先生に害虫呼ばわりされ、対応に苦慮していた俺を庇うように舞帆が自分の実父の前に立ち塞がった。
「なんてこと言うのよ！　初めて会って早々言うことがそれ！？

船越君に謝って！」
「舞帆……なんということだ、私の愛娘がここまで篭絡されていたとは」
娘の怒気溢れる声を前にして、校長は心底嘆かわしい、というような顔をする。
校長にここまで嫌われる生徒って、そうはいないだろうなぁ。余りの物言いに腹が立つが、悲しくもなる。
「いいか舞帆。私の話をよく聞いてくれ。お前は騙されているんだよ、この卑劣な男に」
「な、なによそれ！　いい加減にして！」
「お前はこの男に何をされた？　この男の縁者に誘拐されたあげく、襲われたそうではないか。その上、自分の撒いた種のために大怪我を負い、お前の気まで引こうとした」
あることないこと、言いたいように言ってやがるな。……だが、俺に責任があるのは事実だ。悔しいが、何も言い返せそうにない。
そんな俺のやるせなさを知ってか知らずか、舞帆がさらに怒る。
「船越君を馬鹿にしないで！　船越君は私のために、実のお兄さんにまで抗って！　あんなに血まみれになってまで……戦ってくれたのに……そんな言い方、ないよ」
竜頭蛇尾、というのだろうか。舞帆の訴えは次第に真っ赤な怒りから、暗い涙声に変わっていった。
「それこそが、この男の策謀なのだ。お前をそうやって惑わせて、我が桜田家へ取り入ろうとしている下劣な輩なのだよ。その証拠に、お前は本当なら器物損壊と傷害に問われるはずだったこの男を必死に庇い立てた上に、私の助力まで求めたではないか！」
「――なに？」
俺は目を丸くして舞帆を見る。彼女も俺の視線に気づいているのか、目を合わせようとしない。
校長の視線が舞帆から俺に移ると共に、その哀れみの目の色は激

しい憤怒へ変わる。
「ついには舞帆を差し置いてセクレマンを騙り、娘の華々しいヒーローデビューを汚しおった……なんたる侮辱か！」
「達城に――校長の奥さんに聞いた。あんたが娘をどうしてもセクレマンにしようとしたって、ホントなのかよ」
向こうの怒りはたくさん聞いた。聞くだけ聞いた。今度は俺が聞きたい。
その一心で、俺はそこで初めて舞帆の父と言葉を交わした。
「朝香が舞帆を置いてセクレマンに選んだと言う男がどれほどのものかと思ってみれば、まさかよりにもよってあの害虫男だったとはな。貴様と朝香の動向はとっくに把握していたが、舞帆しか使えないというシステムの根本を無視してまで運用する程の者がいると聞いてしばらくは静観していた。だが、舞帆の代わりに戦うなどとほざいていながら結局はこのザマか」
「質問に答えたらどうなんだ！」
どうやら、俺達のことはお見通しだったらしい。だが、肝心の質問の答えがまだ聞けていない。校長のどこまでもこっちを軽視する物言いの数々に、さすがに言える身分ではないと分かっていても、声を荒げずにはいられなかった。
「学園のトップたる校長に対して暴言とは……舞帆の指導で更正したとも聞いていたが、とんだデタラメだったようだな。まぁ、いい」
そこで一旦言葉を切って咳ばらいすると、目の色が瞬時に変わった。

一切の反論を許さない、絶対的な威圧感。目だけでなく、そういった雰囲気を全身から噴き出しているようだった。
思わず腰が引けてしまいそうにもなったが、ここで引いたら男が廃る。冷や汗を流したまま、決して目を反らさず、俺は真っ向から校長と向き合った。

「朝香の言う通りだよ。舞帆は賢い。貴様も知っているだろうが、この娘は海外留学も経験し、既に教養の面では卒業しても問題ないレベルだ。お世辞の一切を抜いてな。寛矢も飛び級で宋響学園を卒業してヒーローになったが、舞帆ならそれ以上も簡単だったはずだ。この娘なら桜田家髄一の才女にもなれた――貴様にさえこだわらなければ！」

俺に……？　俺がダメだったから、ほって置けなかったら、舞帆は飛び級をしなかった……？

宋響学園は、学力がその学年を修了できるレベルだと判断されれば、特例として飛び級ができる。確かにAクラスの舞帆ならそれもできたはずだ。

――それを邪魔したのが、俺？　また俺のせいで、舞帆が損をしたってのか？　舞帆も、気まずそうに俺から目を逸らす。

俺の、せいで――

「舞帆は必ず優秀なヒーローとなる。そのプロデュースには、我が桜田家に仇なす不届き者の成敗が丁度いいだろう。朝香は舞帆では力不足だと危惧していたらしいが、そんなものは杞憂だ。そこから来る最悪の偶然が、貴様を呼び込んでしまった」

「父さん！　船越さんは、姉さんのために今まで――」

「今まで戦ってきた、というならもう用済みだ。桜田家の敵は桜田家で倒す。貴様のような害虫が出る幕ではない！」

今まで黙っていた桜田が繰り出す弁護も退け、ハッキリとそう言い放つ。そして校長は一転して怒りを含まず、それでいて真剣な顔で舞帆に向き直る。しかし、彼女の表情はどこか沈痛な雰囲気が漂っていた。

「舞帆。我らに仇なす敵から犯行予告が来ているんだ」

「えっ！？」

「なっ！？」

突然のカミングアウトに、俺を含む全員が騒然となる。校長は俺達の前で、一通の手紙を開いた。
「『今夜、宋響学園の校舎を破壊する』――実に単刀直入な挑戦状、だな」
「今夜だなんて、ほぼ今じゃないか！」
「無茶です、父さん！　姉さんは実戦経験がありません！」
「そ、そうですよ！　舞帆さんが死んじゃいます！」
俺が声を上げると、桜田と平中が必死に校長の意向を制止する。しかし、やはり耳を貸す気はないらしい。
赤の他人の平中と害虫同然の俺には全く目もくれず、舞帆と桜田だけを見詰めて、校長は声を上げる。

「これが最後の戦いだ。セクレマン、そしてラーベマンの力を以て、憎むべきラーカッサを討つ」
堅い父の意志に抗い切れなくなったのか、桜田はもうなにも言わなかった。否定も、肯定もせず。ただ、やるからには勝つしかない、という決意はあるらしく、戦う者としての引き締まった表情になっている。
そして……。

「舞帆……」
「船越君」
それまで受けた恩のあまりの重さと罪悪感から、しばらく見れなかった、舞帆の顔。
その表情からは、先程のような気まずさは消えうせていた。未だにそこから抜け切れていない俺が惨めになるほどに。
「決めた。私、ラーカッサと戦う」
「姉さん……」
心配そうに眉をひそめる弟に振り返った彼女は「大丈夫よ」と優しく微笑むと、意志の強い瞳で俺に向き直る。

「私ね、ずっと決めてたの」
「決め……てた？」
「うん。あなたに助けられた日から、ずっと。あなたが助けてくれた分だけ、あなたの助けになろう、あなたを守ろうって」
舞帆は感慨深げに瞼を閉じると、俺の手を優しく取った。彼女の隣から、「この状況でなにやってんですかー！」という平中の怒鳴り声が聞こえてくる。
「痛くはない？」
「え？」
「ほら、二年前言ってたじゃない？　力強過ぎんだろって」
「あ、ああ、そうだっけ？」
「ふふっ、忘れっぽいんだから」
さっきまでの状況が嘘のように、舞帆は楽しげに笑う。まるで、出撃前に酒を飲む特攻隊じゃないか。

「……私、あの時は本当に、どうなることか分からなかった。理解が付いていかなかったのよ。あなたが助けに来てくれる前からも、後からも。そのくらい、ずっと怖かった」
「悪い。俺の兄貴のせい――俺達のせいで」

俺もあいつと同じだ。ひかりを守れなかった。傷付けた。俺と血を分けた兄弟のしたことで、発端には俺も関係がある。だから、あいつだけのせいだなんてムシのいいことなんか言えない。

「いいの。――私は襲われたことより、私のために血達磨になって死に物狂いで戦うあなたの方が怖かったのよ。もし私のせいであなたが死んだら、きっと生きていけなかった。命の罪悪感なんて、堪えられっこないもの。だからこそ、会ったばかりの私のために、命懸けで戦って、生き延びてくれたあなたには、一生ものの勇気を貰ったわ」

「俺は、身内として尻を拭おうとしただけだ。ロクなことはしちゃいないし、大して役にも立っちゃいない」
「ううん。あなたがいてくれたから、今の私がある。だから、私もあなたのなにかになりたかったの。ああやって、叱ったりしかできなかったけど」
「おかげさまで友達もできた。感謝してるよ」
舞帆は俺の言葉に満面の笑みを見せると、名残惜しげに、ゆっくりと手を離した。なぜか、その顔はどうしようもなく悲しげなものになっている。

「――だから、これが最後の恩返し。あなたにあの危機を救われた分に応えるために続けてきた、恩返しの締めくくり。あなたが命懸けでセクレマンとして戦ってくれた分だけ、私が戦う。私の命を守ってくれたあなたな命を守るために、今度は私が命懸けで戦うね」
「舞帆、本当にやる気なのか」
「やる。あなたのためだから。大丈夫、きっとすぐに帰ってくる！だから、あなたも早く良くなってね。あと、今まで意地悪ばっかりしてごめんなさい。じゃあ、行ってくるから」

それだけ言うと舞帆は家族達と共に病室を後にして行く。
「さぁ、行くぞ舞帆、寛矢。我ら桜田家は、常にあらゆる分野において第一線で活躍してきた名門。故に、何があっても負けてはならんのだ」
「……はい」
桜田は病室を出る前に俺に一礼していったが、校長の方は振り向きもしなかった。

二人に続いて病室を去る舞帆。
その直前のことだった。
少しだけこっちを向き、何かを呟くように口を動かす舞帆。何を

言ってるのか――涙を頬に伝わせる彼女の唇は、見間違いだろうがこう言ってるようにも見えた。

――帰ってきたら、ちゃんと伝えるから。

――好きです、って。

△

再び静寂が戻ってきた病室。すっかり夜空になった中、そこにいるのは俺と舞帆――そして達城だった。

舞帆達が病室を出て行ってからしばらくしたあと、達城が見舞いに来たわけだ。どうやら校長の回し者に秘密基地を追い出され、セイサイラーを持ち出されたらしい。秘密基地は、とっくに「秘密」じゃなくなっていたってことか。

いきさつは俺に代わって平中が説明してくれた。さすがにあれの後だと、俺からは話しづらい。こういう時の平中の気遣いには救われる。

達城は一息つくと、呆れた顔で俺を見る。

「で？　なにも言い返せずに自分が守ろうとしたあの娘を死地に見送ったってわけ？」

「……俺には、デカイ口を利く資格なんてなかった。舞帆に迷惑かけてばかりで、セクレマンになって恩返ししようとしたら、結局心配させて。あの校長の言ってること、ちょっと腹は立つけど、結構当たってんだよな」

「落ち込むのはあなたの勝手だけど、これからどうするつもり？　舞帆や寛矢が必死こいて戦ってる間、そうやって寝そべってて平気なの？」

――そんなわけがあるか！
俺がこうして病室のベッドにいる間、二人はどこまで強くなったのかわからない敵と対峙してるんだ。寝てるままでいいはずがない！
……でも、行ったところで、俺に何が出来るんだろう？　また、足を引っ張って終わるのか？
そんな考えが頭を過ぎるたび、普通なら迷わず掛け布団を引きはがすはずの俺の手は奮え、そこから少しも動けなくなっていた。

そんな俺の煮え切らない態度に愛想をつかしたのか、達城はため息をつくと共に病室を後にした。

「そこで、待ってなさい」
たったそれだけを言い残し、彼女は一旦この場から去る。達城のノックとは違う、それの音が聞こえてきたのは、それからすぐのことだった。
「どうぞ」
俺は入室を許可する。相手が自分にとって、どんな大変な存在であるかも知らずに。
「入ります」
「――！？」
――今の声って！？

平中と共に目を見張る俺の前に、あの少女は現れた。
変わらない優しげな瞳。艶やかな長髪。どんな芸術を以てしても再現不可能な整い過ぎる目鼻立ち。触れることさえ億劫になるような、澄み切った白い肌。スラリとした滑らかなボディラインが、女性としての魅力をより視覚的に表している。

――そう、文倉ひかりの美貌は、三年前から変わらないままだった。

「ひ、ひかり……！」
「路郎君。また、会えたね。達城さんから、聞いたよ」
まるで何事もなかったかのように、彼女は中学時代と変わらない笑顔で微笑んで見せる。それが信じられなかった。あれだけのことがあって、まだ俺に笑いかけられるなんて……。
すると、今度は平中に視線を移した。
「花子も、久しぶり。ごめんね？　中卒以来、全然連絡取れなくて」
親しげな口調だ。本当に二人は友達だったらしい。……ん？　それじゃあ、俺のことが好きだって言う彼女の友達ってまさか……？
「う、ううん、いいよいいよ！　そ、それよりひかりこそ大丈夫なの？　船越さんから聞い――」
そこで慌てて口を塞ぐ。思わず過去を掘り返してしまったことで、俺と平中は重い空気を肌で感じることになった。正直、ひかりの友達云々どころじゃない。
しかし、当のひかりは全く気にも留めない様子で優しく微笑んでいる。焦るこっちが恥ずかしいくらいに。

「――そのことでね、路郎君に話があるの」
「話？」
俺が聞き返すと、ひかりの後ろから何か物音が聞こえた。なんだろう、と俺が首を傾げると、そこから小さな男の子がひょこっと顔を出してきた。どういうわけか、俺の――セクレマンのソフトビニール人形を持っている。
「……弟さんか？」
「違うよ。――ほら、おいで瑳歩郎（さぶろう）」
他人の気がしない名前で呼ばれた、その瑳歩郎という二歳か三歳くらいの男の子は、ニコニコしながらひかりにしがみつく。まるで、親子のような絵面だ。
「瑳歩郎……？」

「うん。あの時、授かった子。覚えてる？」
「――なっ！？」
「えええっ！？」
俺は思わず傷の痛みも忘れて立ち上がりそうになる。
――あの時って、中学の卒業式の！？　そんなバカな、弐郎の息子だと！？　だって、あいつ、「堕ろす」って……！
驚愕のあまり動けなくなる俺と平中を交互に見遣り、ひかりは苦笑しつつ、俺の手の甲に優しく手を添えた。
「怖かった。すごく怖かったよ。どんなことをされるのか、どんな目に遭うのか、全然想像つかなかったから。普通に赤ちゃんを産むより、ずっとずっと、怖かった。だから逃げ出したの。そして、行き着いた病院で、この子を産んだわ」
――俺は、バカだ。
こんなにひかりが苦しんでるのに、俺は今まで何をやってたんだ？
舞帆に尻を叩かれながらも、それなりに充実した学園生活を送っている間、ひかりがどんな辛い思いをしているのか――彼女を忘れた日なんてなかったはずなのに。
ひかりも、舞帆も、俺のせいで苦しんで、泣いて――なんだよ、それぱっかじゃないか。俺、何の役にも立っちゃいない。
「交通事故で両親もいない、身寄りのなかった私を育ててくれた加室孤児院の先生や、同じ孤児の女友達には反対された。それでも、私は産むことを選んだの。――なんでか、わかる？」
「……産まれて来る子供には、罪がないから、とか？」

ひかりなら、こう言いそうな気がする。だから、根拠もなく俺はそう答えた。
しかし、彼女は首を横に振る。すると、か弱い彼女の手が、俺の手首をしっかりと握り、優しくも真剣な目で俺を見据える。
「あなたと、繋がっていたかった。あなたと、少しでも関係が保てるなら、あなたの傍に、少しでもいられるなら。そして、この子があなたのように育ってくれたなら……それだけで胸をいっぱいにして――私は、瑳歩郎を産んだのよ」
「ひかり……」
こんな俺のために、ここまで……。
余りにも積み重なり過ぎる負債の数々に、俺の罪悪感はさらに拍車が掛かっていく。
「私が瑳歩郎を産んでから、孤児院の先生や路郎君のおばさまが協力してくれたの。私も学園に入れなくなった代わりに、孤児院で働いてる」
「おばさまって――母さんが！？」
「うん。少しでも責任を取りたいから、って、養育費を捻出して下さったの。こないだお会いした時に、もっと息子が早起きしてくれれば……その、任せられる、のにって……」
熱でもあるのか、ひかりの顔はだんだんと上気して、朱に染まっていく。この場で俺が何をやらかしたのかはわからないが、なぜか平中には厳しい目で見られていた。
「それで、そろそろ瑳歩郎のことを路郎君にも話そうって思ってここまで来たの。……そこで、達城さんに聞いたわ。今のあなたこと。そして、桜田舞帆さんのこと」
そこで、俺は思わずビクリと肩を震わせた。これ以上、ひかりにまで心配はかけたくない。それに、今の自分に何が出来るのかわからない。しかし、舞帆を放って置きたくもない。どうすればいいか、どうすべきか。それを今の俺は見失っていた。

そこへ、さらなる来客が俺に衝撃を与える。ひかりの背後から足音がしたかと思うと、到底このヒーロー絡みの件には関係ないような人物が顔を出してきた。
「路郎。ダメよ、いつまでもそんなクヨクヨした顔じゃあ」
「か、母さん……！」
「ええええーっ！？　ふ、船越さんのお母さんッ！？」
実年齢より若干老け込んだ外見の俺の母、紗夕（さゆ）は、いたずらを叱るようなトーンの声で喋りかけて来る。
「ひかりさんを通じて、あなたのことはちゃんと聞かせて貰ったわ。あなた、生徒会の女の子の代わりにヒーローになったんですって？」
「……黙ってたこと、怒ってんのかよ」
今の、最も情けない姿を晒している時に事情を知られたためか、俺の口調は自分でも恥ずかしくなってしまいそうなほどに拗ねたものになっていた。意地悪のつもりで、俺はそっぽを向く。

「そうね。本当なら、怒るところだわ。家族に何の相談もせず、独りで全部しょい込もうとするなんて。――でも、それ以上に驚いたわ。そして、嬉しかった」
「嬉しかった？」
予想外の母さんの言葉に、俺は思わず向き直って目を見張る。
「お父さん――零荏（ぜろう）郎さんは酷く女癖が悪くてね。浮気なんて日常茶飯事だったわ。それは、弐郎も同じ。私はこの家族から、一時の快楽なんかじゃない、本当の幸せが得られる子が出ることはないんじゃないか、って思うことがあったわね」
母さんの言う通り、俺の親父も兄貴も、とんだ変態野郎だった（親父に関しては俺がよく知る前に亡くなったから詳しくはわからないが）。特に弐郎は許せない。あいつを止められなかった、俺自身も。
「でも、あなたは違ったわ。間違いはするし後悔だってするけど、

いつだって本当の幸せを、当たり前の暮らしをしてこれたじゃない。優しい人に囲まれて、学校の友達とも笑い合って」
「母さん、俺……」
「いいのよ。お母さん、無理にああしろ、こうしろなんて言わない。だから、あなたにとっての平和な暮らしを守るために戦うのなら、私は止めたりなんかしない」

俺の過ちも、自分への怒りも、情けなさも、全部受け止めて、母さんは俺を抱きしめた。
「――！」
ひかりや、平中が見ている中でそんなことをされたら、普通は恥ずかしがって離れようとするものだろう。でも、俺は身じろぎもせずに、その温もりを享受した。
中学時代、ひかりが弐郎にされたことを知ったあの日から、俺の人生は大きく狂っていた。俺は何もできず、守りたい、力になりたいと思った人を、結局は泣かせた。
そんなろくでなしが、当たり前の幸せなんて貰えるはずがない。そう感じて、俺は母さんからも距離を置いていた。
本当なら、いつでもこうして――包んでくれたかもしれなかったのに。寂しい、悔しい思いはしても、独りにはならなかったかもしれないのに。
「お、俺……俺はっ……！」
「あなたは確かに悪い子だったわね。でも、無理してそのままでいなくたって、いいのよ。みんなみんな、あなたの味方なんだから」

……み、か、た。
母さんが、俺の、味方。
みんな、味方……？
そうなのかな。ひかりも、平中も、桜田も。

――そして、舞帆も。
みんな、俺の味方なのか？　味方で、いてくれるのか？　何もできずにいた、俺の？
「くっ……う……！」
俺の手を優しく握ったまま、何も言わずただ天使のように微笑むひかりの顔が視界に映ると、途端にその景色がぼやけはじめた。
平中の、自分の腕白な弟を見るような、少し困った笑顔が目に入ると、ますますぼやけに拍車が掛かっていくのがわかる。
そこで俺はやっと、自分の目頭が熱くなっていることに気が付いた。
「俺――俺、俺は……！」
情けない涙声しか出てこない。それを恥じる余裕もなかった。
俺はありのままの優しさを受け止めて、その身にあまる救済にむせび泣いた。

△

「溜め込んでた負の感情って奴を全部吐き出してもらった所で、そろそろ答えを聞こうかしら」
枯れるまで出し尽くした涙の跡を拭い、いつもの顔で、俺は戻ってきた達城と向き合った。
ひかりも平中も、母さんも、俺の味方だと言ってくれた。状況も時間も忘れてしまいそうになるほど、ただ嬉しかった。
涙なら、もう乾いた。泣き言も弱音も、黙って聞いてくれた。達城の言う通り、負の感情は全て吐き出した。みんなの、おかげで。
「俺、戦いたい。自分のために、受けた恩を、返したい！　このまま寝てるのだけは、絶対に嫌だ！」
もう、強がる必要もない。悪ぶることも、いい子ぶることもない。

言いたいことを、一切のブレーキを排して垂れ流す。
「舞帆を助ける。何も出来なくても、役立たずでも、その気持ちだけは捨てちゃいけない。そう思うから」
「――いい返事ね。あなたのことを調べて、ひかりちゃんやお母さんを呼んだのは当たりだったわ」
人のことを勝手に調べやがって……だが、今はそれでいい。おかげで、目が覚めた。
俺はいつまでもろくでなしだ。それでも、一つでも恩を返せるなら、返していく。誰かが支えてくれたなら、それができるかもしれない。そしていつか、その時支えてくれた誰かの助けにもなれるまで――俺は、強くなりたい。

「盛り上がってる所悪いけど、戦況は最悪よ。私が危惧した通り、舞帆達は劣勢だわ」
「劣勢！？」
「ええ。やはり、なんとか彼女のいる学園まで向かって、あなたが代わって変身するしかないわね」
くそッ！　やっぱり経験のない舞帆じゃ荷が重かったんじゃないか！
俺は頭を抱えるしかなかった。――しかし、気掛かりが一つ。
「……ちょっと待て。セクレマンの基地から追放されたはずのあんたが、なんでそんなこと知ってんだ？」
「ああ、それはね……」

「僕のコネってヤツかな？」
その時、意外な人物がひょっこりと達城の隣に現れた。
目鼻立ちの整ったその美男子を見て、俺は思わず声を上げる。
「生徒会長！？　こんなところでなにしてんだ！？」
「なにって……君の最高の活躍へのお膳立てに決まってるじゃないか」

少しばかり自慢げな口調で語る笠野昭作。なぜ彼がここにいるのか、という疑問は達城が解消した。
「寛矢――即ちラーベマンの所属している、ラーベ航空会社。彼はそこの社長の息子、つまり御曹司なのよ」
意外な繋がりがあったもんだな。社長の息子とは聞いてたが、桜田のいる会社のお偉方のご子息だったとは。

「彼に頼んで、小型飛行機を使って上空から宋響学園の状況をデータにして送って貰ったのよ」
「いきさつをこちらの親御さんから聞いた時は驚いたよ。まさか君がセクレマンだったとはね。でも、それほど不自然な気はしなかったかな。いつもあの娘と一緒にいたんだからね。何より、君が彼女の指導で頑張ってるってコトは聞き及んでたわけだし」
俺は笠野と目を合わせると、臆面もなく胸中を打ち明ける。
「俺は生徒会長がこの件に出張って来たことに、ただただ驚くばかりだよ」
「仮にも生徒のトップに立つ生徒会長が、こんな話を聞いて黙っていていいわけないだろう？　君にばかりいい格好させられないしね」
「いい格好になんてなっちゃいないが……とにかく、助けてくれてありがとう。あんたにも恩は返さなきゃな。さて……」

そこで話題を切り、俺は達城の方へ向き直る。我ながら、すっかり元通りの調子だ。
「今から駆け付けて、間に合うか？」
そう、舞帆を助けに行くとは行っても、現場に駆け付けられなくては意味がない。セイサイラーがない今、誰かに連れていって貰うしかないわけだ。しかし、母さんは車の免許を持ってない。多分、ひかりや笠野も。
「なんとも言えないわね……私も今は車はないし、すっかり夜中だから電車が使えるかはわからないわね。タクシーを呼ぶ時間はない

と思った方がいい。笠野家に頼んでヘリや飛行機をチャーターしても、近付く前にラーカッサに撃ち落とされかねないわ」

「私に任せてください！」

行き詰まりを感じた瞬間、我こそはと手を挙げる者がいた。俺を含む周囲の視線が、平中に集中する。

「平中？」

「私、『ピザファット』でバイトしてるから、配達が出来るよう免許を取ってるんです！　自宅がすぐそこですから、すぐにバイク取ってきます！」

渡りに船とはまさにこれか。ピザファットといえば、コマーシャルヒーローの「ファットマン」が経営してるピザ屋だっけ。彼女はセミロングの髪を軽やかに靡かせ、病室から駆け足で飛び出した。

「――ちょっと意外だったけど、足は手に入ったわね。後はあなたの覚悟だけよ」

「ああ！」

俺は傷を押してベッドから起き上がり、患者服から着慣れたレザージャケットに着替えた。七月に入ろうとしている今の時期に着るようなものじゃないが、セクレマンへの変身による圧迫の激痛から少しでも傷を庇うには、これが一番手っ取り早いんだ。

あと、ひかり……そんなにまじまじと俺の着替えを観察すんな。

「路郎、傷は酷いんでしょう？　痛み止めはいいの？」

本人の意志を尊重して戦いを否定しない方針は取っていても、やはり母親としての性が、母さんに不安な表情を浮かばせている。

「そんな悠長なことしてる暇はないんだ。それに今、こうしてる間に舞帆が苦しんでるんじゃないかって思うと、俺はそっちの方が耐えられないよ」

俺は「大丈夫」という意味を込めて母さんの肩をポンと叩き、ひかり、そして瑳歩郎へと視線を移した。

「ひかり――ありがとう。それと、もう心配しなくてもいい。ひかりのおかげで、元気が出てきたから」
「うん……あのね、こんなこと言っても水を差すだけかもしれないけど、無理だけはしないでね。強くなんかなくたって、私も瑳歩郎も、その――セクレマンが、大好きだから！」
紅潮した顔で言い放たれたその一言に、俺は心臓を雷で撃ち抜かれたように、ドキリと心身を震わせた。
血流が全身を目まぐるしく駆け巡り、俺の体温を際限なく上昇させる。
――ダメだ、ひかり。俺みたいな勘違い野郎に、そんな思わせぶりなこと言ったら。
それと、後ろで達城が「何人落とす気なのやら」とか言ってるが、何の話だ？

「たぁ、だぁ！」
すると、今度は瑳歩郎が俺の足に抱き着いてきた。俺にもこんな純真な時代があったのかと思うと、情けなさ過ぎて涙が出てくる。
「瑳歩郎……だよな。俺みたいなダメな奴じゃあ大人ぶっても大したことは教えられそうにないが――これは言っとくぞ」
しゃがみ込んで彼と目線を合わせ、俺は母さんが俺にしたように、瑳歩郎を抱きしめる。
「君だけは――君だけは、戦わなくたっていいぐらい、たらふく幸せになってくれ。君の親父の代わりに、それだけは言っておきたいんだ」
まだ小さいんだから、意味なんて到底わからないだろうが、それでも別に構わなかった。
どうあいつを悪く言っても、この子の父親には違いない。だから、

父としての自覚などないあいつに代わって、俺はこの子の幸せを願う。
「待ってろよ。セクレマンは強いんだ。絶対に負けないんだからな！」
「だぁ、だぁっ！」
俺は言葉もろくに通じない子供に、高らかに勝利を宣言した。
瑳歩郎も、なんとなく意味を子供心に察したらしく、嬉しそうにキャッキャッと笑う。ひかりもにこやかに笑ってくれていた。

「さて、挨拶は済んだかしら？」
「ああ。行ってくる」
俺は瑳歩郎と別れると、達城に出動の意志を目で伝える。笠野は開きっぱなしの病室のドアにもたれたまま、何も言わず強く頷き、激励のウインクを送ってきた。してきたことはともかく、応援してくれる気持ちはありがたく受け取っておこう。

「ちょっと待って、これを持って行きなさい」
「ん？」
達城は何かのメモ帳を取り出し、俺の胸にグイッと押し付けた。
「これは？」
「あなたの覚悟を見込んで記した、セクレマンの真のポテンシャルを発揮するシステム。これだけは完成させてすぐに設計図を処分してるから、基地を制圧した寛毅も知らないはずよ」
土壇場でスゴい話を持ち込んできたな。俺はそれを開き、流し読みしてみた。
……こんなシステム、何で俺にも教えなかったんだよ、オイ。
「これはそのアドバンテージと引き換えに、フィジカル面で深刻なリスクを背負うのよ。だから、万一今の事態になっても寛毅が舞帆に使わせることがないように設計図を処分したし、あなたに死なれたらあのお母さんに申し訳が立たないから、あなたにも教えなかっ

た」
どうやらこのグラマーな二児の母は、人の心を読むプロらしい。エスパーかこの人は……。
俺にこのシステムを教えなかったのは悪く言えば、システムを託せるほど信用していなかったってわけなんだな。
「あなたの思ってることはほぼ当たりでしょうね。だからこれを託したってことは、私があなたを一人の男として完全に信頼した証と取ってもいいわ」
「……もしかして本当にエスパーさんだったり？」
「考えてることがやたらと顔に出てるだけよ」
マジかよそれ。エロ本に手ェ出したら俺ってどんな顔になっちまうんだろ。

そんな俺の悩みを完全放置した上で、達城は息子を応援する母のように、威勢のいい声で俺の背中を押す。
「さて、セクレマン出動！　ってとこね。学園の平和、キッチリその手で守って見せなさい」
達城にとって、セクレマンはあくまでも舞帆ではなく俺らしい。その言葉を背に、俺は信頼の証として賜ったメモ帳を手に病室を後にした。

病院から出たところでは、宅配に使われるような屋根付きバイクに跨がる平中が既に待機していた。俺は大急ぎで彼女の後ろの席に飛び乗り、落っこちないよう彼女にしがみつく。心なしか、彼女の頬が赤らんでるように見えた。
「悪い、遅れた！　宋響学園まで頼むぞ！」
「任せてください！　船越さんの役に立つ、千載一遇のチャンスですから！」
嬉しいことを言ってくれながら、平中はアクセル全開でバイクをぶっ飛ばす。これの形状からは想像もつかないスピードだ。

――とにかく、これで宋響学園まで辿り着ける。舞帆、少しでもいい、無事でいてくれ……！

第五章　船越路郎、救って見せる

粉々に切り刻まれた生裁剣の残骸。
宋響学園にたどり着いた俺達の目を奪ったその姿は、意気込んでいた俺に現実と言う名の冷水を被せた。

笠野がラーベ航空会社に掛け合って用意した、上空から撮影された宋響学園の映像。
それを携帯から受信して使い、俺達は今、舞帆達がどこで戦っているかを把握しつつ、その場所へ向かっていた。
その途中で、俺に忠告を突き付けるかのように、あの残骸が転がっていたんだ。
「こ、これって、セクレマンの剣……ですよね？」
不安げな表情で平中が俺を見る。
正直、俺は彼女以上に不安な気持ちになった。

生裁剣を使えたバッファルダとの一戦目では、かなり優位に戦えた。二戦目では生裁剣が使えなかったから負けた……などと言い訳がましいことは言わないが、少なくとも剣が使えれば、あれほど無様な負け方はしなかったはずだ。
それくらい、生裁剣には価値があった。セクレマンにとっての、唯一の武器だったんだから。

その生裁剣が、破壊された。それはつまり、バッファルダとの二戦目の時と同じ条件で勝負に臨まなければならないのに等しい。
達城から隠されたシステムは伝授されたものの、テストもなしにぶっつけ本番で使うのは、実を言うと怖かったりする。
その上、危険が伴うからと今まで絶対に使わせまいとしてきた程のリスクまであるというのだ。臆病なことを言えば、なるべくは使

いたくない。
しかし、他に生裁剣を破壊するほどの強さを誇るラーカッサに太刀打ちする手立てがないのも事実。俺はどっちに転ぼうと、腹を括るしかない現実を悟る。

――ちょっと前まで舞帆の代わりに命懸けで戦うって誓ったばかりだろうが！　何をビビってる！
俺は独りじゃない。舞帆も、母さんも、ひかりも、達城も、ここにいる平中だって、味方でいてくれたじゃないか！
……最後の一度でいい、男を見せろ、船越路郎！

「あ、あの、船越さん」
「――大丈夫だ、平中。俺は負けないから」
泣きそうなほど心配そうな顔をする平中に、俺は力強く頷き、なるべく安心させようと試みる。
彼女も俺の覚悟を知ってか知らずか、「もう諦めて、帰ろう」ということだけは、口にしなかった。

――今だけでも、信じてくれてるんだって都合よく解釈しても、いいよな？

「じゃあ……行ってくる」

俺は一瞬だけ顔を綻ばせると、すぐに気を取り直し、残骸を乗り越え、「死地」へと駆け出していった。
敢えて、見送る彼女の顔は見ない。
これ以上誰かの優しさに触れたら、後ろめたくなってしまう。そんな気がしたから。

△

図書館や物置、体育倉庫と、敷地内のあちこちが破壊されている。水道までもが一部損害を受け、水が漏れ出していた。
しかし不幸中の幸いか、肝心の校舎はまだ壊されてはいない。それで安心できるわけでもないが。
「舞帆！　どこだ、舞帆！」
一番多く瓦礫が転がっている場所で、俺は彼女の名を叫ぶ。強い硝煙の匂いに誘われてきたこの場所が、最も「戦場」と呼ぶに相応しい惨状だったからだ。

ふと、うめき声が耳に入ってくる。しかし、それは明らかに舞帆の声ではなかった。
「うっ！？
声の聞こえた方に目を向け、俺は目をしばたかせる。
そこには、瓦礫に足を挟まれたまま動かない、校長がいたからだ。
俺に難癖を付けてきた奴だとか、そんなことはこの際関係ない。俺は彼の近くまで駆け寄ると、ラーカッサとの対決まで温存する気でいたなけなしの体力を使い、瓦礫を退かしてやった。
既に骨折してしまっているようで、解放されたにも関わらず、校長はそこからピクリとも動けずにいた。それでも意識はあるらしく、憎々しげに俺を睨み上げる。

「……何をしに来た。私を助けて得意になったつもりか！」
「助けてもらっといて早々に言うことがそれかよ……ま、いいか」
彼の対応は相変わらずだが、不思議だとは思わない。あそこまで言いたいことを言っておいて、今更素直にお礼なんて言う気にはならんだろう。大人としてそれがどうなのかはともかくとして。
そんなことより、俺には大事なことが山積みなのだ。
「校長先生、舞帆と桜田は？　ここが一番壊されて新しいと思って

来たんだが」
「ふん、二人の活躍を見に来たのか？　あの子達ならグラウンドの方へ向かった」
二人の子供の居場所を指差す父親の顔は、自信満々のようで、どことなく不安げでもあった。
――なんだかんだで、やっぱり心配だったんだろうか。桜田家のプライドってやつのために戦いに引っ張り出しておいて、今頃になって良心を抱えだしやがったか。
俺は不信感を隠さない目で校長を一瞥して、グラウンドへ行こうと踵を返した。
そこへ、

「うわあああっ！」

轟音と共に激しく瓦礫が飛び散り、俺の足元を施設の残骸がえぐっていった。
その衝撃に流されるように飛び出してきたのは、赤いスーツを纏った翼のヒーロー……ラーベマンだった。
――いや、桜田には悪いが、ここは「翼のヒーローだった」と形容させてもらおう。

全身と翼のようなマントを刃物か何かで切り裂かれ、最早スーツの色か血の色か判別が付けられなくなっているその姿には、バッファルダと戦った時のような優雅さは微塵も感じられず、見るに堪えないほどの痛々しい様に成り果てていた。
俺をあそこまで追い詰めたバッファルダを手玉に取るようなヒーローが、ここまで容赦なく痛め付けられたという事実が、再び現実の理として俺に襲い掛かる。
「ゲホッ、ガハッ！」
桜田の美麗な顔立ちは血と痣だらけになり、すっかり見る影もな

い。
今飛び出せば身の危険があるかも知れないが、俺は脇目も振らずに、翼をもがれた英雄を助け起こす。
「おい、桜田！　どうしたんだ！　舞帆は！？　もう、やられちまったのか！？」
俺の呼びかけに僅かに反応を示すと、彼はかすれた声で何かを呟く。
「あ？　おい、何だって？」
桜田の口元に耳を寄せると、ようやく微かに聞こえて来る。
――そう、姉さんを助けて、という声が。
「ね……え、さん、を……」
「……わかった。いや、わかってる。絶対に舞帆は助けるから。お前は、そこで待っててくれ」
俺は桜田の傷付いた体を静かに寝かせ、彼が吹っ飛んできた方向へと目を向けた。

そして、雲一つなく澄み渡った夜空に輝く月を後光にして、一人の女性が姿を現した。
一見すると腹や脚が露出していて、紫色の水着のようなきわどい格好だが、その足先や指先には鋭利な刃が伺え、肘や膝にも鎌のような得物をぎらつかせている。
シャープなデザインのマスクで素顔を隠すその女こそ、桜田家の敵であり俺の最後の対戦相手――「ラーカッサ」こと狩谷鋭美と見て間違いないだろう。
「ようやく見つけたわよ、セクレマン。所沢に劣る分際で、ザコを差し向けて小手調べとは、いいご身分ね」
――ザコってのは、舞帆のことか？
経験がなくても、俺のために戦うと言ってくれた舞帆に向かって

ザコとは、こいつの方こそデカイ口を……！

軽快な口調で挑発しつつ、威圧的な態度でこちらを見下ろす彼女に対し、俺は真っ向から睨み上げた。

「ふぅん。所沢に痛め付けられたばっかりなのに、随分と威勢がいいじゃない。アタシと戦うために、ご苦労なこと」

「舞帆はどうした。生きてんだろうな！？」

何よりも、俺は彼女が心配だ。それだけに、声も自然と焦燥の色を帯びていく。

「すぐに殺したりはしないわ。死にたくなるような屈辱を与えることはあってもね」

「なんだと！？」

「気になるなら自分で見てくれれば？」

そう言って彼女――ラーカッサは、自分の後ろにある体育倉庫を指差した。ボロボロになってはいるが、一応は建物としての原形は残っている。

俺は一目散に最大の敵を素通りして、そこへ駆け込んだ。

△

「舞帆！？」

闇夜に包まれながらも、屋根が壊れていたおかげで月光に照らされていたため、薄暗くても舞帆の姿は用意に発見できた。

「ふ、船越君！？　なんでここに――！」

ところが、彼女は俺の呼び声にビクリと身を震わせると、俺から隠れるようにうずくまってしまった。薄暗いせいで、彼女の全貌がよく見えない。

「どうした、舞帆！　あいつに……ラーカッサに何かされたのか！？」
「あっ……その」
「怪我でもしたのか！　とにかく見せてみ――」
そこで、俺は彼女に伸ばしていた手を止めた。今の彼女の姿に、俺はデジャブを感じる。
やがて蘇ってくた、過去の記憶。
――弍郎にさらわれた彼女を救うために、あいつがいた病院に殴り込みに行った時。
彼女はその時も、傷付いていた。俺のせいで。
……ダメだ。こんなままじゃ、ダメなんだ、俺は。

「……」
俺はしばらく硬直していた自分の体に命令し、何も言わずに一糸纏わぬ彼女の体にレザージャケットを被せた。
元々傷の痛みをごまかすために着てきたものであったが、それを抜きにしても今夜これを着てきたのは正確だった。わざわざこれを用意してきてくれた達城に感謝しなくてはなるまい。

そして、自分の中から真っ赤な怒りが噴き上がってくる。溢れ出るこの感情がラーカッサの計算なのかはわからない。
ただ、そんな些細なことなんてどうでもよくなるくらい、俺は何も出来ずにいる俺への怒りで身を焦がし尽くそうとしていた。それだけは間違いない。

「あ、あのっ、船越君！　私なら、大丈夫だから！　今度こそ勝つから！　だからあなたはもう――」
顔を真っ赤にしながら、涙を流しながら、それでも戦う姿勢を辞さない彼女の口を掌で覆い、俺は思うままの気持ちを言葉にした。

絶対に負けられない。ここまでされて、挑発され、戦うと決めてしまったら。

「ここまでたきつけられたからには、立ち止まる気もいわれもないよな、舞帆」

△

ガラクタ寸前まで傷付けられ、舞帆の隣に転がされていたセイサイラーに跨がり、俺はラーカッサの元へ走る。

生裁剣が破壊された、つまり生裁剣に変形するサイドカーの部分が失われ、バイクだけの存在になったため、いつもより軽快にセイサイラーは地を駆けることができた。

既に彼女は臨戦態勢を整え、俺との一騎打ちを今か今かと待ち侘びているようだった。

――楽しそうな面して誘ってんじゃねぇよ。こっちは何も出来ない自分がどうしようもないくらい憎くて憎くて、頭が割れちまいそうなんだ！

そんなに戦いたいって顔してると、手加減してもらえなくなるぞ！

俺は怒りと決意を剥き出しに、赤いボタンを指で押し込む。これが、最後だ！

「――セクレイド・チェンジャァーッ！」

セイサイラーは俺がそこで跳び上がると、目まぐるしい変形を繰り返し、俺の身を包む鎧になっていく。

生裁剣がないことに多少の寂しさを感じつつも、俺は速やかにセクレマンへの変身を完了させた。

しかし、その鎧はすでにズタボロに痛め付けられた後だった。あちこちにひびがある。舞帆め、随分手荒く使い込んでくれたな。

「へぇ、格好いいじゃない。――憎ったらしいくらいにね！」

ゴング代わりに、まずラーカッサから繰り出してきた。

腕を振るい、その肘から放たれた刃がブーメランのように俺に襲い掛かる。

「――！」

これは、防御出来ない！

そう本能で反応した俺の体は、頭で考えるより速く横へ転がって回避していた。

俺の傍を通り過ぎた刃は、最新鋭の設備を紙切れを破るように切り裂いていく。

生裁剣を破壊したのも、これか！

「ごっつい鎧着てる割にはよく動くわね」

悠々とした口調で、ラーカッサは次の一手を思わせる構えを見せた。

「でも――アタシの前に立つにはトロ過ぎんのよ！」

一瞬だった。

回転する視界。地面に足が着いていない感覚――浮遊感。

気が付けば、彼女よりかなり体重があるはずの俺の体が、まるでピンボールのように弾け飛んでいた。

記憶の糸を辿れば……そう、俺は瞬時に近付いてきた彼女に、思い切り蹴り上げられたんだ。自分の身に何が起きたのか、脳が判断する暇もなかった。

まさに、圧倒的。ラーベマン――桜田でも歯が立たないこいつを相手にすることがいかに困難なことか、身を以って思い知らされた。
まだ力を蓄えていなかった時とはいえ、一度はこいつらを退けた桜田も凄いが、今のラーカッサの強さとスピードは――本物だ。

「ぐッ！」
だからといって引き下がるわけにも行かない！
俺は辛うじて受け身を取り、パワーにものを言わせたパンチを繰り出す。バッファルダには遠く及ばないものの、馬力の強さならセクレマンのパワーファイトに分があるはずだ！
「おっと、なかなか粋な戦い方するじゃん」
だが、俺の渾身のパンチは幾度となく空を殴るばかりで、ラーカッサには一向に届かない。どんなに強力なパンチを出せても、それをかわせるだけのスピードで避けられたら、意味がないのは明白だった。

「ほーら、パンチってのはこうやって打つのよ！」
反撃とばかりに、ラーカッサが俺の顔目掛けて拳を突き出してくる。だが、彼女の拳は指先や肘等とは違って刃物の類は一切付いていない。
こっちの攻撃が当たらないのは確かに致命的だが、向こうも俺と殴り合うには体重差が激し過ぎるはずだ。
どういうつもりか知らないが、これはチャンスだ。このパンチを凌いで隙を見付けて、畳み掛ければ――

「がふッ――！？」
突如、火薬が弾けるような衝撃を顎に感じ、それと共に俺の脳が前後に激しく揺さぶられた。
これは何の痛みなのか、そもそも何が起きたのか。それを考える

暇もなく、俺は夜空を見上げるように仰向けに倒れた。
受け身も取れず、思い切り瓦礫に後頭部を打ち付ける。生身だったらただじゃすまなかった。
「アタシの武装が刃だけって思っちゃったわけ？　はやとちりはよくないわよ」
「お前……拳に、弾薬を……！？」
「ご名答。アタシの拳にはパンチの反動を引き金に破裂する弾薬を仕込んである。所沢やアンタのような重さはないけど、当たると結構痛いでしょ？」
痛いなんて生易しいものじゃない。意識が数秒飛ぶレベルだ。
ラーカッサは得意げに笑うと、俺を見下すためか、瓦礫が積み重なり高い山になった場所へ跳び移った。

「さて、どうする？　アンタって元々部外者だったんでしょ？　前に桜田家の連中に『挨拶』しに行った時はいなかったし。別にアンタがどういういきさつでセクレマンやってるかなんて知らないし興味もないけど、泣いて謝るなら命くらい拾ってあげてもいいのよ？」
「ふざけんな……まだ始まってもいないんだよ！」
俺は瓦礫の壁に寄り掛かりながら立ち上がり、決して逃げまいと正面から彼女と向き合った。

――やっぱり、達城に頼るしかないみたいだ。
一応は切り札……というべき能力なんだろうが、それを「切り札」として扱えるかは俺次第なんだ。
だから、失敗は許されない。いや、俺自身が許さない。俺を信じてくれた、達城のためにも！

俺は腹を括り、バックルの校章に手を伸ばし、思い切りそこを掴んだ。
何かを仕掛けてくる。そう踏んだのか、向こうも警戒の動きを見

せる。舞帆が変身していた時では見られなかったであろう、本邦初の行動なんだから当たり前か。

校章の左側を掴み、右側に向かって回転させる。つまり、裏返した。

その瞬間、俺の全身を覆っていた重厚な鎧が、突如俺を拒絶するかのように離れ、バラバラに分解された。やがてその部品は一カ所に集まり、元のバイク形態――セイサイラーに戻った。

しかし、変身が解けたわけではない。普通、元に戻るには、過剰なダメージを受けてセクレマンの鎧が変身者の生命危機を感知して強制的に変身を解除するか、変身者自身が内側から脳波で操作して鎧を外すしかない。

俺が見せたのは、そのいずれにも該当しない行為。

そして、俺自身も見たことがない姿の「俺」が、そこに立っていた。

「……それ、いわゆる『とっておき』ってやつ？」

「そこは、俺次第ってとこだ」

破損した水道から漏れてきた水で出来ていた水溜まりが、俺の姿を映し出す。

かつての重装甲な鎧姿から一転、ラーベマンを思わせるボディスーツ姿になっていた。グラサンのようなバイザーと、スーツと同色のマスクが俺の素顔を隠す。マントがないことと色が違う点を除けば、ラーベマンとよく似ている。同じ桜田家が作ったヒーローだからか？

真っ白で薄地の戦闘服に、両腰には光線銃「セイトバスター」、

そして生裁剣とは違って俺の脚くらいのリーチである細身の剣「セイトサーベル」。
全て、設計図代わりに達城が用意してくれていたメモの通りだった。

今までのセクレマンの姿は、「戦闘形態（バトルスタイル）の一つ」にしか過ぎなかった。
それは本来「生裁重装（ヘビーメイルズ）」と呼ばれる重装備形態であり、今の俺を包んでいるこの戦闘服こそが、達城の切り札にして生裁重装に続く第二形態――「生裁軽装（ライトメイルズ）」というわけだ。

「身軽になってこれで対等、ってとこ？　上等じゃない！」
俺が生裁軽装になってからしばらく辺りを包み込んでいた静寂を、ラーカッサの刃が切り裂いた。

その時点で、俺は今の自分にどれほどの変化が起きたのかを見を以って知ることができた。
今まで慌てて飛びのかないとかわせなかった刃が――軽く地面を蹴るだけで簡単に避けられたのだ。

「なにッ！？」
今の俺に似た姿のラーベマンもかなりの俊敏さだったが、驚く彼女の反応を見る限り、生裁軽装がもたらしたスピードはそれ以上らしい。
俺はその恩恵に身を任せ、一気にセイトサーベルで切り掛かる。
自分の身長を越える巨大さ故に、力任せに振るうしかなかった生裁剣とは違い、この細身の剣は片手で振るだけでも相当な切れ味を発揮するらしい。
事実、生裁剣を破壊しかねないほどの威力を誇っていた刃で受け止められても、セイトサーベルはほとんど刃こぼれを起こさなかっ

た。

「ちいッ！　やるじゃない！」

さっきまでとは全く違う性能を目の当たりにして、さすがに対策を練る必要を感じたのか、彼女はその場から素早く飛びのいた。

だが、それこそが隙。そして俺のチャンス。

「貰った！」

俺は逃げ場のない空中に跳び上がる彼女を狙い、腰のホルスターから引き抜いたセイトバスターで狙い撃つ。

細く、鋭く伸びた赤い閃光が、刃を纏う紫紺の戦乙女を撃墜した。

「きゃあッ！」

短い悲鳴を上げて、ラーカッサが墜落した。この戦いで初めて、まともに攻撃が当たった瞬間だろう。

だが、決定打には残念ながら程遠いらしい。すぐにそこから跳ね起きると、容赦なく五本の指先にある人工の爪で切り掛かってきた。

生裁軽装ならではのセイトサーベルがなければ、それを受け止めることなど不可能だったに違いない。俺は片手の爪を全て剣で打ち払うと、もう片方の爪が来る前に彼女の腹を蹴り飛ばして間合いを取った。

「……やってくれるじゃない」

ドスの効いた低い声が、俺の気を引き締めさせる。向こうも余裕こいてはいられなくなったらしい。

「これ以上向かって来ようってんなら、今度はその綺麗な体が、光線で傷物になるぞ」

「言ってくれるじゃない。そこまでたきつけられちゃあ、アタシもマジになるしかないわね」

俺と似たようなことを口にしつつ、ラーカッサはゆらりと身を起こす。

「――今までは手抜きだったってか」
「本気だったわよ。『お遊び』の範疇ではね。ここから先は『殺し合い』の次元に入るけど、覚悟を問う必要なんてないわよね？」
「俺は『殺し』はしない。殺されることはあっても」

「……いい子ぶりはその辺に――しときなッ！」
空気が、変わった。
今のこの瞬間、俺が感じたことをそのまま言葉に形容するなら、それが一番相応しいだろう。今までのラーカッサとは、明らかに気迫が違う。
その威圧に一瞬、硬直したこと。それが命取りとなった。

「がッ――ああッ！？」
冷たい激痛と共に、白い戦闘服が瞬く間に赤く染まる。まるでラーベマンのように。
その傷口は、五つの線の形になっていた。
光線銃より速いスピードで間合いを詰めた彼女の爪が、俺の胸をザックリと裂いたのだ。
目にも留まらぬ速さで攻撃されたのはこれで二度目だが、受けた傷の重さと痛みは段違い。

――当たり前だ。向こうは本気になってる上に、こっちは鎧を外して身軽になっている。ダメージが増えるのは当然の結果だ。
達城も、この身体的なリスクを苦慮して、今まで俺にも教えなかったんじゃないか。なんでこんな簡単なこと、少しの間とはいえ忘れてたんだ！
俺は自分に腹を立てると共に、後ろを振り返った。桜田家を巻き込んでいないか、不安になったからだ。

そこには、家族三人で身を寄せ合う彼らの姿があった。みんな、見たことのないセクレマンの姿やラーカッサの本気を目の当たりにして、呆気に取られているようだった。
その中でも、特に舞帆は心配そうな表情でこちらを見詰めている。
――なにをやってんだ、船越路郎！
舞帆を守るって、もう何度決めたと思ってる！　さっさと立て、立って戦え！

俺は自分自身に無茶苦茶に喝を入れて、セイトサーベルを杖に立ち上がる。
「さて、とっておきの本領はまだ？　それとも――もうネタ切れ？」
「だな。……だから使いまわしだッ！」
ホルスターからの早撃ちで、俺はセイトバスターを撃つ。
深紅の光線がラーカッサの胸に真っ直ぐ飛んでいく。

だが、彼女はその射速さえ凌駕していた。
一瞬だけ照準から姿を消したかと思うと、次の瞬間には俺の目の前で不敵に笑っていたのだ。
「そのネタ、もう古いんだよ！」
鋭い回し蹴りが俺の脇腹をえぐり、更に鮮血が辺りに飛び散る。
俺が流血してうめき声を上げる度、後ろの方から悲鳴が聞こえた。
「ああ、そうだ。アンタ、確か所沢に背中を刺されてたわよね」
「――！」

たったその一言が、俺を凍り付かせた。
これからどんな攻撃をされるのか。
それを想像して総毛立った頃には、彼女は既に俺の背後を取っていた。

「ダメよ、怪我人が暴れちゃあ」

皮肉と共に、ラーカッサの拳に内装された弾薬が破裂した。俺の傷を、根掘り葉掘りえぐり尽くすように。

「……か……ッ……！」

悲鳴は、聞こえなかった。

うっすらと見えた舞帆の表情を見れば、その訳は窺い知れる。

――余りの惨劇に、声も出ない、ってか。

俺は崩れるように倒れ伏し、そこから動かなくなった。

いや――動けないんだ。動けるはずが、ない。

考えてみればわかることだ。

元々、セクレマンに変身して戦うこと自体、倫理上「不可能」とされるほどの負担を伴っていた。変身しているだけで、油断していると「もう辞めたい」という弱い心が脳波となって働き、変身が解かれてしまうことだってある。

加えて、今の俺は昼のバッファルダとの戦いで背中を破片でブッ刺され、ただいま絶賛入院中の身だ。その傷を押して、俺は痛みを少しでも遮るために着てきたレザージャケットも舞帆に渡し、セクレマンの生裁重装に変身した。

そして生裁軽装になったことで変身自体の負荷は薄れたものの、今度はダメージを受けやすくなり、何度も斬られたあげく、背中の傷を弾薬で吹っ飛ばされた。

――普通の人間が、ここまでズタズタにされて立っていられる方がおかしい。そして、その「普通の人間」の例には、俺は漏れては

いないだろう。
……だが、俺はそれでも立たなければならなかった。それが「普通」じゃないなら、「普通」でなくなればいい。
――舞帆を救えるなら、俺は人間じゃなくたっていい！
俺は血ヘドを吐き、ラーカッサを睨み上げる。立ち上がろうとする膝はガタガタと奮え、血液不足を訴えていた。
彼女にさえ勝てば、後はどうだっていい。
俺は舞帆を守るためだけに、セクレマンになったんだから！
血まみれになり、もはや意識があることすら不思議に思えるような重体。そんな状態でも必死こいて起き上がろうとする俺を見下ろし、ラーカッサ……いや、狩谷鋭美は、マスクを外して素顔を見せると共に、怪訝な表情になる。
鋭い吊り目が特徴の、意志が強そうな印象の少女だった。綺麗に整った目鼻立ちに、今までのイメージと対を成すような美肌。そんな絶世の美女は今、訝しむように俺を見ている。
「アンタ……一体何なの？　何の縁があってそこまで桜田家の味方をするわけ？」
「俺は、舞帆に助けられた……あの娘が助けてくれたから、決めたんだ……！　今度は俺が助けるんだっ……て！」
縋るように、俺は狩谷に訴える。
多くを語る気も余力もないが、そこから何かを察したように、彼女は目を見開いた。
「……ふーん、そうなんだ。アンタ、桜田に借りがあるのね」
それだけ言うと、狩谷は一度俺から目を離すと、憎々しい面持ちで桜田家を睨みつけた。

――彼女は反対に、桜田家には恨みがあるらしいな。

「いいわ。アタシにここまで食い下がってきた根性に免じて、教えてあげる。アンタが命懸けで守ろうとしてるあいつらが、どれだけ腐ってるかをね……」

「……なに？」

俺が顔を上げると、狩谷は背を向けて、今までの気性の激しさとは対照的な静けさで、自らの過去を語る。俺が病院で、舞帆と平中にひかりのことを話したように。

「アタシは小さい頃、両親に捨てられて孤児院に入った。周りは家族が事故や病気で亡くなったから仕方なくってのがほとんどだったけど、アタシは親に見捨てられてそこにいた。だから、何かといじめられたわ。『お前が悪い子だったから、捨てられたんだろ』ってな」

「――そんなことがあったのか」

「そんな時、いつだってアタシを守ってくれる娘がいた。その娘は周りがどんなにアタシをバカにしても、傍にいてくれた。――アタシなんかのために、友達になってくれたんだよ」

孤児院……俺はひかりのことを思い出し、胸を痛めた。

「アタシは、どうしてもその娘を守りたかった。大切な友達を。だから、三年前にその娘が望まない子供を妊娠して、それでも好きな人のために産みたいって言った時、アタシは決めたんだ。ヒーローライセンスを取って、この孤児院の専属ヒーローになる！　そして、あの娘も、あの娘が産んだ子も、アタシが守り抜くんだって！」

「……！？」

――ま、待て！　既視感がある！

望まない子供！？　それでも産みたい……！？

まさか……！？

驚く俺を完全放置して、彼女は話を続ける。
「アタシは、ヒーローライセンスの試験に臨んだわ。試験には、あのハト野郎と所沢が同席していた。アタシは必死だったわ。あの娘を守るため、絶対に受からなきゃってさ」
ハト野郎――ラーベマンこと桜田のことか。
「……それで、落ちたのか？」
「――落とされたのよッ！」

俺の発言に激昂し、狩谷は鬼のような形相で、俯せに倒れていた俺の顔を近くを踏み付けた。
「最後の試験だったわ。身体能力を問うために、崖から崖まで繋がった懸け橋を、橋自体が崩れ落ちる前に渡り切る、っていう内容だった」
「はあっ！？　そんな無茶苦茶な試験、聞いたことないぞ！」
俺もFランクの試験を受けたが、そんな危険過ぎる試験概要は聞いたことがない。
「そうよね、アタシもそう思ったわ。あの時点で気付くべきだったのよ。あの試験が、『出来レース』だったってことに」
「出来レース？」

「その最終試験に残ったのは、アタシとハト野郎と所沢の三人。アタシも所沢も、あのハト野郎よりは速く走れたわ。――向こう側の崖から橋が壊されるまではね！」
「――ッ！？」
「アタシと所沢は転落して、結局は本来通りのペースで崩れる橋を渡りきったハト野郎が一人だけ合格、となったわ。アタシは落ちる途中で木の枝に引っ掛かって奇跡的に助かったけど、所沢は命に関わる重傷を負った。それで二年間の療養を余儀なくされたのよ」

――な、なんなんだ、それ……！

想像することが恐ろしくなるほどの、悲劇。狩谷の話が本当なら、ヒーローライセンスの資格試験で命に関わる不正が行われていたことになる。

確かにヒーローは自ら危険に飛び込んでいくもの。命の危険を乗り越える力は必要だろうが、試験の厳しさを差し引いても、このやり口は余りにも残酷過ぎる。試験にかこつけて殺そうとしてるようなものじゃないのか。

「アタシはもちろん猛抗議したわ。アタシのように、ヒーローを目指して頑張っていた所沢のためにも。でも、協会側は全く取り合おうとしなかった」

「……マジなのか、それ」

「そして出てきたのが、当時試験官だった、あの桜田寛毅ってわけ。あいつは試験のやり直しと所沢の治療を訴えるアタシにこう言ったのよ」

狩谷は憎しみで歪んだ顔で俺をまっすぐ見据え、怒りを一切隠さずに吐き捨てる。

「『桜田家の嫡子である寛矢が、試験に一度で合格するのは必然でなければならない。どこの馬の骨とも知れない小娘や薄汚い大男がヒーローを騙るなど、言語道断だ』……ってね。あいつはその後、『頑張りを讃えての特別措置』とか言って所沢をヒーロー協会管轄下の病院に入れて、善人ぶりを世間にアピールしたのよ。実際に所沢が受けた治療はヤブ医者がやるような荒療治だった」

「……そんな」

そういえば、弐郎に捕まった舞帆を助けに行った時に、協会管轄の病院で包帯だらけの大男を見たことがあった。あいつが所沢だったのか……？

「アタシは協会の生態科学部門に潜入して、バッファルダとラーカッサの能力を手に入れたわ。この世の、真の悪を討つためにね。ア

タシの能力は、『自信』の強さに比例する。絶対にアタシが正しいんだという自信に！」

△

「そうよ、アタシ達はヒーローになるチャンスを当たり前のように潰され、その上道化にされた！　あんな奴らがいる限り、ヒーローは死んだまま！　だから倒すのよ、そんな連中が統べているこの宋響学園と、その根元である桜田家をね！」

怒りの矛先を、桜田家の三人に向け、狩谷は高らかに叫ぶ。

俺は事件の発端とされる校長に、真偽を問う視線を送った。それは、初耳の話だったためか桜田も同じだった。

「どういうことなの！？　お父さん、本当なの！？」

「父さん、説明して下さい！　僕はちゃんと試験をクリアしてヒーローになれた訳ではなかったのですか！？」

舞帆と桜田は、取り乱した様子で二人して父に詰め寄る。彼はそんな息子や娘の肩を持つと、言い聞かせるように口を開いた。

「……いいか、舞帆、寛矢。よく聞くんだ。私達桜田家は、常に周囲をリードする人材を輩出してきた。これまでも、そしてこれからもだ。その歴史を止めてはならない。あの女はその歴史の重みを知らないから、あのような不届きな雑言を口にできるのだ」

世間に嘘はつけても、家族だけは騙せない――そう悟ったのか、校長は開き直ったように言い捨てる。

「あの女は敵だ。敵の惑わしに耳を傾けてはいかん」

「な、なんてことを……あんまりよ、お父さん！」

「そんな……そんなことのために、僕は……！　これじゃあ、道化は僕の方じゃないか！」

二人は自分達が信じていた正義の道が偽りのものと感じ、表情に

絶望の色をたたえた。
バッファルダとの二戦目の時に桜田がやった、俺に刺さっていた破片を無理矢理抜いて、血を目潰しに使うという戦い方。あれもあの校長が治める桜田家の教えだとするなら、納得してしまいそうになる。

「ふーん、何にも知らなかったんだ、可哀相ね」
二人の少年少女の反応を見た狩谷は、哀れみと蔑みを混ぜた目で彼らを一瞥した。
その瞳の最奥にある殺気を本能で察知した瞬間、俺の体が痛みを忘れて動き出した！

「まあ、恨むなら由緒正しい自分の家に泥を塗ったそのクソ親父を恨みなさいよ。――地獄でねッ！」
自分を地獄に突き落とした連中への天誅とばかりに、狩谷は肘の刃を放とうと腕を振るう。
その瞬間、俺は全身の力と体重を前に傾けるように立ち上がり、セイトサーベルでその一閃を受け止めた。凄まじい金属音が鳴り響き、俺の耳を激しくつんざく。

「何のつもり？　あそこまで話を聞いておいて、まだ桜田家に義理立てしようっていうの！？　それとも、アタシの話なんて信じないって？」
「……いや、信じてるさ。校長先生の反応を見ればわかる。あんたは、嘘なんかついてない」
あれだけの怒りを、でっちあげだけで生み出せるものか。
それに校長も、結局は否定しなかった。
この事件は、起こるべくして起こったものなんだと、俺は認識していた。
「それでもアンタはあっちに付こうってわけ？　そうよね、アンタ

からすれば、ここでアタシを潰せれば、桜田家に取り入るチャンスだもんね！　権力にでも目が眩んだのね！」

「あんたは確かに怒って当たり前だと思う。俺だって、そんなことをされたらどうしようもなくなるくらい怒るさ。でも、このままあんたを行かせちまったら、きっとあんたは引き返せなくなる！　そんなの、見ていられない！」

「黙れ、アンタがアタシ達の何を知ってるってのよ！」

狩谷は怒号を上げ、俺の腹を膝の刃で勢いよく突き刺した。冷たい痛みが、赤い花のような染みと共に全身に広がっていく。

今まで抱えていたものが溢れ出して来たように、彼女の表情は悲しみや怒りをないまぜにした、『感情』そのものが現れていた。

「ぐうッ……し、知らない、何も知らない！　知らないから、知りたいんだよ！　知るまで、ほっとけないんだよ！」

「うるさい、うるさいうるさい！」

俺を弾薬入りパンチで吹っ飛ばし、狩谷はこちらを睨みつける。自分でも、今の自分が正しいと言い切れない――そんな苦悶の表情で。

「アタシは約束を守れなかった！　なれなかったのよ、なれるはずだったヒーローに！　あの娘に、ひかりに、合わせる顔がないじゃない！　どうしてくれるの！　責任取ってよ！」

――やっぱり、狩谷もひかりと同じ孤児院にいたのか。

いじめられていた彼女の友達になってあげてたんだな……やっぱり、ひかりは優しい。

ひかり、見てろよ。今度こそ、今度こそ救って見せる。舞帆も、お前も、お前が守った友達も。

「アンタ、一体何なのよ！　知った風な顔してんじゃないわよ！」
さっきまでと違い、身の上を訴えたことがきっかけで感情的になったからか、彼女の攻撃は以前までの正確や鋭さを欠き、直線的なものになっていた。
恐らくこれが、彼女を止める最初で最後のチャンスになるだろう。
狩谷のヒーローへの想いの強さが、俺に勝機を与えてくれる。
「俺が何なのか――か。そういえば、名乗りがまだだったな」

ふと思い出した、セクレマンの名乗り。

俺はそれを胸に、一旦間合いを取った。向こうはまた何か新しい武器でも使ってくるんじゃないかと警戒しているようだ。

俺はそこで、今日に至る今までを一度、振り返った。

――二年前のあの日から、俺は舞帆に救われた恩を忘れたことはなかった。
初めて会った頃は俺の方が強気でいたのに、いつの間にか立場が逆転していたのは記憶に新しい。
それでも、俺はきっと幸せだったはずだ。そうでないなら今……こんなに嬉しい気持ちは湧いて来ない。
ずっと抱えていた負債を、一気に解消する最大のチャンス。それが、この戦いだ。
俺は舞帆がたどるはずだった戦いに身を投じるためだけに、ヒーローになった。勝ち目のない戦いに彼女を晒さない、唯一の手段だったからだ。

だから彼女のヒーローとして、最後の名乗りを、俺は上げたい。
それが少しでも舞帆の支えになるとしたら、それはきっと意味のあることになるから。

思えば、俺はここに至るまでに多くの人から助けてもらっていた。

母さんは、俺がどんなに荒んで、忘れてもらおうとしても、決して見捨てずにいてくれた。俺に代わって、ひかりを支えてくれた。

平中は、俺達とは本来関係ないはずの、普通の女の子だったのに、俺との縁だけでここまで連れて来てくれた。

ひかりは、俺のせいで死にたくなるような思いをしたはずなのに、それでも俺を憎むことなく、「絶望」しかなかったはずの未来を瑳歩郎という「希望」に塗り変えて、俺に勇気をくれた。

達城は、俺が無理にヒーローになると決めても、決して跳ね退けることなく、チャンスを与えてくれた。今思えばそれは俺に舞帆の代役が務まるかどうかを試す意図があったんだろうが、それでも最後には本当に俺を信じて、この力をくれた。

そして……舞帆は、ひかりのことでやさぐれていた俺を救い上げるために、ひたすら手を尽くしてくれた。俺が幸せを掴むこと――元の、当たり前の暮らしを取り戻すことを、望んでくれた。

みんな、俺を支えてくれた。俺を信じて、頼りにして、助けになってくれていたんだ。それは、舞帆も同じだったのかも知れない。

俺がセクレマンをやっていたと知った時、誰よりも反対していた彼女は今、ただ家族と共に固唾を飲んで見守っている。

止めようとはしていない。もしそれが、俺を信じてくれている証なら、俺を頼ってくれている意味なら。

――舞帆に頼られた今、俺は誰よりもヒーローだ！

「生徒の手により裁くべきは、世に蔓延る無限の悪意！」

腕を派手に振り、俺は腰を低くして、身構えるようにポーズを決める。
生裁重装の時ではできなかった、本来あるべき姿の、名乗りのポーズ。
舞帆のヒーローとして戦い、勝つことを約束する構えだ。
俺は掌を狩谷に向け、これから成敗してやるといわんばかりの威勢で声を張り上げる。みんなの支えから成り立つ、俺の力で。

「生裁戦士、セクレマン！」

俺の声の振動が、威圧となって狩谷を襲う。
自分が掴もうとして手を伸ばし、どうしても届かなかった、「大切な人に支えられ、その人を支えるために生まれるヒーロー」としての姿。それは、彼女にとっては憧れ、そして自らの理想とする勇姿だったはずだ（俺個人が彼女の「憧れ」になるにはどうしようもなく役不足だが）。
そのヒーローが、真っ向から自分に牙を剥いているのだと実感すれば、たじろがずにはいられない。ただ強い相手というだけならまだしも、相手は自分が理想としていた、「ヒーローになる未来」だからだ。自分の拠り所とする理想像に自身を否定されて、それでも自分を保てるほど、人の心は丈夫に出来てはいない。
そして、「友達を支えるヒーローになりたい理想」と、「友達のためにヒーローになった野郎に立ち向かわれる現実」のギャップを見せ付けられた彼女が見せた隙を、俺は逃さない。
彼女の強さは、自信に比例する。名乗りによってそれを崩された今がチャンスだ！

「はあッ！」

気合いと共に彼女に飛び掛かり、セイトサーベルの一閃。
「あうッ！」
狩谷は直撃の一歩手前でそれを受け止めたが、防御に使った肘の刃はバキリとへし折れた。
「でぇぇあああッ！」
反撃に成功したと一瞬安堵したせいか、今まで積み重なっていた体の痛みが振り返してくる。
それを堪えるように、俺は体の芯から気力を搾り出すように叫び、細身の剣で狩谷の持つ刃を次々を打ち砕く。
無理をすればどうなるか。今まではそれを考えないようにして戦ってきた。考えると、怖くなるから。
だが、今はもう「無理をする」という概念すらなくなってしまっていた。狩谷に勝ち、舞帆を守る。それだけしか頭に残ってはいなかったから。

「くっ……そおお！　アンタが――アンタ達さえいなければあっ！」
激しい咆哮と共に、狩谷は指先に嵌められていた刃を放つ。しかし、それは俺とは全く違う場所を狙っていた。

「まずいッ！」
俺はセイトサーベルを捨て、一気に舞帆達三人に向かって駆けていく。狩谷が放つ得物は、三人の後ろにそびえ立つ校舎を破壊していたからだ！
校舎が破壊されたのはほんの一部だが、元々他の学校よりでかい造りというだけあって、いざ壊されると瓦礫も大きい。桜田家の三人に直撃すれば圧殺は必至だろうが、下手をすれば遺体もろくに残らないかも知れない。
「きゃあああッ！」
舞帆の悲鳴が聴覚を刺激し、俺を動揺させようとする。しかし、焦る必要はない。

「無理をする」概念をなくせば、無理を無理と思わなくなるのだから。

「――待ってろよッ！」

裏返っていたバックルの校章を元に戻すと、セイサイラーがひとりでに変形を開始し、生裁重装の鎧となって俺を包む。鎧は既にボロボロだが、それでも俺の支えになってくれている。

生裁重装を含めたセクレマンの変身システムには、変身者の生命危機を感知すると、降伏の意味を持って変身を強制解除する機能がある。変身者の人命の保護を最優先するためだ。

だが、それには欠陥が一つある。それは、変身者が代わると、強制解除をするか否かの判定基準となるダメージ計算が、リセットされてしまうということだ。

それは、変身者を舞帆に限定されていたセクレマンに俺が変身していたことによる、単なるバグに過ぎない。しかし、ダメージ計算がリセットされるということは、舞帆が負った分の損傷が計算から外されること意味する。

つまり、実際の鎧自体のダメージはそのままに、計算上のそれだけがリセットされている俺からすれば、この人命優先のシステムは今、全く当てにならなくなっているのだ。例え、俺が今からこのヒビだらけの生裁重装の鎧を木っ端微塵にされた上で、生裁軽装になったところを刃物で細切れにされることがあっても、システムが俺のダメージが舞帆のそれを越えたものと認識しなければ、変身は解除されない。達城によればバッファルダとの二戦目でも、あの背中への一刺しでシステム全体がショートしていなければ、とっくに強制解除されていたはずだったらしい。計算が振り出しになっている俺には、舞帆のような「恩恵」は受けられない、というわけだ。

そう、例え死んでも。

俺は三人を庇うように彼らの傍に立つと、持てる力の全てを両足に込めて、大地を蹴る。
「船越君！？　――船越君ッ！」
驚いたように舞帆が声を上げる。なにをするつもりかを察して、止めようする声色だ。だが、飛び立ってしまった今ではもはや無意味。
「らあああああッ！」
目の前に迫る瓦礫は近付くにつれてみるみる大きくなっていき、気が付けば想像を遥かに越える巨大な隕石のようにも見えてきた。
いつもなら、こんな馬鹿でかい破片とぶつかったら死ぬに決まってる、と思って回避するところだ。だが、今回だけは逃げるわけにはいかないし、逃げる気もない。
今なら、できる。そう思うしか道はないからだ。
そして、強固な鎧に身を固めた、セクレマンという名の迎撃ミサイルが、校舎の瓦礫という名の隕石を打ち砕く。
体のどの部分から瓦礫にぶつかったのかは、俺自身にもよくわからなかった。そのくらい一瞬の出来事だったからだ。
ただわかっていることは、粉々に飛び散る破片と一緒に空中に投げ出されている景色が見えていること。つまり、まだ俺は生きている。
生裁重装の重厚な鎧は、表面から内側まで、あらゆる箇所がひび割れ、今にも崩れ落ちそうなほどの損害が現れていた。元々舞帆が変身していた時にコテンパンにされていたこともあるだろうが、今の激突で原形を保っていられるのは奇跡としか言いようがない。今度この状態で狩谷と対峙すれば、間違いなくこの巨大なプロテクターは粉々に破壊されてしまうだろう。

「船越君ッ！　死なないで、お願いだから！」
滞空している俺を見上げ、舞帆が涙ながらに叫び散らす。
――大丈夫だ、舞帆。これ以上、不安になんかさせない！　次の一撃で決めて見せるから！
俺は再びバックルに手を伸ばし、校章を反転する。空中で生裁軽装に変身すると同時に、俺は生裁重装の鎧から変形したセイサイラーに乗り込んだ。
そして着地する瞬間にアクセルを踏み込み、一気にスピードを爆発させる。

「おおおおおッ！」
雄叫びだけで自身を鼓舞し、俺は狩谷目掛けて突っ込んでいく。
「……ナメるなぁ！　アタシは――アタシは、ヒーローになるんだあああああッ！」

狩谷も必死に残された刃をぎらつかせ、俺を迎え撃たんとする。
正直言って、もう体はほとんど動かない、さすがにそろそろ限界を超えすぎたらしい。
だから、これが最後の攻撃になる。失敗すれば、俺の命もないだろう。
だが、できないとは思わない。舞帆やみんなが、俺を信じて頼ってくれるなら。俺に、そこまでの価値があるとするならば！
「俺がヒーローだってんなら！　……負けっこないだろうがあああああああッ！」
俺は腕に残る力を振り絞り、忍ばせていたセイトバスターを撃つ。

その一発が、狩谷の最後の得物を破壊した。
「あ――！」
――もう、力は微塵も残っていない。後は、野となれ山となれ、だ。
そのヒーローらしからぬ不意打ちに狩谷が呆気に取られた瞬間、俺を乗せたセイサイラーが狩谷と激突し、砕け散った。
「ぐわあああああッ！」
「きゃあああああッ！」
俺は衝突の勢いで吹っ飛んで瓦礫の山に頭から突っ込み、狩谷は撥ねられた衝撃で校舎に背中を打ち付け、動かなくなった。
まさに、一瞬の決着。俺にとっても、きっと彼女にとっても。
――俺は、ヒーローに必要なのは、例え無謀だとしても、卑怯者と泥を被ってでも、大切な誰かを守れる、ヒーローとしての「資質」だと思ってる。
だから、こんな無茶苦茶でヒーローの夢を壊すような戦い方を選んだのかもしれない。
そんな自覚はあっても、不思議と後悔の念はまったくなかった。結果として、舞帆達を守れたからだろうか？
ふと、瓦礫を除けて倒れていた身を起こしてみれば、変身は既に解け、俺は元の船越路郎の姿に戻っていた。セクレマンの変身システムが、変身者の生命危機を感知したためだろう。今さらな気もするが。
△

「狩谷っ……うッ！」
同じく変身が解除されていた狩谷。彼女の安否を確かめようと身を起こした俺を、積み重ねられた激痛が襲う。
俺はとうとうそれに打ち負かされ、瓦礫の山からゴロゴロと転げ落ちると、今度こそ全く身動きが取れなくなってしまった。

「うっ……うう」
「狩谷、生きてるか。よかった」
「あんな殺す気満々な攻撃仕掛けといて、よく言うよ、まったく――いてて！」
どうやら、反応を見る限りでは命に別状はないらしい。俺はつっけんどんでありながら、敵意を感じさせない彼女の態度に苦笑しつつも、ホッと胸を撫で下ろす。
よく見れば、狩谷の体には外傷はほとんどないようだった。俺が与えたダメージの多くは、ラーカッサの戦闘服が吸収していたらしい。ただ、衝撃の余韻か疲労のためか、彼女も俺と同じでろくに動けないみたいだ。
「負けたよ。アタシはやっぱり、ヒーローの器じゃなかったんだ」
「そうだな、今はそうだ。だったら今からはい上がりゃあいい。まだヒーローを諦めたくないならな」
もし本当に「ヒーローになる」という未来に愛想を尽かしてるなら、わざわざヒーロー能力を手に入れようとはしまい。能力を悪事に使おうというアンチテーゼだとすれば、それだけヒーローに未練があるとも言えるはずだ。
「はい上がる……か。厳しいこと言うわね、アンタ」
「厳しくもなるさ。未練を夢に、変えるとするなら」
未練を、夢に変えられれば――彼女がもう一度チャンスを得られたなら、彼女が悪である必要もなくなるんじゃないか。
そんな考えが脳裏を過ぎった時だった。

「間違えるな、船越路郎。悪は悪、正義にはなれん！」
厳格な口調で、憎悪で凝り固まった言葉を吐き出す者がいた。――桜田寛毅だ。
「校長先生、どういうつもりだよ」
「ご苦労だったな。まさかセクレマンにあんな機能が搭載されていたとは思いもよらなかった。やはり朝香は舞帆より貴様を選んだのだな。愚かなことを……舞帆に任せておけば、我が桜田家の優秀さが実証され、我が家を去る必要もなかったろうに」
「あんたが娘を無理矢理戦いに引っ張り出そうとしなけりゃあ、円満な家庭を築けたろうにな。……そして、まともに試験をやろうとしてれば、こんな戦いも起きなかったはずだ！」
「一人前なのが力だけなのでは、単なる暴力と違わぬことを覚えておけ。いいか、貴様は桜田家がどれほど優れた家系であり、それを引き継いできたのかを知らんだろう。だからそんな腑抜けた口が利けるのだ」
どうやら桜田家ってのは、代々続く優秀さを継いでいかなくちゃいけない、窮屈な家庭らしいな。彼にとってはそれは絶対であり、そのためには人を殺しかねないほどの不正もアリにしちまう。――ふざけてんのかよ。いや、大まじめにそれをやってのけてる辺り、ふざけてるよりよほどタチが悪い。

「この女は私達の邪魔をした挙げ句、あろうことか舞帆を辱めた。どうやらこの女豹は、私が直々に討たねばならんらしい」
そう吐き捨てると共に、校長の懐から――拳銃が現れた。
「……！」
「校長ッ！　あんた、マジなのかよ！」
一瞬怯えたように身を強張らせ、すぐに諦めの顔になった狩谷を一瞥し、俺は校長に食ってかかる。しかし、まったく聞く耳を持つ様子はない。

――ち、ちくしょう！　狩谷を殺して、それで解決なわけがないだろう！　俺はバッドエンドってのが大嫌いなんだ！
そんな、そんなの、望んでるのはあんただけだろうが！　桜田は、舞帆はどうなるんだよ！

今までの戦いの疲労、痛み、そして狩谷に勝ったことによる束の間の安心からくる脱力感のせいで、俺は動くどころか、叫ぶことすら思うようにいかなくなっていた。
校長は狙いを狩谷の眉間に定め、引き金に指を掛ける。狩谷は抵抗もせず、ありのままの結果を受け入れようとしていた。
「か、狩谷！」
「……アンタ、船越路郎って言うんだっけ？　覚えとくよ。アンタの名前」
「はぁ！？　今の状況わかってんのかよ！　俺のことなんてどうだっていいだろ！」
俺に構わず、早く逃げろ。
本当はそう言いたかったが、俺にそんな資格はなかった。彼女を逃げられなくしてしまったのは、俺だからだ。
こんなことになるなら、狩谷が逃げる体力を残せるくらいまでセイサイラーのスピードを落としておくんだったと、今頃になって俺は後悔する。

どうすればいいかわからず、右往左往していた俺に向かって、彼女はフッと笑う。
嗜虐的でない狩谷の笑顔を見たのは、それが初めてだった。
「もっかいヒーローになれ――アタシの醜いところばっかり見たくせに、そんなこと言う奴がいるなんて、考えたこともなかったわよ。ありがとね……夢、見させてくれて」
「なに言ってんだ、そんな遺言染みたこと聞きたくないぞ！」

「……まったく。……どうせ殺されるんなら、アンタの手で――」

カチャリ。

そこで、校長の指が引き金を引こうと動き始めた。

「お喋りは終わりだ、庶民ども」

ハッとする暇もなく、冷たい一言と共に、拳銃が火を噴いた。

乾いた銃声。凍り付いた世界。

そこから続く未来にある惨劇を恐れ、俺は目を閉じた。

悪い夢なら覚めてほしい。できることなら、もう一度狩谷と戦うことになってでも、やり直したい。切実にそう思った時だった。

「――！？」

だが、誰ひとりとして命を落とした者はいなかった。確かに、発砲音は聞こえたのに。

悲劇を予想して閉じていた瞼を開くと、そこには発砲の瞬間、拳銃をたたき落とす桜田の姿があったのだ。

予想外の展開に、俺も狩谷も目を見張った。

「寛矢……なんのつもりだ！」

予想だにしなかった息子の反逆に、校長は激昂する。しかし、桜田には微塵の気後れもない。

逆に、父親を越える体躯を活かし、最大限の力で悪事をさせじと威圧する。

「『ヒーロー』として、当然の行いですよ、父さん」

「何だと！？」

「僕は今まで、父さんの教えを信じて、ヒーローとはこうあるべきだという思いで、学業を積み重ねてきました。でもそれは、僕の望

んだヒーローなんかじゃない！　不当に他人を蹴落として掴んでいたライセンスを振りかざして、船越さんの前で得意になっていた僕が、今はなにより許せないんです！」
「寛矢！　朝香や舞帆に留まらず、お前までもが逆らうというのか！」
「それが、『ラーベマン』ですッ！」

一切の反論を許さない、誠意を以って放たれた一言。
それは自身が理想とする、悪を正す一人の「ヒーロー」として、「ラーベマン」こと桜田寛矢が成すべき「ヒーローとしての活躍」そのものであった。

「お父さん、私もよ。私は、そんなことをする桜田家が優秀だなんて思わない。私は、船越君のような人が、なによりも大切なものを持っているって思うの。それは、お父さんには決してないものだから。――だから私は、船越君を選びます」
次に現れた舞帆も、父の悪事を容赦なく糾弾する。俺にあって、校長にないもの――それがなにかは、俺にもよくわからなかったが、少なくとも俺を肯定してくれているのは間違いない……と、思う。そこはありがたく受け取っておこう。

「狩谷……うぐッ！」
校長が桜田姉弟にやり込められているのをしばらく見守っていた俺は、転がり落ちてから少し安静にしていたためか、少しだけ動けるようになっていた。もちろん傷はまだまだ深いが、今までに比べればまだマシだ。
俺は狩谷の所まで身を引きずり、彼女の傍で膝をついた。
「な、なに？」

「お前……まだ、ヒーローになりたいか？」
もし彼女が、ヒーローになる夢を捨てきれていないなら、俺にもなにかできることがあるかもしれない。
そう思っていた俺は、彼女に最後の確認を取った。挫折し、苦しんで、荒んでいるようで、心のどこかで救いを求めているような……そんな、どことなく俺に似たなにかを感じさせる彼女に、手を差し延べるように。――かつて、舞帆が俺にそうしたように。

「……なりたいわよ。なれるもんなら、なりたい。なりたいよ」

そこに、会った頃のような彼女――ラーカッサの姿はなかった。
俺の目の前にいるのは、自分の罪深さを自覚して啜り泣く、狩谷鋭美という一人の少女でしかなかった。
出会ってからほんの数十分しか経ってないはずの彼女が、こんな顔を見せた。そのくらい、この少女が抱えていた闇は重く、彼女自身も無理をしていたんだろう。
少し内心に入り込まれるだけで、ここまで心の障壁が脆く崩れてしまうのだから。

俺はそんな彼女の涙を指先で拭い、一枚のカードを差し出した。
それを目にした狩谷は、「これをどうするつもりなのか」と不思議そうな顔をする。
「俺のヒーローライセンスだ。罪を償ってまたいつかヒーローになったら、返しに来いよ」
「えええーっ！？　ちょ、ちょっとアンタ、どういうことよそれっ！？」
予想以上の驚きっぷりに俺は目を丸くしたが、彼女の反応はそれ以上だった。
まあ、自分が喉から手が出るほど欲しがっていたものが、他人からあっさり渡されたことが衝撃的だったんだろう。

「俺は元々、舞帆を守るため――だから、お前らを止めるためだけにライセンスを取ったんだ。だから戦いが終わった今、ヒーローを続ける必要もなくなった……って、思ってたんだけどな」
「じゃ、じゃあなんでわざわざアタシに……？　アタシは敵よ！？　敵にライセンス渡してどうすんのよ！」
「もう違うだろうが。俺はさ、お前見てると、なんか昔を思い出すんだよ」
「え？」

意外そうな顔をする狩谷に苦笑いすると、俺は口角を上げて自分の恥ずかしい昔話をした。
「俺さ、昔は女の子のことでひどく荒んでて、母さんに迷惑かけたりケンカしたりで、もう最低のクズ野郎だったんだよ。でも、そんな俺の世話をかいがいしく焼いてくれる娘がいてな。その娘のおかげで、俺はちょっとは元通りになれたんだ」
俺はそこで一旦言葉を切り、父親を叱りまくる舞帆に目を向ける。名前こそ出さなかったが、その世話焼きの娘が舞帆のことだというのは、狩谷も薄々察したようだった。
「こう言っちゃ悪いけどさ。お前のそういうグレたところ見てると、なんか昔の俺に似てるなあって思うんだよ。だから、俺の世話を焼いてくれた娘みたいに、お前のこと、ほっとけなくなっちまうんだ。俺、その娘のファンだからさ」
彼女は、「自分の醜いところを見ているのに、励ますのが変」だと言ったが、それは違う。
その「醜いところ」ってのが、俺のそれとどこか似ていたから、共感して、支えたくなったんだ。そして、救いたくなった。
「……それとアタシにライセンス預けるのと、何の関係があるのよ？」
「お前、ヒーローになったら自分が育った孤児院の専属になるんだ

ろ？　俺もそんなところでヒーローやりたいって思ってたからさ。二人で一緒に、孤児院専属のヒーローコンビってやつになってみないか？」
俺の提案に、狩谷はさらに驚嘆の声を上げる。どういうわけか、その顔はほんのりと赤みを帯びている。
「ヒ、ヒ、ヒーローコンビ！？　アンタとアタシで！？」
「おう。ほら、有名どころでもあるじゃないか。アンカイザーとヴァンガードナーのAランクヒーローコンビとかさ！　俺達、挫折からはい上がったヒーローコンビで、孤児院の子供達に勇気を与える！　かっこよくないか！？」
「綜合警備アンカ株式会社」と「都市警備シティ・ヴァンガード」の専属ヒーロー二人組を例に挙げ、嬉々として語る俺に呼応するように、狩谷は蕩けたような表情になって、俺が渡したライセンスを胸でキュッと抱きしめる。くそ、ちょっとライセンス、俺と代われ。

しばらくは夢心地で俺の話を聞いていた狩谷だったが、ハッとするといきなり俺の胸倉につかみ掛かってきた。
「約束だからね！　嘘ついたらハリセンボン！」
……言うことまで昔の俺にそっくりじゃないか。
俺は苦笑混じりに「おう！」と力強く返事し、彼女も流されるように笑顔になった。

ひかりを育てた、加室孤児院。狩谷もそこで育ち、そこのヒーローになろうとしていた。
俺も、その場所を守ってみたい。俺に初恋を教えてくれた彼女が暮らしてきた、その世界を。
「罪を償って、恩を返して……いつか、二人でヒーローになろうな。狩谷」

△

こうして、桜田家に仇なす敵は潰え、宋響学園に平和が戻った。

破壊された校内の修復には、急ピッチでも一ヶ月は必要とされ、その間はひと足早くの夏休みとなったのだそうだ。

……といっても、夏休みが終わる頃までは入院必至な俺には関係なかったりする。まあ、補修を免れる口実が出来た点はよしとするか。これぞ怪我の功名。

今回の件の全貌は桜田姉弟によってキッパリと告発されたが、不祥事の発覚を恐れたヒーロー協会による揉み消しが行われ、校長にはほとんどお咎めはなかった。

それでも舞帆と桜田からの叱責は凄まじかったらしく、結局は妙にやつれた表情で早めの終業式を終えたのを最後に、「一身上の都合」ということで、桜田寛毅は校長を「辞任」することになったという。

狩谷と所沢の処遇に関しては、事件の経緯を鑑みての酌量と、姉弟と俺の弁護、そして再犯防止と確実な更正を求めた達城の意見により、懲役十一年の実刑判決に留まった。どうやら、狩谷とヒーローコンビを組めるのは、早くても俺が二十九歳になるまではお預けらしい。

また、桜田はこの件でかなり責任を感じたらしく、間もなくしてライセンスを返上。ラーベ航空会社専属コマーシャルヒーロー・ラーベマンは、表舞台から姿を消すこととなった。

そして、俺はライセンスを狩谷に託したことにより、ヒーロー活動においては事実上の無期限休業となった。以降、セクレマンの変身システムは、達城が今回の不祥事をダシに行わせた試験に合格して、Bランクライセンスを取得した舞帆に引き継がれた。紆余曲折を繰り返し、ようやくセクレマンが本来の姿に戻ったのだ。

セイサイラーが大破した今では、専用の変身ブレスレットを使っ

ての生裁軽装にしか変身できないが、それでも彼女は俺の分も頑張ると言ってくれた。元々狩谷達を止めるためだけにセクレマンになった俺にそれを言っても若干的外れになるような気もしたが、俺のために力を尽くしてくれる、その誠意は眩しいほどありがたいものだった。

……それに、セクレマンの生裁軽装になった時の彼女は、とても目の保養になる。ピチピチのボディスーツ故に、あらわになるボディラインがたまらな――

「天誅ッ！」

「がふあ！」

真夏の太陽が照り付ける炎天下の病院で、本の角がぶつかる音と俺の短い悲鳴が響き渡る。

「あ、あのですねぇ舞帆さん？　いくらなんでも重傷者を本で殴るのはひどいんじゃないかな～？」

「今、エッチなこと考えてたでしょ！　ダメよ船越君、そんなんじゃいつまでたってもろくな大人にならないわよ！」

「ホントにすまないわねぇ、舞帆ちゃん。うちの路郎が迷惑掛けてばっかりで」

「い、いいえいいえ！　同じ学び舎で過ごす同級生として、当然のことですから！」

母さんめ、こんな時に痛いとこ突きやがって……！　何も言い返せず俯くしかない俺が情けないっ！

「もうっ！　そ、その、私というものがありながら――じゃないっ！　私の見てる前でそんなふしだらなこと妄想してニヤニヤしてるなんて、いい度胸じゃないの！　どうせまた平中さんか文倉さんのことでも考えてたんでしょ！」

「ち、違うよ！　俺はお前のことで――！」

「――えっ！？」

そこで慌てて口をつぐんだが、もはや手遅れだったようだ。
火山の噴火が目前に迫っているにも関わらず、俺は半分寝たきり状態で、逃げる余地がない。
舞帆は爆発寸前に紅潮させた顔で何かを言おうとしている。これは間違いなく噴火の前触れだと、俺は耳を覆った。

「ふ、ふなこし君……の、ぷわあぁ～か……」
だが、溜まりきったマグマの熱に、火山自体が耐え兼ねたらしい。限界突破のオーバーヒートを起こした舞帆は、熟れたトマトのような真っ赤な顔のまま、バタリとその場に倒れ込んでしまった。
「うおおいッ！？　舞帆ッ！？」
「あら？　舞帆ちゃん、暑いから熱でも出たのかしら？」
「冷静に分析してる場合かッ！　医者ァーッ、医者を呼べェーッ！」

予想外の事態にテンパる俺の悲鳴に駆け付けてきたのは、危機感知能力に秀でた優秀な医師……じゃ、なかった。
「船越さーんっ！　差し入れのピザでーすっ！」
「ほら、瑳歩郎！　あの人がパパですよっ」
俺の前にやって来たのは、出前のごとくピザを持ってきた平中と、瑳歩郎になにか引っ掛かることを吹き込んでいるひかりだった。
……平中、気持ちは嬉しいが今は昼の一時だ。昼食を摂ったあとにピザを食えと申されるか。
それにひかり、瑳歩郎から見て俺は「叔父」だ。断じてパパではない。パパ代わりになりたいけどパパじゃない！

「ひかり、言っておくけどね……私、船越さんだけは譲れないの。待っててね。すぐに瑳歩郎君のイトコ、産んであげるから」
「ふふふ……花子。一つ教えてあげる。瑳歩郎にとってはね、路郎君はパパなの。そう、私がママで、路郎君はパパなのよ。ふふふっ……」

お見舞いの言葉でもくれるのかと思いきや、何やら俺を完全放置でどす黒い睨み合いを始める二人。
おいおい、お前ら親友だろうがっ！　瑳歩郎もポカンとしてるぞ！
「こんにちは……って、あらあら、随分と賑やかね、路郎」
今度は達城がノックもなしに入ってきた。いや、賑やかもなにも騒いでるのは、口論を始めた平中とひかり、あと途中からビヨーンと跳ね起きてそこに加わった舞帆くらいなんだが。
「私は路郎君の恋人なんですよ！　ほら、瑳歩郎も路郎君のことはパパって呼ぶのよ！」
「だぁ、だぁ」
「なにを事実改変して子供に吹き込んでるんですかぁ！　船越君は私のためにヒーローになったんです！　故に私のヒーローなんですってばぁ！」
「いつも船越さんを怒鳴ってどついてばかりの人がなにを言うんですかっ！　私だったら、まずたくさんデートして、それから両親に紹介して、それからそれからっ……」
熱く語り合う彼女達。なにを話してるのか、正直に言えば無茶苦茶気になるのだが、輪に入り込める空気じゃない。
「やれやれ、おっかないオーラがところせましと病室を支配してやがるな」
「そう？　あなたからすれば本来は天国のような状況のはずなんだけど」
「どう解釈すりゃ、あの三つ巴のバトルロワイヤルがそう見えるんだよ……まったく、狩谷が可愛く見えるくらい――」
達城の物言いに呆れて病室の窓から、快晴の空へ目を向けた瞬間。
俺の表情は冷水をぶっかけられたマグマのように、カチンコチン

に凍り付く。
「ふ、な、こ、しぃぃぃーーーっ！」
「か、狩谷ィッ！？」

病室の窓を蹴破り、まさかのご本人乱入！　噂をすればなんとやらとは、まさにこれか。
「聞いたわ、聞いたわ、聞いたわ！　大事なことだから三回言ったわ！　アンタ、アタシのこと、可愛いって言ったわよね！？　そうよね！？」
狩谷は感極まった表情で、鼻が触れ合いそうになるほどの距離まで迫って来る。
近い、近いって！　柔らかい膨らみが当たっておるしィィッ！
「おいおいちょっと待てっ！　何でお前がここにっ！？　懲役十一年とやらはどうした！？」
「へっへー、俗に言う仮釈放ってやつよ！　そうなったらアタシがどこに行くかなんて、考えるまでもないでしょーが！」
なら普通にドアから入れ！　器物損壊で罪を増やすなーッ！

「か、狩谷鋭美ッ！？　どうしてここに……っていうか何で船越君にそんなにベタベタくっついてるのよ！　離れなさい！」
「べーだ、アタシと船越は十一年後にはヒーローコンビになって、末永く幸せになるのよ！　だからたまに仮釈放でこうして会いに来て……こうしてやるんだからっ！」
さらに狩谷は俺の頭をその豊満な胸に抱き寄せ、離すまいと両腕で締め付ける。
う、嬉しいようで苦しい……し、死ぬ……！
「な、な、なんですってー！？」

「え、鋭美ッ！　じ、路郎君から離れてよぉぉっ！」

狩谷の妙な宣言と衝撃的行為に絶叫を上げる舞帆を押し退け、今度はひかりが（涙目で）食ってかかる。同じ孤児院出身の者同士による謎の対決だ。

この二人は、既にお互いの背景と現状を、裁判や面会を通して把握している。ひかりは、狩谷が罪を償って更正すると宣言したとき、快く彼女を許し、和解したという。

それでやっと上手くいくと思えば……なんなんだ、この状況は。ていうか、そろそろ離してくれ……い、息がッ……！

「……ひかり、アンタが船越を好きだって気持ちはわかる。それはアタシも同じだから。こいつのことを知るまで、アタシはアンタの恋路を応援してやろうって思ってた。けどさ……やっぱり好きになっちゃったら、こうするしかないわよッ！」

一瞬だけ解放され、狩谷がなにかを喋っている間に呼吸を整えていた俺だったが、彼女がなにかを叫んだ瞬間、再びそれを封じられてしまった。

――しかもそれは、とても柔らかく暖かい、不思議な口封じだった。俺の唇を包み、そこから温もりを伝えて来る。

その時だけは、耳に響いて来る舞帆やひかりの悲鳴が、気にならなかった。そのくらい、心地好い雰囲気を感じていた。

それが何だったのかを把握する前に、狩谷は真っ赤な顔で俺に微笑み、「もう時間だから」と言い残し、蹴破った窓から飛び降りて行った。

わけがわからず、呆然としている俺。

そんな俺を、殺気立った眼光で睨みつける、三人の少女。

そして、生暖かい視線で見守る、二人の母。

次の瞬間、病室に一人の少年の断末魔が轟いたのは言うまでもあるまい。

――俺が、なにをしたっていうんだよ？

終章　セクレマン、歌う

十月。二学期に入り、一ヶ月余りが過ぎたこの日。
宋響学園は年に一度の学園祭を開催していた。
未だに敷地の所々が修理中のまま始まった学園祭だが、生徒達は特に不自由を感じることなく、出し物などで大いに盛り上がっていた。

もちろん、それは俺も同じだ。
「船越、準備はオーケーか？　のど飴舐めるか？」
「今さらそんなもん口にしてどうすんだよ……それより、俺がいない間もちゃんと練習してたんだな」
「あったりまえよ！　我が宋響学園の専属ヒーロー・セクレマンの主題歌を、俺達が手掛けようってんだからな！　バンドやってる身として、手なんか抜けるわけがねぇッ！」

……そう、俺はこの日、セクレマンの主題歌を歌うことになっている。
話が舞い込んで来たのは、バッファルダと初めて戦った時より少し前くらいの頃だ。達城がセクレマンの主題歌を作ろうと言い出し、「学園のヒーローなんだから、プロの歌手より生徒が歌う方が様になるでしょ？」との言い分から、彼女による学園への根回しを経て、俺がその曲のボーカルを務めることになったのだ。
自分が変身するヒーローのテーマソングを自分で歌う。なんだか変な気分だった。

だが、今となっては悪い気はしない。
今の俺はヒーロー稼業を休業し、セクレマンは舞帆が引き継いでいる。彼女の成功を願って、ヒーローとして送り出すには最高のイ

ベントだろう。
俺も彼女に負けじと、退院してからはこの曲の練習に打ち込む傍ら、加室孤児院でひかりと一緒に働き、瑳歩郎の面倒も見ている。さらに、平中と共にピザファットで宅配のバイトも始めて、セクレマンとして稼いでいた頃に貯めていた給料と、バイトで得たそれを瑳歩郎の養育費に注ぎ込んでいる。
そうして休日にはひかりや瑳歩郎と一緒に、家族のような時間を過ごした。初めは三人だけだったが、いつしか舞帆や平中、そして仮釈放された時には狩谷も輪に入り、和気あいあいと幸せな時間を過ごしていた。

――そう、本当に平和になった。守れたのはこの学園からそう遠くまで行かない、決して広いスケールではない平和だけど、俺の「ヒーロー」としての果たせる責務は果たせたと思いたい。
舞帆は、校長だった父の罪深さを知って、それでもくじけることなく、この学園を自分の手で守っていこうと誓い、セクレマンを継いだという。
それなら俺は、そんな彼女の「ヒーロー」としての「旅立ち」を、見送ろうと思う。例えこれから何があっても、宋響学園を統べる桜田家の人間として、この学び舎を守っていけるように。

「生徒会長、本当によろしいのでしょうか！？」
ふと、控室で本番を待つ俺の耳に、外からの話し声が聞こえて来る。この声……生徒会副会長だな。
「大丈夫、大丈夫。船越君なら何の心配もいらないよ」
「ですが！　あの生徒は入学当初から手の付けられない問題児で有名ですよ！　そんな不良が、こともあろうに、今や生徒の間では学園のシンボルとも言われているセクレマンの主題歌を歌うなど、僕には到底理解できません！」
「今の彼はそうなのかい？　少なくとも、僕は彼を信頼しているし、

上の人達も彼を買っているのは間違いないんだよ。でなきゃ、セクレマンの主題歌を彼に歌わせるなんて提案、持ち上がって来るはずがないだろう？」
「し、しかし！」

「不安なら、なおさらしっかり見てあげようじゃないの。船越路郎君の、生まれ変わりっぷりを、ね」

笠野のその言葉を最後に会話は途絶え、やがて何も聞こえなくなった。
――大した信頼じゃないか、生徒会長さん。もっとも、俺を買ってる上の人間なんて桜田家の縁者だった達城くらいのもんだと思うけどな。
「……いいぜ、やってやるさ。舞帆にしこたま根性叩き直されてきたんだ、もう昔の俺じゃない」

そして迎えた本番。ボーカルの俺を中心に、ギターやベース、ドラムの担当者がそれぞれのポジションにつく。
体育館の幕が開くと、高校のそれとしてはかなりの広さであるにも関わらず、集まった生徒は、その全体を埋め尽くそうとする勢いだった。よく見れば、人数が多過ぎる余り体育館に入れない生徒まで、食い入るように俺達に注目している。

目を凝らしてみれば、ここの生徒じゃない平中やひかり、狩谷までもが歓声とともに俺の名を叫んでいるのが見えた。その時に目頭が熱く感じたのは、きっと気のせいじゃないだろう。

正直に言えば、かなり予想外な規模だろう。普通なら間違いなくビビる大人数だが、不思議とまったく緊張がない。

――こんなに、俺を見てくれている。こんなに、俺に期待してくれている！　こんなに、信頼されている！　これなら……俺はやれる！

舞帆が支えてくれなきゃ、こんな景色はありえない。こんな景色、俺の目に映るはずがなかったんだ。

俺は観衆を一瞥し、マイクを取る。

「俺達には、ヒーローがいる」

まず発した第一声は、それだった。

誰ひとり騒ぐことなく、みんなは固唾を飲んで、俺を見詰める。

「そのヒーローは、きっと俺達の知らないところで、学園を守るために戦い抜いてきたんだと思う。俺は、そのヒーローの『今まで』を称えて、『これから』を応援したい。そう、願ってる」

――そうだ。

舞帆は不良に身を落としていた俺を毛嫌いせず、立ち直らせてくれた。彼女の尽力がなければ、今日の平和はなかったかもしれなかったんだ。

彼女こそ、この学園を守り抜いた真のヒーロー。そして俺は、そんな彼女を称賛し、これからの活躍を願って鼓舞しようと思う。

……それが、セクレマンだった者としての、最後の大仕事！

体育館ステージから見える、二階の客席。

俺から見て、その中央で立つ彼女に面と向かって、俺は歌う。

「だから、歌おうと思う。彼女のこれからを信じて！　――『生裁戦士セクレマン』ッ！」

俺の願いを込めた一言を合図に、勇壮なイントロが観衆を沸かせる。

この俺、船越路郎の戦いは終わりを告げ、セクレマンの戦いは新たな局面を迎える。

そのために俺にできる、精一杯の激励。

それを真正面から受け止めてくれた舞帆の頬を、感涙が伝う。

桜田舞帆。

――俺は、君に会えて、よかった。

……だから、ありがとう。そして、これからはずっと――笑顔でいてほしい。

その想いを歌詞に乗せて、俺は力の限り歌い続けた。

それが届いたのかは、わからない。

激励になったのかも、わからない。

確かなのは、込み上げて来る感情が溢れ出すように涙する、舞帆の微笑が見えていた、ということだけだ。

登場人物

船越路郎（ふなこしじろう）／セクレマン

物語の主人公。私立宋響学園の三年生であり、年齢は１８歳。普段は自虐的で飄々とした性格であるが、ここぞというところでは熱血漢な一面を見せる。

黒髪の端々に赤いメッシュがかかったような、特徴的な頭の持ち主であるが、これは本人が自分で真紅に染めていた髪を本来の黒に戻そうとして失敗した結果である。元不良であるが現在は更正に努めており、生徒会に身を置くエリートである桜田舞帆とともに行動している。

とある理由でヒーローを志し、現在はＦランクヒーロー「セクレマン」として活動しているが、それは身体的な苦痛を伴うものであった。それでも彼は、ただ一つの目的のために、来たる日に向けてヒーローとしての鍛錬を続けている。

身長は１６５ｃｍと低めだが、本人はその点に関してはさほど気にしていない。

桜田舞帆（さくらだまいほ）

物語のヒロイン。生まれ付いての茶髪を纏めたポニーテールが特徴。身長は１６５ｃｍ。私立宋響学園の三年生であり、年齢は１８歳。正義感が非常に強く、困っている人や不正を見過ごせない性格であり、それゆえに堅苦しい印象を与えている節がある。それでも校内での人気は非常に高く、ファンクラブまで存在している。

過去に、決死の思いで自分の窮地を救ってくれた路郎に対しては特別な感情があり、何かと彼を気に掛け、どうにか真人間に更正して欲しいという一心で教導に奮闘している。その一方で、彼への想いを素直に現せないがためにつっけんどんな態度をとってしまいがちでもある。

平中花子（ひらなかはなこ）
　路郎の中学時代の同級生であり、宋響学園とは別の高校に通っている少女。セミロングの髪型が特徴。身長は１６２ｃｍ。１７歳。献身的で素直な印象を与える一方で、想いを寄せる路郎に対しては、いささか大胆なアプローチを仕掛けることも。
　アルバイトに精を出す、活発な一面もある。また、達弘（たつひろ）という弟がいる。

桜田寛矢（さくらだひろや）／ラーベマン
　宋響学園を飛び級で卒業したエリートであり、舞帆の弟でもある。美男子であり、年齢は１７歳。身長１８５ｃｍ。姉と同様に強い正義感の持ち主であるが、勝利に固執し、歪んでいる父の影響を僅かながら受けている一面がある。舞帆と比べ、幾分性格は穏やか。
　ラーベ航空会社の専属ヒーローである、「ラーベマン」に変身する。

笠野昭作（かさのしょうさく）
　宋響学園の生徒会長であり、ある企業の御曹司でもある。身長１７８ｃｍ。年齢１８歳。寛矢に劣らぬ甘いマスクの持ち主である。落ち着いた物腰で、学園で起きる事件には冷静に対処する能力を持つ。そのため生徒からの信頼は厚く、舞帆も彼を尊敬している。
　舞帆が頻繁に構っている路郎に対して、個人的な興味を寄せている。

桜田寛毅（さくらだひろき）
　舞帆と寛矢の父であり、宋響学園の校長を務める。身長１８３ｃｍ。年齢５６歳。歴史ある桜田家の栄光を重んじる厳格な性格であり、その「成功」のためならあらゆる手段や犠牲をいとわない。
　また、舞帆の心を奪った路郎を快く思っていない。

達城朝香（たつき あさか）
　宋響学園の地下にある、セクレマンの秘密基地に住んでいるグラマーな女性。身長１７５ｃｍ。年齢不詳。路郎以上に飄々とした性格であり、扇情的な言動が目立つ一方で、大切な人の身を案じ、それゆえに怒りをあらわにする一面も。
　セクレマンの設計者であり、ヒーローとして活動する路郎のサポートもこなすことができる。

文倉ひかり（ふみくら）
　路郎の中学時代の同級生であり、彼の初恋相手でもある。ストレートロングが特徴。身長１６０ｃｍ。現在の年齢は１８歳。おっとりした物腰であり、大人しく、儚げな印象を与える。気弱な性格であるが、ハプニングがきっかけで知り合った路郎と触れ合っていくうちに、甲斐甲斐しく構ってくれる彼に想いを寄せ、次第に相思相愛となっていくはずだったのだが……。
　両親と死別して以来、加室孤児院と呼ばれる養護施設で暮らしている。

文倉瑳歩郎（ふみくら さぶろう）
　ひかりが養育している男の子。年齢は2歳。無邪気な性格であるが、ある人物を思わせる名前を持っていることから、なんらかの関係がある可能性が……。

船越弐郎（ふなこしいちろう）
　路郎の実兄。身長１７９ｃｍ。年齢は２７歳。女遊びを生きがいとし、毎日女を作っては、その日のうちに捨てる日々を送っている。
　自分が気に入った女はあらゆる手段を使って手に入れようとする卑劣漢であり、弟に心を寄せるひかりや、舞帆を狙う。

船越紗夕（ふなこし さゆ）
　弍郎と路郎の実母。年齢は４９歳。夫の零荏郎（ぜろう）と死別してから、女手一つで息子達を育ててきた。女に執着したり、不良に身を落としたりと問題の絶えない二人の息子を案じる余り、実年齢以上に老け込んでしまっている。
　最近、舞帆の指導によって真面目になり始めている路郎のことを気に掛けている。

所沢克己（ところざわかつみ）／バッファルダ
　かつてヒーローを目指し、ライセンス試験に失敗したがために、ヒーローに反逆を企てた男。身長１９６ｃｍ。年齢２５歳。
　攻撃的かつ粗暴な性格であり、とある事情から宋響学園や桜田家、そして彼らに味方するセクレマンを激しく憎悪している。

狩谷鋭美（かりたに えいみ）／ラーカッサ
　ヒーロー協会からヒーロー能力を盗み出し、バッファルダこと所沢と共謀して、宋響学園の破壊と桜田家の滅亡を企てた少女。身長１６９ｃｍ。年齢１９歳。粗野で恫喝的な言動を見せ、鋭い眼光で女だということを感じさせない威圧感を発揮する。
　実は過去に両親に捨てられ、それが原因でいじめられたことがある。その際に自分を助けてくれた文倉ひかりには、友人として厚い信頼を寄せている。

横山（よこやま）
　現在の路郎のクラスメート。年齢１８歳。路郎がセクレマンの主題歌を歌うことになった際には、バンドのメンバーとして協力していた。

事実上のあとがきと、これからについて

どうもこんにちは。
最近登録したばかりで、かれこれ三ヶ月くらいしか経っていない若輩者のオリーブドラブという者です。

古き良き時代まで遡れば、「キューティーハニー」。ごく最近であれば、「魔法少女まどか★マギカ」。時代を問わないなら、戦隊ヒーローのピンク。
仮面ライダーやウルトラマンのような、基本的に男が務める「変身ヒーロー」がいるように、女の子が変身して悪と戦う、いわゆる「変身ヒロイン」は長きに渡り存在してきました。
しかし、今の私が暮らしている現代社会の偏見で見るなら、女の子は本来か弱いもの。とてもじゃないが、得体の知れない敵と戦わせるなんてかわいそう。男心として、私はそう思っていました。
痛みも、苦しみも、できるもんなら代わってやりたい！　私のようにそう思ったことがある人ならおそらく一度は考えたことがあるかもしれないんじゃないでしょうか。
「じゃあ代わってやれば？」と。

そんな愚考が端を発して生まれた「生裁戦士セクレマン」、いかがだったでしょうか？
何を血迷ったのか、頭の中だけでプロットや設定を全部網羅しようと右往左往した結果、ぐちゃみそな展開の繰り返しだったような気もしつつ、なんとか完結までこぎつけることができました（もしかしたら今から見返したら「あっ！ここんとこ書けてねぇ！」なんてところがあるかも）
元々私は特撮ものが好きな方で、ライダーや戦隊を毎週チェックしてる日々を送っていたんです。

そんな折、この作品の原作である犬威赤彦先生の「ＲＡＴＭＡＮ」と出会い、すっかりのめり込んでしまった次第なわけです。
完全に勢いと思い付きだけで突っ走った今作だけに、かなりお見苦しいところはあるんじゃないかと思っております。特に、第三章以降の展開はかなり不快に感じられる方もいらっしゃったのではないでしょうか。
もしそういう方が今、このあとがきを読んでくださっているなら、この場を借りてお詫び申し上げたいと思っております。

申し訳ありませんでした。

さて、これにて本編の物語は完結……ということになるわけなんですが、まだやり残したことはあるとも思ってるんです。結果として、路郎の身の上と桜田家の暗部しか描けなかったわけなんで。
舞帆と笠野くらいしかろくに登場しなかった生徒会や学園生活、平中が路郎を好きになった理由など、まだまだ描写不足な点が目白押し！
なのでこれからは、本編では描けなかった日常風景などを、いわゆる「番外編（サイドストーリー）」という形でお送りしていこうかと思っております。
本編を読んで、何か気なったことや意見等があれば、なんなりと仰ってください。今後の執筆に当たっての教訓としていきたいので。

まだまだ未熟でポンコツな作者ですが、これからもよろしくお願いします！

平中花子の恋路

「ブー子ちゃ～ん、今日も掃除当番、よっろしくぅ！」
嫌味ったらしい口調で私をからかう男子達が、楽しげな様子で教室を出ていく。
その後ろ姿を忌ま忌ましげに――そして羨ましげに眺める私の名前は、メスブタの意味を持つ「ブー子」……もとい、平中花子。
デブで不細工で、男女問わず全てのクラスメートからバカにされてる中学二年生。
気弱でデブで根暗な私は日課のように掃除当番を押し付けられては、いつものように独りで箒を掃いている。
そんな私と友達になろうなんて物好きはほとんどいない。だから二年生に上がってから私はずっと独りで、隠れて好きな本を読む毎日を送っていた。
去年の頃は一人だけ私に良くしてくれる友達がいたけど、その娘とクラスが離れてしまってからは孤立無援の状態だ。
学校が終われば会うこともあるけど、心配性なあの娘のことを考えたら、いじめの相談なんてできるはずがない。

早く終わらせて、家に帰ろう……そう思っていた私は、クラスメートが分別を考えずに乱雑に捨てていたゴミ箱をそのままで運ぼうとした。いつもいじめられてるんだもん。たまには、これくらいのわがままだって――
「おい、平中！　可燃ゴミとプラゴミはちゃんと分けておけよ！」
「す、すみません！　で、でも、これは私じゃ――」
「誰が捨てたかの問題じゃないんだ！　ゴミがバラバラなら掃除当番のお前が整理するんだ！」
「でも、本当なら今日の掃除当番は私じゃないのに……」
「言い訳をするな！」

「……は、はい」
――ダメだよね、やっぱり。担任の先生に見つかって、怒られちゃった。
先生は私がクラスで孤立してるのはわかってるはずなのに、全然助けてくれない。
それどころか、いつも私を叱るばかり。まるで、先生まで私をいじめてるみたいに思えて来る。
私みたいな出来損ないが面倒……ってことなのかな。

結局、私はそのあとゴミを集めるところの前で、自分の手でゴミを分別していくことになった。
二つのゴミ箱から漂う悪臭に顔をしかめつつも、私はいつもの要領で素手のままゴミの山に手を突っ込む。ねちょっとした感覚がして、気持ち悪い！　でも、自分がやるしかない……。
さっき手についたのは、吐き捨てられたガムだったみたい。腐っても女の子なのに、ひどい仕打ちだよ。
でも、仕方がない。太ってる上に顔も悪くて、いつもみんなにからかわれたり脅かされたりしてるせいで授業にも集中できないから、全部の成績も悪い。
何一つ取り柄がなく、女の子として持つべきものがまるでない私に、女が持つような気持ちがあったらいけないんだろう。
手探りでグチャグチャに捨てられたゴミを分別する中で、いきなり飛び出してきたゴキブリに悲鳴をあげつつも、私は作業を続けた。

「あれ、あそこにいるのってブー子じゃね？」
ふと、後ろから私のことを指している声が聞こえて来る。振り向かなくても、それがいつも私をいじめている男子グループのリーダーの声だとわかる。私にとっての恐怖の象徴に名指しされ、冷や汗が全身から噴き出してしまう。
「あ、ホントだ！」

「マジかよ、ゴミ漁ってやがるぜあいつ！」
「たはーっ、さすが野獣ブー子！　人間の食い物じゃあ物足りないってか！？」
ゲラゲラと私を嘲笑する男子グループの笑い声を背に、何も言い返せずに私はただ黙々と分別を続ける。
――あんた達がちゃんとゴミを分けなかったせいでこうなってるのに、なんでそんなこと言われなきゃなんないのよっ！
それが、私の本音だった。でも、口にはできない。
怒りをあらわにしても、「何そんなに切れてんの？　ばっかじゃねー」とかわされるだけだ。それに、そんなことをしたらこの先、もっといじめられる。
今はただ、それが怖かった。
「野獣だったらこういうのも食うんじゃねーの？　そらっ！」
「――ひっ！」
その発言内容と掛け声から、私は即座に男子グループが後ろから物を投げつけてきたのだと察した。私はせめて頭は守ろうと、身を屈めて両手で頭を抱える。
――その時だった。私が、あの人と出会ったのは。
「いてぇ！」
「えっ！？」
頭に物がぶつかる瞬間に怯えていた私は、男子グループとは違う少年の声に驚き、思わず振り返ってしまう。
そこには、本来私に当たるはずだったペットボトルを顔面に食らい、顔を押さえて唸る男の子がいたのよ。

彼は予想外だった人物に当たってしまったことで、慌てていた男子グループの面々に「痛いじゃないかコノヤロー！」と怒鳴り、持っていた鞄を振り上げて男子グループ目掛けて突撃しはじめた。
男子グループにとって彼は危険な存在なのか、連中は彼に「わ、わりぃー！」と謝りながら、ダッシュで退散してしまった。

――もしかして、助けてくれたの？　私のために……！

「全く、こないだシメてやったばかりだってのに、懲りずにゴミのポイ捨てなんてセコい真似してくれちゃって！　通行人に当たることを考えろっつーの！」

「……ハァ」
――別にそんなことはなかったみたい。ていうか、私の存在にすら気づいてないみたいだった。期待してしまった自分が情けなくて、思わずため息が出ちゃう。偶然通り掛かった所で、たまたま私に投げつけられたペットボトルが顔に当たっただけ……らしい。
「あれ？　アンタ誰は確か、隣のクラスにいた……」
その時、ようやく私に気づいた男の子が、こっちの顔を覗き込んで来る。こ、ここまで男の子と顔を近づけたのって、はじめてかも……！？

「『武羽子（ぶうこ）』さんだっけ？　あいつらが言ってたな。よろしく！」
――って、この人まで、私のこと「ブー子」って言うんだ。たまたまとは言え助けてくれたんだから、ちょっといい人かと思ってたのに！
「しかし変わった名前だよなぁ、アンタ。でも、『武羽子』って響きがカッコイイから羨ましい！　俺なんて『路郎』だぜ？」
「――ほっといてよ、バカ」
「え、なに？　なんかマズイこと言ったか、俺？」

路郎と名乗るこの男の子の白々しさが、憎たらしくてたまらない！　ちょっと顔が好みのタイプだったからなおさら！　私は助けてくれた恩も忘れて、思い切り彼をひっぱたいてしまった。
バシィッ！　と頬を叩かれ、何事かと目をパチクリさせている彼に向かって、私は思い切り八つ当たりをした。今まで感じていた不満を発散するチャンスだと思って。

――あぁ、最低だ私って。

「言いまくりよっ！　『ブー子』がカッコイイですって！？　バカにするのもいい加減にしなさいよっ！　どうせ、どうせ、私なんて、あんたの言う通り……ブタなんだからぁぁぁぁっ！」
「ちょちょ、待った武羽子さん！　何を勘違いしてるのか知らないが、俺は『ブタ』なんて……！」
「黙ってよ！　黙りなさいよ！　バカァッ！」
私はいつの間にか涙や鼻水まで垂れ流して、彼の胸をひたすら拳で殴っていた。大した威力もない私のパンチを食らっている彼は、何がいけなかったのかがわからない、という困惑した表情だ。

「死んじゃえ、死んじゃえ、あんたなんか死んじゃえ！」
「お、落ち着いてよ武羽子さん！　なんか落ちたぞ！」
「うるさい、死んじゃ――え？」

その時、ふと私の懐から一冊の本が落ちていたことに気づく。
それは、いつも私が読んでいたファッション雑誌だった。綺麗な女のモデルさんが、カッコイイ服やかわいい服を着ている写真がたくさんある、私の宝物。

いつか、自分もこうなれたら――そんな叶うはずのない夢の代わりとして、いつもこれを読んでいた。私みたいな不細工女がこんなのを読んでたら笑われるに決まってるから、コソコソ読むしかなかったんだけど。

それでも、夢を見せてくれるこの雑誌が私は好きだった。

「あっ――あああっ！」

ただそれだけに、見られてしまった瞬間の恥ずかしさは大きい。私は顔を真っ赤にしながら、涙目で雑誌を拾って両手で隠すように抱きしめる。

「ぶ、武羽子さん？　どうしたのさ？」

「……み、見た？」

膝をついて雑誌を抱いている私は、上目遣いでキョトンとしている彼を見上げる。

もし私がかわいい女の子だったら、これはこれで絵になる眺めだったかもしれない。だけど、私がこんなリアクションを取っても、滑稽なだけだ。

「……へぇ。武羽子さん、そういうモデルになりたいのか？」

興味ありげな口調で、彼は私の雑誌に注目する。

普通なら、「そんなわけないじゃない！　バカじゃないの！？」と怒鳴るべきなんだけど、この時の私はそうはしなかった。

雑誌を見られたショックで彼の言い方に怒るどころじゃなくなったせいか、私は彼への怒りについて、水を掛けられたように冷静になっていた。

落ち着いて考えてみれば、彼は私の本名を知らないはずだし、態度にも悪気が感じられない。「ブー子」呼ばわりするのも、単に他の呼び方を知らないだけなのかな……？

だとしたら、カッとなって喚き出した私がバカみたいじゃない。

恥ずかしくてたまらないっ！

「そ、そうよ！　あんたは笑うでしょうけど、『キレイになりたい』っていうのは女の子にとってはなくちゃいけない夢なんだからねっ！」

――だから、せめてものお詫びとして、正直に話してあげることにした。それに、醜い私を前にしてここまで友好的に接してくれる彼のことを、ほんのちょっぴり――信用したくなっちゃったから。

それでも、一度口にしてしまうと不安な気持ちになる。ここで彼に笑われてしまったら、「やっぱり言うんじゃなかった」と後悔することになるから。

「そいつはすごいな！　アンタが雑誌に載ったら買うぜ、俺！」

でも、彼はものすごく感心したような顔で私を応援した。心配する私が間抜けなくらいに。

今さっき会ったばかりの彼の言うことを、ちょっと優しくされただけで信用してしまう。我ながら単純だとは思うけど、それでも私は嬉しくてしょうがなかった。

私は縋るように彼の笑顔を伺う。もしかしたら――もしかしたらだけど、彼ならなってくれるかもしれない。私の、第二の友達に。

「ほ、ほんとう？」

「ああ！　……あー、でも、雑誌に乗る前に痩せないとな。よし、俺がプロデュースしてやろうっ！」

「ええ！？」

「名付けて！　『武羽子さんダイエット＆ａｍｐ；モデルデビュー大作戦』ッ！」

「だっさ！　もうちょっとマシな名前考えなさいよ！　ていうかブー子って呼ぶなー！」

「ぐはぁっ！？　お、俺が一体何をっ……！？」
こうして、ちょっと失礼だけど、とても優しい男の子――船越路郎との、毎日が始まった。

まず昼休みに、カロリー計算がなされたヘルシーなお弁当を作ってきては「毒味せよ！」と私に、いわゆる「あ～ん」の要領で食べさせて来る。おいしいしうれしいけど、もう少し女心を考えてほしい。
向こうは無意識にやってるみたいだけど、「あ～ん」は普通、恋人同士でするものよ。……わかっててやってるのかな？　そんなことないよね？

「どうだ、美味いか？」
「――うんっ、おいしい！　……あ、べ、べつに嬉しいわけじゃないんだからねっ！」
「あれ？　口に合わなかったのか？」
「お弁当のことじゃないわよっ！」
「じゃあ何さ？」
「い、言えるわけないじゃない、バカァッ！」
「な、なんかよくわかんないんですけど、とりあえずごめんなさ～い……」
彼が「好き」――ううん、「大好き」って気持ちが本人に知られると、恥ずかしくて気まずくなる！　だからなのか、ついつい素直じゃない態度になってしまう。そんな自分が、どうしようもなく情けなかった。

次に、体育の時間。
私達は隣同士のクラスなので、合同で練習することが多い。そこで、準備運動の一環として毎回こなしている走り込みで、彼は私に合わせたペースで走ってくれた。一緒に走る仲間になることで、連

帯感を持って走りやすくするためだ。
私は彼の背中を追い、必死に体を動かした。途中、先生が私に合わせて走る彼をサボってると勘違いして怒声を上げている様子も目に入ったけど、彼は気にせず私のペースに同調してくれていた。
悔しくてたまらないほど惹かれる背だけを見つめて、私はただ走ることだけを頭に入れて、脚を動かしていた。ここまで私に尽くしてくれる彼の優しさに、なんとしても応えようと。

「おいおい、そんな無茶するなよ」
「無茶なんてしてないっ！　してないんだからねっ！」
「――そうか。じゃあもう少しだけ、一緒に走ろう」
「……も、もう！　デブに色目なんか使ってんじゃないわよ！」
「え？　いや、俺は何も……つーか『色目』って何？　俺の目って色付いてんの？」
「……バカ、鈍感っ！」
「ええーっ、わけわかんないまま怒られた！？」
走りながらこんなやり取りができるなんて、今までは考えたこともなかった。一人で走ってる時には、ただ「しんどい」ということしか、頭になかったんだから。

おかげで、彼に会う以前では一度も完走できずに投げ出していた走り込みを、初めてクリアすることができた。彼は私の努力を讃えてくれたけど、それ以上に私は彼に感謝したかった。
そのため、なんだかお互いの頑張りを讃え合うような恰好になってしまい、それがたまらなく可笑しくて、楽しかった。

放課後も帰りに寄り道して一緒に山を登ったり、商店街を一周したりして、運動量を共有した。もし私一人だったら、到底続けられなかっただろうね。彼が傍にいたから、私は続けられた。
「え！？　『武羽子』って本名じゃなかったのか！」

「当たり前でしょ！　私のことなんだと思ってたのよ！」
「そっかー……ごめんな。じゃあ、アンタの本当の名前はなんて言うんだ？」
「うーーそれはダメ！　言えないっ！」
「なんでさ？」
「あんまり可愛い名前じゃないからっ！」
「いいじゃないか、アンタ自身は可愛いんだから」
「えっ！？　な、な、な……！」
「どうした？　顔が赤いけど」
「なんてこというのよ、バカァァーッ！」
「うええっ！？　す、すいませんでしたーッ！」
こうやって二人で一緒に歩いて、騒いで、話して、笑って。それは友達の少ない私にとっては格別の幸せに繋がり、彼の笑顔からも元気を貰った。

私一人では、叶えられなかった夢。そこに届く可能性を、彼は与えてくれた。

彼あっての叶う夢なら、叶ったあともずっと彼の隣にいたい。そんな、身勝手ながらも幸福絶頂な願いを抱くようになる頃には、私達は三年生に進級していた。

そして、私は夢に向かっての「大変身」を完了させていたのだ。

彼と二人三脚で一年間近く続けた「ダイエット&モデルデビュー大作戦」が功を奏して、私は劇的にスリムになり、ハッキリと自信が持てるようになるほどの美貌を手に入れることができた。自信を持つようになってからは友達も自然にできるようになり、自分自身が明るくなっていくのを実感した。
顔を含めた全身の贅肉を取り払った私の姿は、もはや完全に別人

のようだった。全ては、ひたすら自分の夢のために奔走してくれた彼のおかげだ。
さらに、「大作戦」を始める以前から読み込んでいたファッション雑誌の知識のおかげで、納得のいくスタイルになってからの「オシャレ度」が急上昇したのよ。かつて私を「ブー子」と呼んでからかっていた男子グループは、今までの態度を一変させて私に話し掛けるようになった。
「いやぁ、マジ可愛いな花子ちゃん！　今度一緒にカラオケ行かね？　ぜってー楽しいからよ！」
「ちょーどいいことにさ、映画館のチケットが余ってるんだよー！　せっかくだから一緒にどう？」
「最近話題のデートスポットがあるって知ってる！？　良かったらちょっと二人で下見にでも行ってみない？」
もちろん、そんな彼らのお誘いに応じるつもりなんてない。私を誘っていいのは、彼だけなんだから。

――だけど、三年生になってクラスが大きく離れてしまってから、彼には会うに会えなくなっていた。
というのも、彼に「もう充分人気者だし、俺がいなくても大丈夫だろ？　雑誌に載ったら教えてくれよなっ！」と、さも「やり切った」という感じの顔で言われてしまったせいだ。
もう私の夢は自力で果たせるんだから、自分の出る幕はない、と彼は言うけれど、そんなことはない。

私の夢は、彼との関わりで少しだけ変わった。モデルにはなりたい。なりたいけど、問題はそこから先だ。
彼のような男を、他の女の子が放っておくはずがない！　きっと私がいない間に、彼を狙う人が出てくるはず。

――だから、私は何よりも彼と結ばれたい。他の誰のものでもな

い彼の隣で、夢を叶えたい！　それこそが、今の私の夢なの。

結局、受験勉強に勤しんでも彼や私の友達と同じ高校には入れなかったけど、それでも私は諦めなかった。

「ピザファット」でバイトをする傍ら、モデルについての勉強も始めたのよ。

いつかファッション雑誌に載るくらいのすごいモデルになって、彼をアッと言わせるんだから！　そして、私のことが好きって言わせられるくらい、魅力的になる！

前まではデブで不細工だったから恋に臆病になっていて、素直じゃない態度だったけど……今は違う。「好き」っていう気持ちだけは、二度と裏返さない！

ファッションモデルになることと、彼と結ばれること。

二つに分かれた夢を、両方とも叶えると誓った私は、かつてあの人と二人で登った山に弟を連れていき、そこで決意表明をすることにした。

「お姉ちゃん、こんな山の中で何するの？」

「いーい、達弘？　お姉ちゃん、これから夢に向かって邁進する誓いを立てるんだからね！　証人としてそこで見てなさい！」

「はーい。お姉ちゃん頑張れー！」

無邪気な弟の応援に背中を押してもらった私は、山から見える夕暮れの空へ向かい、思い切り息を吸い込み――叫ぶ。

「船越路郎さああぁーん！　好きでぇーす！　愛してまぁあーす！

私と――平中花子と、結婚を前提にお付き合いしてくださぁーいっ！」

言いたいことを、言いたいだけ声にして、私は想いの丈を夕日に打ち明けた。聞く方が恥ずかしくなりそうなほどの盛大な愛の告白が、こだまとなって空へと響き渡る。
「お姉ちゃん、船越さんって誰？」
「あんたのお兄さんになる人よっ。ふふふっ」
自分の本名も知らない相手に告白なんて、ちょっと変かも知れないけど……別に構わないわ。

彼が――船越さんが好きって気持ちさえ誰にも負けない限り、夢だってきっと叶うんだから！

……そして、高校三年生の現在。

「うえぇえぇ～んっ！　達弘ぉ～！　また、また、また船越さんに告白できなかったよぉ～っ！」
「お姉ちゃん、元気出してー」
自宅で幼い弟に頭をナデナデしてもらいながら、私は今日も愛を伝えられなかったと嘆くのでした。

シャイガール・平中花子の受難はこれからも続……かないでよぉぉ～っ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7041s/

生裁戦士セクレマン

2011年10月10日03時22分発行